

鹿兒島県史料

玉里島津家
史料 六

解題

『玉里島津家史料六』には明治三年十二月から同六年五月までを収めている。

この時期の内容で非常に目に付くのは、島津久光あての建言・上書類が急増するということである。特に六年が目立つ。やや不正確であるが約五十件に達する。この勢いは次の七年・八年と続き、例えば七年七十三件、八年二十六件を数え、これを合計すると百四十九件となる。もちろん政府高官の意見書及び専ら藩政に関する安田轍蔵の建言等は除く。

ここでは本巻に収められた明治六年までについて考えるが、その建言者の府県別分布について八年までのものを、明記された国名・府県名・地名で見ると、北の方から次のようになる。かっこ内は現在の府県。

東北 青森 八戸(青森) 秋田 岩手 出羽神社(山形)

関東 栃木 群馬 前橋(群馬) 熊谷(埼玉) 上総(千葉) 千葉 東京

中部 浜松(静岡) 愛知 岐阜 築摩県(長野) 信州(長野) 新潟 村松藩(新潟)

富山 石川

近畿 京都 和歌山 度会(三重)

中国 津山(岡山) 芸州(広島) 鳥取

四国 名東県(徳島) 高知

九州 小倉県(福岡) 三瀨県(福岡) 佐賀 長崎 白川県(熊本) 宮崎 鹿児島

という風に、東北から九州までまんべんなく全国にわたっている。身分は余りはっきり明記されていないが、士族が多く、神官や農人と分かるものが一人ずついる。

なぜこの明治六、八年に、この様に久光あての建言書が集中するのかということは、容易に想像できることであるが、この時期久光が明治政府に入って内閣顧問、左大臣等の要職に就いたからである。とはいっても当時一般の士族層からこれほど多数の建言書を直接寄せられた人が、政府高官の中にどれほどいたであろうか。これが特に久光にみられる特異な現象であるとするならば、それはやはり久光の特殊な立場と深い関係があるとしなければなるまい。では久光の特殊な立場とはなにか。

まず久光が薩摩藩の実力者であったこと。久光は藩主でこそなかったものの、藩主島津忠義の実父で、「国父」の称号を与えられて、前藩主で異母兄の島津斉彬の遺志をつぐと称して、公武合体運動の先頭にたって一時中央政界をリードした実績を持つ。その後中央での実質的主導権を下級藩士の西郷隆盛や大久保利通に譲ったものの、決定権は依然久光の手中にあった。久光の最終的な承認を得られなければ、西郷・大久保らだけの判断では藩内を動かすことは出来なかった。特に慶応三年十一月の討幕出兵の際には、武力討幕を決意していた西郷らの行動に対し、藩内には強硬な反対論が存在して藩主忠義は九月・十月二回諭告を出して反対論の鎮静化に努めなければならなかったほどで、決して西郷・大久保万能ではなかったのである。それも九月は久光上京中で、その後久光が帰国して二回目の諭告をだしてどうにかある程度反対論を鎮めたが、最終的には討幕の密勅を出してもらって天皇の権威を借りねばならないほどであった。ともかく幕末の段階での薩摩藩の動きは、久光抜きでは何事も実行は難しかったといえよう。

次に久光は薩摩藩が主導権をにぎる形で実現した明治政府に対して、極めて強い批判的態度をとった事である。こういう事が国民の中に久光への期待感を持たせる事になったと思われ、それが久光への建言の急増となったものと思われる。

久光の政府不信ははじめ、藩政上の問題から起こった。その原因の一つは、久光に代って幕末政局のリーダーシップを握った西郷・大久保に対する不満である。彼等は幕末段階では先に見たように、久光の裁断なしで実行行為に出ることはなかった。むしろ出るとは困難であった。それが明治になると「途端に」、と言ってよいほど急に久光抜きで事を運ぶようになった(少なくとも久光にはそう感じられた)。例えば明治元年末から二年初めにかけての、鹿児島での下級士族を中心とする戊辰戦争凱旋兵士団の藩政改革・門閥打破の運動である。問題点は先の討幕出兵に反対した門閥層を排除せよというのである。門閥層の強い出兵反対にかかわらずその見込みははずれて幕府は倒れた。凱旋兵士団の意気まことに天を突くものがあった。結局彼等の要求が通って藩政上から門閥層が排除される。久光の子供で、藩主忠義の弟島津久治(宮之城領主)は、藩主面前で兵士団リーダーたちに詰問され、結局藩政上のポストを去る。久光はその運動の背後に西郷の後援があるとにらんだ。西郷は戊辰戦争で東北戦線が終局すると、明治元年十一月初めにはもう鹿児島に帰って、日当山温泉で休養している。今は西郷の力に頼らなければこの騒ぎを治めることはできない。こうして西郷を藩政上の重要ポストにつけて決着する。先に戊辰戦争において薩摩藩兵を率いて東征軍に参加せよとの勅許を得ていた(明治元年五月二十日)忠義が、西郷の進言でこれを中止させられたことに久光は不満を抱いていた。西郷の考へは戊辰の戦いが天下を取ろうという薩摩藩の野望だとうわさされていたことから、忠義が東征軍の先頭に立つことはそのうわさを立証するようなものだとの配慮からのものであったが、久光にはそれが十分伝わっていなかった。これが

久光の明治期最初の西郷への不満で、それに次ぐ第二が門閥打破運動へのそれであった。次にこれに続く第三ともいふべき不満は大久保に注がれる。版籍奉還問題でのそれである。版籍奉還上奏の案文には「朝廷其宜ニ処シ、其与フ可キハ之ヲ与ヘ、其奪フ可キハコレヲ奪ヒ、凡列藩ノ封土更ニ宜シク 詔命ヲ下シ、コレヲ改メ定ムベシ」とあった事からこれを許可したのに、政府からはその後何の音沙汰もない。まさに詐欺にあつたようで、特に責任者大久保に対し大きな不満を持った。『大久保利通日記』の明治三年一月二十四日の条に

段々 御激論ニ相成十分御真意拝承イタシ候、畢竟門閥一条等且知藩事之コト、冲モ是ニ而治り相付候御見留無之、御政度ノ処ニ第一御不平云々実ニ不堪愕然、小子愚存ノ次第ハ不憚忌緯曲直ヲ明ニシ、名分ヲ正シテ言上仕候、乍去不可言ノ御沙汰等有之、不得止引退キ候、

この「門閥一条云々」とは先の鹿児島のものであろうが、版籍奉還にともない公卿・諸侯を全て華族と改称して一列にし、藩主を政府任命の藩知事（知藩事）としたことを指すのであろう。そして「言うべからざるの御沙汰」の内容は不明であるが、大久保は久光の不満の重点を「御政度」すなわち国政上のそれと理解、「愕然に堪えず」と大変な驚き様である。西郷への不満が藩レベルのやや個人的な臭いを持っていたのに対し、これは国政上の問題で政府全体への不満といえよう。そして第四の久光の不満が廃藩置県でのそれで、これは西郷・大久保両者に向けられた。市来四郎によると西郷らが久光へ「予議」すなわち事前に相談しなかつたこと、これが久光の大きな怒りの原因だといふ。版籍奉還問題は結果はともかく、事の性質上久光らに「予議」したが、廃藩置県についてはまったく事前連絡すらなかつた。これまでには考えられなかつたことである。もちろんこの様な手続き問題だけではない。すなわち「御政度」の中味への不満が大きかったのである。

ともかくこの久光が鹿児島に腰をおろして政府批判の態度を強めることは、政府にとって困ることであった。政府強化のためもあって政府は早くから久光の上京を求め、しばしば勅使を鹿児島に派遣している。明治初年におけるそれを列挙すると次のようである。

第一回
(一) は勅使名、(二) は鹿児島着日時、(三) は同発時期、(四) は久光の行動。

(一) 柳原前光(大久保利通随行) (二) 明治二年二月十三日着 (三) 同月二十二日発 (四) 久光上京(三月二日京都着、同月十三日京都発帰国)

第二回
★(大久保を帰国させ、久光・西郷を召す、三年一月十九日着 三月二十五日発 久光・西郷上京せず)

(一) 岩倉具視(大久保随行) (二) 三年十二月十三日着 (三) 同月二十八日発 (四) 久光上京せず(西郷を上京さす)

第三回
★(天皇行幸、西郷随行、明治五年六月二十二日着、同二十八日久光十四条の意見書提出、七月二日発)

(一) 勝安房・西四辻公業 (二) 明治六年三月二十一日着 (三) 四月十七日発 (四) 久光勅使に従い上京(佐賀の乱発生後県下鎮静のため七年二月二十日帰着、そのまま鹿児島滞留)

第四回

(一) 万里小路博房・山岡鉄太郎 (二) 明治七年四月二日着 (三) 四月十五日発 (四) 勅使に従い上京

以上の通り五年間に四回も勅使が派遣され、その間一回は勅使ではないが大久保を帰国させ、さらに別に天皇まで直接鹿兒島に向向している。明治初期にこれほど度々上京を求め勅使を受けた人物は他にいなかったであろう。もちろん最初の勅使派遣は、久光から大久保の帰国を求めたことに対しその機会に勅使を派遣したというので、序での感じがある。だから久光もこの時は早く上京した。しかしこの時は五日後に天皇は京都をたつて東京へ行幸ということで久光は僅か滞京十日ばかりで帰国する。二回目は上京せず、天皇行幸の後の第三回目の勅使を受けて初めて、第一回目の天皇宸翰に「速に上京朕一人を助けて以て永く保たしめんことを謀れ」という言葉通りの上京を行っている。

この間政府は久光に次のような処遇を行う。

明治六年 五月 十日 麯香間祇候

同 年十二月二十五日 内閣顧問

同 七年 四月二十一日 左大臣

同 八年 十月二十七日 依願免官

同 年十一月 二日 麯香間祇候

同 九年 四月 三日 東京発帰郷（『大久保利通日記』によると、東京発は四日らしい）

しかも久光はこの間重要な建言を政府に対して行っている。まず最初は天皇行幸の際明治五年六月二十八日の建言である。すなわち

一、至尊学問之事

一、立国本一張紀綱之事

一、定_二服制_一—_二蔽_一—_二容貌_一—事

一、正_二學術_一—

一、慎_二扱人材_一—事

一、謹_二外國交際_一—_二審可_レ弁_二彼我之分_一—事

一、振_二興兵氣_一—_二正_二軍律_一—事

一、明_二貴賤之分_一—事

一、遠_二利欲_一—_二重_二節義_一—_二退_二詐術_一—_二貴_二誠実_一—事

一、蔽_二禁淫乱_一—_二明_二男女之別_一—事

一、開_二言路_一—事

一、慎_二讞獄_一—_二正_二賞罰_一—事

一、輕_二租斂_一—事

一、詳_二量出納_一—事

その副書によれば、前回明治二年上京の際に建言したかったがそのときは機会がなかったという。この時は長州藩主毛利敬親も召しに応じて上京したので、三月三日、六日両日共二人で参内、六日には敬親と連署で建言書を出したが、翌七日は天皇出発の日で久光独自のものを出す余裕はなかった訳である（『明治天皇紀』）。

明治五年の場合も、果たして久光が建言の機会を待ち構えていたかどうかについては、多少疑問がある。久光が建言を行ったのは六月二十八日、実はこの時は二十六日には天皇は鹿児島出発の予定だったが、二十五日は終日風が強く、

夜になって翌日の出発を取り止め結局五日延びたもので、何か多少間延びた感じを受けるからである。この建言の時宮内卿徳大寺実則に「旧藩臣西郷隆盛・同大久保利通等をして大政に参与せしむるの不可なるを陳述して退出」したという(同上)。

ついで明治六年上京後六月二十二日には命によりこの十四条の注釈書を提出し、翌七年の上京後五月二十三日三条と岩倉に対し次の二十カ条に対して意見を求め、改良すべきは改良し廃止すべきは廃止することを提議した。

- 一、先王の法服を洋服に改めらるる事
- 二、太陽暦と称し西洋の正朔を用ひらるる事
- 三、玉座を奉り始給て洋風を模擬せらるる事
- 四、各省に洋人を雇ひ彼の教示を受くる事
- 五、侍読其人に非ざる事
- 六、侍従阿諛の輩多き事
- 七、兵卒を君側に近づくる事
- 八、官員驕奢淫佚の輩多き事
- 九、華族の遊蕩を禁示せざる事
- 十、学校の規則洋風を基本とせらるる事
- 十一、都下禁令苛酷に過ぐる事
- 十二、撃劍の師を命ぜられざる事

十三、兵制洋風を用ひらるる事

十四、不急の土木を興し會計の欠乏を顧みざる事

十五、無用之官員を増加する事

十六、邪宗の蔓延を防がざる事

十七、外国人と婚姻を被許事

十八、神祇官を廃し神仏混合して教部省となし弾正台刑部省を合して司法省をおかるる事

十九、文部大蔵の二省を合併せらるる事

二十、散髪脱刀の洋風を重んじ束髪帯刀の御国風を賤む事

これに対し三条らは五・六・十・十一・十四・十五については具体的に指摘があれば処置する、また十八・十九は分割済みとし、他は困難と回答した。久光の建言が政府の急激な洋風取り込みに対する民族色の維持を主張して保守色の強いものであることはもちろんであるが、実はこのことが急激な変化にとまどいを感じていた一般の国民感情に近いものであったことが、久光への期待となり、久光への建言の多さの原因であったことも否めない事実ではなかったか。それが久光にとって大きな支えとなり、自らはこの多くの人の代弁者の役割を担っているという自信となっていたのではないか。

もちろん七年、八年分を含めた建言についての詳細な分析が必要であろうが、ここで久光への建言の一、二を見てみよう。合計五回建言している東京府實屬士族（元前橋士族らしい）城井寿章の明治六年五月二十八日の建言に「寿章窃に疑ひ且つ惑ふ所あり、何となれば、万古不易の皇統も共和政治の悪弊に陥り終に洋夷の屬国と可成形勢は、鏡に掛て

拝するが如きは実に尊説の如し」とあるのは、久光の十四カ条建言の副書に「方今之御政体にては御国運日を追て御衰弱、万古不易之皇統も共和政治之悪弊に被為陥、終には洋夷之属国と可被為成形勢、鏡に掛けて拝する如く」とあるのと全く符合する。明らかに久光の建言を読んでの建言である。城井のこの時の要点は「今日の急務は君子を進め小人を退け、不才斗筭の官員を淘汰するにあり」というものである。

さらに六回建言を行っている斎藤貞蔵の明治六年五月のものには、まず「元徳川家江攘夷之儀御蔽責被為有、倒幕之論相立候御趣意と頃刻之間に相違仕、意外に西洋に御親睦に而」とかつての攘夷論者が、政権をとつたらコロリと変わって（この論者はそう感じた）西洋心酔論者になったことに意外の感じを抱いた。そして「殿下（久光）御建言被遊候御文意奉拝見候処、一々御憂国之尊慮紙表に溢れ」と書く。久光の建言書を読んでいることは明白である。恐らく新聞が久光の建言を掲載したものであろう。手元の『新聞集成明治編年史』には久光の動静も拾ってあるが、建言のことは七年六月十日の『新聞雑誌』が、「島津公参朝せず、封事二十ヶ条を上疏の噂」という記事を載せているだけで、久光の提言本文は記載していない。しかし一般の人の目にふれる報道は何かあったに違いない。斎藤の建言は服制・税制・西洋人教師（顧問）・鉄道建設等土木造営・歳入歳出・国債等についてである。

先にも記したが、久光の建言は極めて保守色の強いものであるが、中には言路を開くこと、賞罰を正すこと、租斂を軽くすること、出納のバランスをとること、不急の土木をおこし会計の欠乏を顧みざることなど考えるべき点もあったことから、共鳴者も多く、それが久光への建言の増加となったものと思われる。これがまた久光を勇気づけたことは疑えないであらう。

例 言

一本書は、島津忠廣氏所蔵「玉里島津家文書」（昭和四七年八月十日黎明館寄託資料）を底本とし、これを「鹿児島県史料 玉里島津家史料」全十巻の第六巻として刊行するものである。収録史料の年代は明治三年（一八七〇）十二月から明治六年（一八七三）五月までである。

一史料の配列は、玉里島津家で作られた文書目録番号による編年順である。

一文書名については、玉里島津家で整理された名称にしたがった。

一文書番号についても、玉里島津家で整理された番号にしたがった。但し、数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

刊行に当って、文書の体裁、おおよそを次のように統一した。

一字体は原則として常用漢字を用いた。

一仮名は、底本の体裁にしたがった。変体仮名は仮名に改めたが、江・茂・而はそのまま用いた。

一平出・擡頭・闕字および但書は、原則として底本の体裁にしたがった。闕字は一字分あげとした。

一目録に記載されてはいるが、文書の存在が確認されないものには史料番号の頭に○を付した。

一原注は、底本の体裁に従い括弧を付さず、新たに注を付す場合には、（ ）で囲んで原注と区別した。

一人名および地名については、適宜傍注を付した。

一文書・記事には適宜に読点「、」「および並列点「・」を付した。

一文書の年月日、差出書、宛所の位置などは、底本の体裁にしたがい、ある程度の統一をした。

一文字の不明・抹消・訂正などを表現するため、欠所部は、その部分を□で囲み、底本の状態に応じ、(虫損)・

(磨滅)・(破損)と傍注した。字数の推定できる場合は□で示し、推定できないものは□□で示した。

一原文の抹消・訂正は、左傍に「ミミミ」を加え、右側に書き改めた文字を記した。

一文意の通じない字または個所には、(ママ)・(衍カ)・(〇〇カ)と傍注を付した。

一ルビは底本にあるもののみ付した。

一朱書部分は(朱)と頭注し、その個所を「」で囲んだ。

一合点は、頭または右肩に「一」で示した。

一花押はすべて収載した。

一各文書・記事の末に原寸を記した。但し、文書原寸(折紙)と記したものは折った状態の大きさを示す。

一既刊の「鹿児島県史料」と重複する文書については、既刊史料名および文書番号を付した。

一封紙・包紙の封じ目は、底本の体裁にしたがい、「メ」「封」「緘」の区別をし、印章は、□○で輪郭を模し、

朱印は(朱)と注を付した。また印文の判読できるものは「」で記した。

一本文以外の部分は、「」をつけ、その位置によって(端書)・(端裏書)・(端裏朱書)・(端裏銘)・(封紙ウワ書)を付した。

一文書に付属する付箋・貼紙・付札・付紙・封紙・包紙などの文字は、右肩に(付箋)などと傍注した。

目次

一八〇	明治三年十二月	北越源元裕著「日本魂」	一
一八一	明治三年十二月	久光公召命ノ請書	七
一八二	明治三年(?)	久光公へノ建言(氏名不明) 郡県封建優劣論其他	七
一八三	明治三年(?)	藩内諸家積金利殖方法其他ノ建言(氏名不明)	七
一八四	明治三年(?)	久光公風俗矯正ノ論告	八
一八五	明治三年(?)	三条相国ノ論書	八
一八六	明治三年	久光公へノ御沙汰書	八
一八七	明治三年(?)	諸制度改革意見(立案者不明)	八
一八八	明治四年正月元日	山階宮晃親王ヨリ島津久光公へ 年賀状	八
一八九	明治四年二月十五日	岩倉具視卿ヨリ島津從三位へ 岩倉勅使ノ報告	八
一九〇	明治四年(?) 四月十三日	三条相国ヨリ大久保参議へ 井上馨歐洲派遣ノ件	六
一九一	明治四年五月十五日	前橋藩土城井寿章ヨリ西郷隆盛へノ進言 功臣ニ対スル賞典遺漏ノ件ニ付	六
一九二	明治四年五月	和田正道ヨリ久光公へノ建白 新政論。新政余論二卷	六

一八七	一八六八年六月四日 (明治四年)	神奈川和蘭公使ヨリ伊達宗城少將へ 日本ト瑞典諾威トノ条約締結ニ就テ	九
一八八	明治四年七月十三日	三条実美ヨリ大久保大藏卿へ 昨十四日廢藩置県ノ件	一〇〇
一八九	明治四年〇〇七月卅一日	三条相国ヨリ大久保参議へ 寺島宗則ノ件	一〇一
〇一九〇	明治四年七月	廢藩置県ニ付久光公へノ上申(氏名不明) 桂、大山綱良等ノ意中ニ就テ	一〇二
一九一	明治四年七月	廢藩置県ニ付島津家ノ旧恩ニ対スル赤誠披瀝ノ願書	一〇三
一九二	明治四年七月	齋藤貞蔵ヨリ朝廷へノ建言 天下中賢徳賢才御精撰方法	一〇四
一九三	明治四年八月五日	西洋諸国殊ニ支那国情偵察ニ関スル政府へノ建言別啓(筆者章トアリ)	一〇七
一九四	明治四年〇〇八月十七日	桂四郎ヨリ西郷隆盛へ? 廢藩置県ノ件	一〇九
一九五	明治四年八月廿七日	久光公ノ弁新封建論 郡県説ヲ駁ス	一一一
一九六	明治四年八月廿九日	養田主税ヨリ檜迺屋正名へ 時候見舞	一一二
〇一九七	明治四年九月十日	久光公分家ノ朝命	一一三
一九八	明治四年九月十三日	岩倉具視卿ヨリ島津従二位へ 久光公之上京を促す	一一三
一九九	明治四年九月十三日稿	渡辺重石丸ノ真教説源付録	一一四
二〇〇	明治四年九月十三日	久光公従二位宣下及大政官達	一一四
二〇一	明治四年九月	水谷山人ノ反時小言 廢藩置県、四民合一、廢刀ニ就テ	一一四
二〇二	明治四年九月	奈良原幸五郎ノ封建郡県論	一一五
二〇三	明治四年九月	久光公分家位階昇進ニ就テノ意見(宛名不明)	一一三

一九〇	明治四年十月九日	川上助八郎ヨリ久光公へノ願書 廃藩置県ニ付持高返上草履取任命願ノ件 詩一首添	三三
一九一	明治四年十月十三日	谷山武之輔ノ願書 廃藩置県ニ付士族格ヲ下シ草履取勤仕ノ件	三四
一九二	明治四年十月晦日	参事大山綱良ノ通達 奈良原幸五郎久光忠義両公ノ家令兼務拜命	三五
一九三	明治四年十月	久光公ヨリ岩倉具視卿へノ草稿 病氣ニ付上京延引ノ件	三六
一九四	明治四年十月	久光公從二位辭退ノ願書	三六
一九五	明治四年十一月十日	園田彦左衛門願書 廃藩置県トナレトモ一死奉公ヲ期スルノ件	三六
一九六	明治四年十一月	宜隱山人ノ新聞罔ニ民聽ニ論 泰西文明ノ病弊ニ就テ	三七
一九七	明治四年十二月八日	奈良原幸五郎等ヨリ久光公へノ建言 国政改革ノ為公ノ上京ニ就テ	三八
一九八	明治四年十二月廿一日	等象齋介石ノ時弊論 既出上下 天賦遙隔。性工難レ做。等十四篇	三九
一九九	明治四年十二月	奈良原幸五郎伊地知壯之丞ヨリ久光公へノ上書	四〇
二〇〇	明治四年十二月	奈良原幸五郎伊地知壯之丞ヨリ久光公へノ上書 久光公奮起東上尽力ノ件	四一
二〇一	明治四年十二月	桑原正晟占ノ久光公十二月運勢	四二
二〇二	明治四年十二月	海外視察記(筆者不明)	四三
二〇三	明治五年正月二日	山階宮晃親王ヨリ島津從二位公へ 年賀状	四四
二〇四	明治五年(?)一月十五日	伊地知正治ヨリ大久保利通へ 県治条例修正ノ件	四五
二〇五	明治五年正月	三条実美卿ヨリ島津從二位殿へ 久光公鹿兒島県令不許可ノ件	四六

一九三	明治五年正月	三条太政大臣より大山鹿兒島県参事へ	久光公鹿兒島県令不許可之件	三九
一九七	明治五年二月廿日	大山格之助ヨリ桂右衛門へ	三〇
一九八	明治五年二月	等象齋介石ノ時弊論 蹴出拾遺上下 富国論。治国論。二十四篇	三三
一九九	明治五年三月十二日	小池詳敬ヨリ海江田信義へ 耶蘇教特ニ「ニコライ」教排斥ニ就テ	三九
一九〇	明治五年六月中旬	安田轍蔵ヨリ久光公へノ建言 全国士卒家族家禄ノ件其他	三五〇
一九一		久光公自記履歴書 明治五年六月ニ至ル	三五
一九二	明治五年六月廿八日	久光公ヨリ十四ヶ条ノ建言	三五
一九三	同 七月廿九日	右ニ付三条相国ヨリ岩倉全權大使へ	三五
一九四	明治五年六月	琉球処分ニ付議官等ノ提案	三六〇
一九五	明治五年六月	十四箇条建言ノ際ニ於ケル久光公ノ腹案 廿五ヶ条	三六二
一九六	明治五年六月	久光公十四ヶ条建言ノ副書	三六三
一九七	明治五年七月七日	東京九鬼隆都ヨリ久光公へ <small>神典研究ニ付援助ヲ求ム 岩下へノ依頼状添</small>	三六四
一九八	明治五年七月十六日	川畑伊右衛門ヨリ久光公へノ建言 制度、風俗、学問ニ就テ	三六五
一九九	明治五年七月	久光公ヨリ某氏へノ書翰草案 聖上鹿兒島へ御臨幸ノ件	三六七
二〇〇	明治五年(?)八月一日	九鬼隆都ヨリ岩下へノ依頼状 久光公へノ書状委託	三六八
二〇一	明治五年(?)八月十五日	九鬼隆都ヨリ久光公へ 公ノ上京ヲ待ツ	三六九
二〇二	明治五年八月	麿香問祇候ノ人々	三七

一五三	明治五年八月	久光公上京御沙汰書	三六
一五四	明治五年八月及九月	大蔵省簿冊書抜 琉球処置ノ件	三九
一五五	明治五年八月ヨリ 七年十月ニ至ル	琉球使者上京ニ付政府ヨリノ指令其他書類	六四
一五六	明治五年九月十二日	久光公建白採用ノ有無ニ付意見書草案(宛名不明)	三〇
一五七	明治五年九月	久光公ヨリ三条徳大寺兩卿へ 十四箇条ノ建言ニ就テ	三三
一五八	明治五年十月七日	三条太政大臣ヨリ島津従二位殿へ 久光公ノ上京ヲ促ス	三三
一五九	明治五年十月十二日	徳大寺実則卿ヨリ島津従三位へ 久光公ノ上京ヲ促ス	三三
一六〇	明治五年十月	久光公ノ十四ヶ条建言ニ付和田正道講述	三三
一六一	明治五年十月	愚案二冊(筆者不明) 貿易通商ノ本義ト米価ノ高低ニ就テ	三四
一六二	明治五年十一月五日	大内晴巒「ニコライ」問答ヲ読ムノ感	三三
一六三	明治五年十一月廿八日	徴兵ニ関スル詔書及太政官布告	三九
一六四	明治五年十一月	佐田介石等太陽曆不可ノ建白	三九
一六五	明治五年十一月	西郷隆盛ヨリ久光公へノ謝罪上書	三九
一六六	明治五年十一月以降	「ニコライ」教信者ノ氏名ト動靜 露人「ニコライ」著「洗礼式」	三九
一六七	明治五年十二月	福永直之丞ヨリ久光公へノ建言 華士族禄高存置ノ件	三〇
一六八	明治五年(?)	島津家財産ト具有トノ區別ヲ正スヘシトノ議	三六

一九六	明治五年(?)	秋田県小松直之進ノ国体論	三六六
一九五	明治五年	久光公ヨリ西郷隆盛ヘノ詰問十四ヶ条	三六二
一九四	明治五年(?)	源勝友袖控 各地ノ情况批評其他政治上ノ所見	三三三
一九三	明治五年(?)	銅貨不融通ノ原因調査上申(筆者不明)	四〇〇
一九二	明治五年(?)	伊地知正治(?) 廟堂改革意見	四〇二
一九一	明治五年以来 同 七年ニ至ル	大隈重信ノ罪状探索書	四〇三
一九〇	明治六年一月四日	三条実美卿ヨリ島津従二位殿へ 久光公ノ上京ト西郷参議ノ帰京ヲ促ス	四〇六
一八九	明治六年一月	佐田介石、松本喜三郎ヨリ大隈参議ヘノ建白 富国強兵論	四〇六
一八八	明治六年一月	三藩県土族石井瀧次ヨリ集議院ヘノ建白 財政上ノ件	四〇三
一八七	明治六年一月	政府歳出入、府県費、内外国債概表	四〇五
一八六	明治六年一月	四等議官丸岡莞爾「立国基礎」之議	四〇三
一八五	明治六年一月	旧人吉藩新宮簡ノ对韓对露策ニ付除族終身禁獄処刑ノ顛末記	四〇六
一八四	明治六年二月八日	向井新兵衛ヨリ小学生徒帯刀ノ建言	四〇三
一八三	明治六年(?)二月九日	松平慶永ヨリ久光公へ 公ノ上京建言ヲ促ス	四〇四
一八二	明治六年二月十五日	木脇祐治ヨリ久光公ノ御上京猶子ヲ乞フノ書	四〇四
一八一	明治六年二月廿二日	東京折田利建ヨリ有馬荘十郎へ 近衛隊解兵ニ付旧薩兵ノ帰県又ハ教導团入りノ件	四〇四
一八〇	明治六年二月廿五日	齋藤燾ヨリ川添某へ 旧小田原藩農政ニ就テ	四〇五

一九五	明治六年二月	寺師宗道ヨリ久光公ヘノ建言 公ノ東上延期ヲ乞フ	四一
一九六	明治六年二月	福永藤左衛門(祐之)ヨリ久光公ヘノ上書 公上京ノ上ハ兵威ヲ以テ奸邪排除ノ件	四三
一九七	明治六年二月	伊作実吉楨造ヨリ久光公ノ上京ニ随従願	四六
一九八	明治六年二月	向井朋厚ヨリ久光公ヘノ上書 公ノ上京ヲ悦ヒテ国基挽回ヲ乞フ	四七
一九九	明治六年二月	浜島新次郎ヨリ久光公ノ上京ニ随従歎願書	五一
二〇〇	明治六年二月	浅井実雄(南山)感慨詩歌 二詩一歌	五一
二〇一	明治六年二月	新納時房ヨリ山之内作次郎ヘ 久光公ノ時弊革正ヲ望ム	五二
二〇二	明治六年二月及三月	博聞新誌 和田八之進ノ封建論ニ就テ	五五
二〇三	明治六年二月	作州津山平野耕平ヨリ集議院ヘノ建白	五七
二〇四	同 年三月廿三日	三河国土地開墾ノ件	五七
二〇五	同 年四月三日	人蔘栽培ノ件	五七
二〇六	同 年四月三日	同前	五七
二〇七	明治六年春及夏	城井寿章ヨリ久光公ヘ 詩六首	五七
二〇八	明治六年三月二日	「ニコライ」司祭ヨリ副島外務卿ヘ 不敬語ノ弁解	五七
二〇九	明治六年三月三日	東京府士族城井寿章ヨリ和田八之進ヘ 封建郡県制ノ一利一害ヲ論シ	六〇
二一〇	明治六年三月十五日	久光公ノ上京ヲ促ス	六〇
二一一	明治六年三月十五日	青森県布達 開拓者手当廃止ノ件	六三
二一二	明治六年三月廿二日	勅書	六四
二一三	明治六年三月廿五日	久光公ヘ桜田邸下賜ノ御沙汰	六四
二一四	明治六年三月	谷山武之輔ヨリ久光公ノ上京ニ随従許可願	六五

- 一九一 明治六年三月 福永直之丞ヨリ久光公進退ニ就テノ上書……………四八五
- 一九二 明治六年三月 群馬県富岡町医生一万田如水ヨリ集議院ヘノ建白 新貨幣改鑄ニ就テ……………四八六
- 一九三 明治六年四月廿三日 大分県士族梶江高峯ヨリ久光公ヘノ建言 時弊矯正意見……………四八七
- 一九四 明治六年四月廿四日 山階宮晃親王ヨリ島津三品卿ヘノ建言 久光公ノ東上ヲ賀ス……………四八九
- 一九五 明治六年四月廿四日 小田村達蔵ヨリ久光公ヘノ建言 時弊ノ矯正、国基ノ確立ニ就テ……………四九〇
- 一九六 明治六年四月廿五日 山階宮晃親王ヨリ島津從二位公ヘノ建言 久光公ノ東上を祝す……………四九一
- 一九七 明治六年四月廿六日 伊達宗城卿ヨリ島津久光公ヘノ建言 久光公ノ上京ヲ賀ス……………四九二
- 一九八 明治六年四月廿八日 久光公宮中車寄迄乗車許可ノ御沙汰……………四九三
- 一九九 明治六年四月 久光公上京ニ付鹿兒島士青崎一郎ヨリノ建白 物価ノ下落其他ノ件……………四九四
- 二〇〇 明治六年四月 耶蘇教伝道ノ件其他……………四九六
- 二〇一 明治六年四月 東京府士族村上政信ヨリ久光公ヘノ建言 政務上改善意見……………四九九
- 二〇二 明治六年四月 小倉県士族水島均ヨリ政府ヘノ建白 邪教ヲ排シ本教ヲ興スノ議……………五〇〇
- 二〇三 明治六年四月 久光公上京ニ付随行願出ニ対スル論達……………五〇六
- 二〇四 明治六年四月 安房神社少宮司加藤熙ヨリ海江田信義折田主税ヘノ書 三種ノ神器並ニ南帝御伝説ニ就テ……………五〇七
- 二〇五 明治六年四月 伊東長壽、樹下茂国、中条信汎、戸田氏貞、鈴木騰彦、平井則正、連署久光公ヘノ建白 神祇官ノ復旧、皇政復古ノ大業成就ニ付……………五〇八
- 二〇六 明治六年五月二日 久光公参朝御沙汰……………五〇九
- 二〇七 明治六年五月五日 今晚皇城御炎上ニ付安田轍蔵ヨリ久光公ヘノ献策 皇居御造宮献金ニ付……………五〇九

二〇〇八	明治六年五月五日	湊川神社宮司折田年秀ヨリ政府へノ建言 楠公選擇所ヲ東京ニ建設ノ議	三六
二〇〇九	明治六年五月六日	静岡県士族小田井藏太ヨリ政府へノ出願 彰義隊戦死者ノ大赦ニ就テ	三六
二〇一〇	明治六年五月七日	宇都宮増淵弘都ヨリ久光公へノ上書 神国治世策ノ高教ヲ仰グ	三〇
二〇一一	明治六年五月八日	教部省権少講義中西源八ヨリ久光公へノ上書 佞吏姦商芟鋤ノ件	三三
二〇一二	明治六年五月九日	安田轍蔵ヨリ久光公へノ上書 太政官内ニ諸省併置其他ノ件	三三
二〇一三	明治六年五月十日	久光公へノ国事諮詢ト麝香間祇候拝命	三三
二〇一四	明治六年(?)五月十日	松平春嶽公ヨリ島津久光公へ 勅書写返還之件	三三
二〇一五	明治六年五月十日	皇后宮御誕辰ニ付久光公御召	三三
二〇一六	明治六年五月十三日	浜松県士族小峯新九郎ヨリ久光公へノ願書 仕官採用ヲ乞フノ件	三三
二〇一七	明治六年五月十三日	芝増上寺通玄院春成ヨリ久光公へノ建白 服制其他ノ件	三三
二〇一八	明治六年五月十四日	布治婦一郎ヨリ久光公へノ建白 皇居御造営ニ付テノ三策	三七
二〇一九	明治六年五月十五日	久光公正院へ出仕ノ御沙汰	三六
二〇二〇	明治六年五月十五日夜	近衛忠房卿ヨリ島津久光公へ 諸国巡行説教報告	三六
二〇二一	明治六年五月十六日	深見有正ヨリ久光公へノ建言 剣道奨励ノ件	三六
二〇二二	明治六年五月十七日	城井寿章ヨリ和田八之進(?)へノ書翰 公及左院へノ上書一通ニ付公ノ諒解ヲ求ム	三〇
二〇二三	明治六年五月十八日	安田轍蔵ヨリ久光公へノ上申 公大臣拜命仁政施行希願ノ件	三〇
二〇二四	明治六年五月十八日	城井寿章ヨリ朝比奈某へノ口上書 其他雜件。断片。封筒等	三〇

二〇四	明治六年五月及七月	群馬県富岡町老医生一万田如水ヨリ久光公ヘノ建白	西洋流弊ニ付憂国論	六三
二〇三	明治六年五月	佐賀県土族柴田洪平ヨリ久光公ヘノ建白	時論	六九
二〇二	明治六年五月	外務省ノ朝鮮通交摘要		六九

二六〇 北越源元裕著「日本魂」

三冊下二通

一八八〇ノ一

(表紙)
「日本魂第二編首卷」

日本魂序

鱒生小卒、開口則曰、日本魂日本魂、日本魂
豈易言哉、蓋我 日本之為國、既以 三神器立
極、則感得夫 三神器之正氣者、此皆真箇日
本魂也、嘗竊論之、 鏡也者明也、明則公、公
即仁、仁即公、公以君臨四海、子育億兆、明
以知賢知佞、知忠知奸、亦智之事也、 劍也者
斷也、斷即勇、勇則斷、斷則勇、勇乎勇乎、
氣勢奮激、怒張激發者、小也、必也快決果斷、
如見善則遷、有過則改、最是勇之大者、而義
在其中矣、 璽也者信也、信即誠、誠則信、信
則誠、中庸云、誠者非自成己而已、所以成物
也、信乎誠之不可以己者、易云、中孚豚魚吉、

既曰豚魚吉、又曰利涉大川、夫欲吉利、人之
常情、無貴賤、無賢愚也、今乃吉於頑鈍無知
之異物、而利於危殆不測之出師、可見無往而
不吉利者、亦何苦乎、与夫販夫屠兒爭錙銖於
端腕間也、人亦有言、巧詐不若拙誠、猶信、
於戲、 三器之德、三而一、一而三、又合而言
之、則孟軻氏所謂浩然之氣者、亦不外焉、
某曰、日本魂、是大學、
所謂明德耳、解得亦明、 藤田彬卿曰、夫 日本之
鄉、陽氣所發、地靈人傑、食饒兵足、上之人、
以好生愛民為德、下之人、以一意奉上為心、
至於其勇武、則皆根諸天性、此 國体之所以
尊嚴也、抑所謂勇武者、非惟勁悍猛烈以逞其
威、蓋亦必發於忠愛之誠、本於仁厚義勇之風
云、又曰、及至後世、士猶重廉恥、卑怯懦、
以汚名辱先為戒、忠義孝烈、不乏其人、丹心
血誠、誓天日、貫金石、而其跡不迫、流風如
馨、余情可掬者、皆上世遺俗所使然、要之、

自有一種藹然氣象非海外異邦所企及者、豈不亦日本魂之謂耶、或曰、業已生於日本國之中、而有無日本魂者、何也、曰鏡而不磨、劍而不礪、雖有玉璽、有時乎塵垢泥土焉、亦勢之所必至、故磨而去塵垢、礪而生光彩者、此即是學者之事也、嗚呼、茫宇宙、苟辱生於日本國之中者、寧可不勉強磨礪斯日本魂哉、屬者就史伝中、鈔其立法起懦、針砭吾輩駑駘最切者、名曰日本魂、方将与二三子共、以此為朝磨暮礪之資云爾、

明治庚午冬十二月

古風俗人源元裕撰

凡例

一 上世之事類多、神靈不測、有未易、以淺學陋識、模写其彷彿者焉、故姑自第二編始、
一 魂之日本者、固未止乎、此姑從記伝、揭其

最照明較著、可為模範於天下万世者、初學蒙生、先就此編、以知所尚論、亦当不左其方向也、

一 鈞是一人、而一得一失、瑕瑜互見千里之焉、不能無齟齬、烏喙之毒可以愈風濕、采葑采菲無以下体、取害折衷、惟此編之所立致意焉、最在大義名分上、朱熹曰、品藻人物、須先看佗大規模、然後看佗好處与不好處、好處多与少、不好處多与少、又看某長某短、某有某無所、長所有底、是緊要与不緊要所、短所無底、是緊要与不緊要如此、互將來、品藻方定、得他分數優劣、此举窃師此意耳、
一 此編、概以大日本史為經、以六国史、日本政記為緯、參以国史略、皇朝史略、日本外史、史鑑等之書、詳略要在尽其事實、故文体蕪雜、固所不免焉、讀者諒諸、

一 官職補任具書、不憚煩者々々、婆心亦欲蒙

士之注目也、

一子孫出處必略記不遺者、亦欲使觀者知積善

余慶、固非空言虛論、方便說法之類也、

大伴津麻呂

砥田宿禰

賢遺臣

田道

日本魂第二編目次

物部麤鹿火

卷之上

大伴狹手彦

日本武尊

紀男麻呂

武内宿禰

調伊企難

千熊長彦

巨勢徳太古

荒田別命

阿倍比羅夫

鹿我別命

阿倍少麻呂

杵岐直真根子

(宋以下同之)
[○]皇太子菟道稚郎子

平群木免宿禰

物部尾輿

紀角宿禰

物部弓削守屋

葛城長江襲津彦

捕鳥部万

塩乘津彦

[○]日羅

大伴談

卷之一

〔〇〕藤原鎌足

智尊

境部素

秦友定

犬養五十君

谷塩手

大野杲安

田辺小隅

物部麻呂

藤原不比等

宇合

麻呂

舍人親王

巨勢麻呂

〔〇〕道首名

佐伯国益

神人為奈麻呂

佐々貴山由氣比

丹波広麻呂

海部常山

物部志太大成

新治大直

葛江鳥養

孔王部山麻呂

多治比池守

多治比水守

石川年足

紀末成

紀田上

紀深江

甘南備高直

藤原岳守

長岑高名

南淵永河

清原有雄	文部路乙麻呂
山田古嗣	小谷五百依
丹墀門成	建部大垣
伴成益	矢田部黒麻呂
春枝王	藤原世嗣
紀安雄	風早富麻呂
忠貞王	基貞親王
平季長	小野篁
源為憲	財部繼麻呂
藤原高房	伴家主
山田春城	丸部明麻呂
倭景安 ^(果)	丹生弘吉
奈良許知麻呂	重明親王
文部和積	下毛野公助
君子尺麻呂	藤原宗通
文部路祖父麻呂	僧某
文部路安頭麻呂	藤原実行

卷之三

和氣清麻呂

広世

直綱

仲世

路豊永

藤原百川

藤良繼

大中臣清麻呂

藤原直楯

坂上苅田麻呂

大伴古慈斐

大伴弟麻呂

大伴勝雄

菅原古人

清公

坂上田村麿

広野

当道

浄野

卷四

藤原園人

藤原緒嗣

清原夏野

藤原冬嗣

長岡

大津

良岑安世

栄井夔麻呂

葛原親王

明日香親王

藤原顯忠

滋野貞主

安倍兄雄

藤原吉野

安倍安仁

大江音人

卷之五

〔〇〕恒貞親王

藤原衛

助

藤原良相

藤原良繩

紀夏井

〔〇〕藤原保則

小野春風

〔〇〕三善清行

卷之六

〔〇〕菅原道真

藤原仲平

藤原在衡

藤原忠文

小野好古

源經基

平貞盛

紀淑人

菅原文時

源顯基

源頼義

藤原景通

大宅光任

清原貞広

藤原範季

藤原則時

藤原景季

和氣為清

佐伯経範

経範從兵二三人

清原武則

源義家

卷之七

〔〇〕藤原実資

源師房

大江匡房

源隆俊

俊明

藤原師道

源雅実

雅定

藤原敦光

藤原伊通

〔〇〕佐藤憲清

藤原為業

藤原頼業

藤原為経

藤原実能

教長

源仲頼

杵淵重光

源乙若

〔〇〕藤原光頼

長谷部信連

卷之八

〔〇〕平重盛

伊藤武者二郎

藤原経房

藤原長方

〔〇〕清原頼業

日本魂第三編目次

卷之一

〔〇〕佐佐木高綱

明治三年（1870）

河野通信

河野通有

藤原光親

藤原朝俊

八田知尚

山田重忠

鏡久綱

佐々貴高重

藤原資朝

邦光

藤原俊基

藤原師賢

藤原隆資

源具行

藤原師基

藤原教正

藤原雅忠

藤原行房

藤原行実

藤原為冬

源定清

藤原定房

藤原光繼

源定平

足助重範

錦織俊政

俊政子某

從俊政戰死者十三人

石川義純

石川義右

僧祐覚

僧聖尋

土岐頼兼

從頼兼死者某々

太田守延

從守延死者三百余人

多治見国長

小笠原通弘

從国長死者二十二人

卷之二

護良親王

尊良親王

宗良親王

懷良親王

村上義光

義隆

僧良忠

藤原藤房

新田義貞

義顯

義宗

堀口貞滿

金谷経氏

大井田氏経

大館宗氏

一井貞政

一井政家

一井氏政

里見時成

里見義久

從義貞戰死者四十七人

從義顯自殺于金崎城中者八百余人

小山田高家

船田義昌

勅使河原丹三郎

尾張昌能

氣比斎晴

栗生顯友

明治三年 (1870)

篠塚伊賀

畑時能

由良具滋

脇屋義助

義治

瓜生義鑑

保

源琳

重

照

新田義興

世良田右馬助

井伊直秀

大島周防

由良兵庫

由良新左衛門

土肥三郎左衛門

南瀬口六郎

市河五郎

卷之三

楠正成

正季

正時

西河

西河子某

和田正隆

和田正朝

和田賢秀

紀六郎左衛門

野田四郎

四郎二子某々

関地良円

金岸兄弟

畠山与三

畠山六郎

富士名義綱

河辺石掬丸

三条景繁

大家掃部助

菊池武時

阿間子願

武重

誉田某

武敏

禁峰某

頼隆

楠氏同族從正成戰死者十三人

隆舜

楠氏家臣從正成戰死者五百人

武吉

名和長年

武義

長重

武政

義高

武朝

高光

武信

長生

武明

顯興

武安

從長年戰死者二百人

武貫

和田範長

宇治惟直

児島高德

菊池武光

土居通治

通郷

從通治割腹死者三十三人

得能通言

通繩

彈正

從通言、通繩自殺者三百人

從通郷、彈正戰死者三百人

結城宗広

親光

從親光戰死者十六人

源親房

顯家

顯信

顯能

顯雅

顯時

藤原実世

藤原康長

僧宗信

楠正行

和田正忠

和田正武

從正行戰死者五百人

付録 小人伝目次

聖徳太子

大伴金村

大伴吹負

阿部仲麿

吉備真備

在原業平

藤原忠実

藤平忠通

藤原賴長

藤原通憲

源賴朝

大江広元

和田義盛

畠山重忠

北条泰時

北条時賴

藤原光孝

長崎重高

赤橋盛時

安東聖秀

足利基氏

大貳

赤松則村

宇都宮公綱

一八八〇ノ二

〔表紙〕
一日本魂第二編上〕

日本魂第二編卷之上

出雲 松本巖編集

〔朱〕史学楷梯 百十卷 十三枚〕

日本武尊

〔朱、以下同シ〕
二一 日本武尊、元名小碓命、一名日本童男、景行帝子也、容貌魁偉、雄武絶倫、二十七年八月、筑紫熊襲復反、先是、熊襲反、帝親征平之十月、使日本武尊討之、尊時年十六、曰、我欲得善射者与行、或薦美濃弟彦、召焉、乃率其国人石占横立、及尾張田子稻置、乳近稻置偕来、十二月、尊進至熊襲国、察其形勢、賊魁川上梟帥、是日適宴其親族、尊便被髮為童女装、藏劍袖中、入居女人中、梟帥見而悅之、延置座側、

举杯戲狎、夜、闌衆散、梟帥被酒而臥、尊劍

撫其胸、未殊、曰、姑待之、吾有所言、汝為誰、曰、我是大足彥天皇之子、名日本童男、梟帥曰、吾嘗以強勇自許、謂天下無足與較者、今得遇皇子、多見其不知量也、吾雖賤陋、願上嘉号、曰日本武尊、言訖則刺殺之、自是稱日本武尊、既而分遣弟彥等誅余党、熊襲悉平、乃還勦吉備難波賊、明年二月、振旅入京師、帝偉其功、殊寵異之、四十年六月、東夷多叛、邊境騷然、七月、帝詔群臣曰、今者征討、誰堪其任者、日本武尊奏言、臣先年已西征、是役豈大碓之任乎、大碓聞之、懼而逃、尊奮曰、西戎雖平、東夷又叛、不知何日得睹太平、若不以臣為驚怯、請又敢行、帝乃執節刀、以授之曰、朕聞、東夷性強暴、凌犯為業、村無長、邑無首、各貪封疆、互相盜略、部落之中、蝦夷最獗難馴、男女雜居、父子無別、冬穴夏巢、衣毛茹血、登山如禽、行草如獸、承恩則忘、見仇必報、挾箭頭鬢、藏刀衣中、嘯聚党類、劫略人民、擊則伏草、追則入山、往古以來、未洽王化、汝小碓、英姿特偉、猛如雷霆、所向無前、所攻必勝、親則朕子、實則神人、蓋皇天愍朕不德、使汝經綸大業、天下即汝天下、位即汝位也、汝其深謀遠慮、視之以威、懷之以德、尊再拜受節刀、奏曰、臣昔西征、幸藉皇威、未浹辰、賊帥伏誅、今亦仗神祇之靈、奉天皇之命、往臨賊境、宣以德教、猶有不伏、即率兵勦之耳、言畢又再拜、帝命吉備武彥大伴武日從焉、十月發京師、先詣伊勢拜太廟、且辭倭姬命、命授以叢雲神劍、進至駿河、土賊欲誘殺之、勸之游獵、乘風縱火燒野、尊知見欺、挺劍斫草、鑽燧取火、逆燒得免、遂擊賊殲焉、於是改名叢雲劍曰草薙、号其処曰燒津、進自相模、航海抵上総、轉入陸奥、浮海出葦浦、橫渡玉浦、至蝦夷境、夷酋島津

神國津神等、屯兵水竹間、以拒之、尊盛陳戰艦、遣使喻夷衆、夷衆悅伏、皆投弓矢羅拜曰、天神降臨、敢不唯命之聽、乃入水牽船、以達于岸、皆面縛請罪、因俘其渠帥以歸、於是蝦夷悉平、還巡視上野・信濃、使武彥分按越國、會于美濃、平近江賊、獲疾還、至伊勢能褒野而病、於是、獻俘大廟、使武彥奏捷京師、而薨、時年三十、帝大悼惜、錄其功為定武部、初景行帝欲以日本武尊為嗣、會其薨、乃立其弟、是為成務帝、成務帝傳之仲哀帝、仲哀帝即日本武尊第二子也、蓋成務帝以前、皆父子相承、以日本武尊功最大、特立仲哀帝、自此皇統百二十余傳、皆日本武尊胤也、

史論曰、易曰、天造草昧、宜建侯行師、景行馭宇、西有熊襲、東有蝦夷、獸犇鳥駭、獯鬻難制、肆其妖毒、互相吞噬、日本武尊、以不世出之姿、奮雄偉之略、一駕誅戮梟帥、

再駕讐服蝦狄、我武維揚、疆圉寧謐、征伐之功、莫之与京、而帝建輔助、用能濟屯、憂勤兢畏、不遑寧處、正得雲雷之象、以致大亨之道、神器之託、將在佗日、而皇子薨於中路、不能經綸大業、天祚其胤、仲哀登極、奕世廟祀、以假以亨、神靈所依、四海瞻仰、嗚呼盛矣哉、

頗襄曰、我朝以武立國、神武以還、經數十世、雖時有變故、靖難戡亂、頃刻而弁、天下不搖者、非以兵權在上、綱維可挈故哉、然皆係內變矣、其有外叛、始見於景行云、蓋雖神武能肇造中土、東西諸道、号令未周、自崇神已漸命將四出、至此治熊襲、則親將伐之、何者其事大也、其事大、則其用兵亦大、大兵之權、不可委之臣下也、及賊再燃、難於再動兵、則遣皇子代往、其慎也如此、故至巡察東國、雖初遣大臣、至經略之任、

亦任之皇子、其意可以見已、及至後世、兵戎之事、委之有司、雖公卿亦不甚恤之、況於天子、高拱深宮、曰賊何能為、甚則不識將師之面也、而責其殞驅夷賊、及於奏捷、又不時論賞、終之致大權下移、國勢一變、長不復於古、可勝歎哉、至景行之封皇子美濃、又以皇族管領東海、亦有深意存焉、夫以未服之國、其土沃兵強、不可不收為我資、而不可任之牧宰、亦非其所能任也、於是封建宗室、使自經紀之、使其力足以鎮撫於當時、而藩屏於異日、以制內外輕重之勢、可謂知大計矣、中古郡県成制、雖以親王任國守、其人皆生長婦人乎、粹姿弱質、足不履地、皆虛任遙領、遣介掾代往而已、是以本支益弱、天子孤立、使朝廷大臣無所忌懼、未必不由此、獨後醍醐以諸皇子克將帥、得景行之遺意、而諸皇子亦有雄勇勝任者矣、

然終不能復古者、豈其時已不可為耶、抑天子不能躬親勤勞克有終始如景行也、

斎藤鑿曰、善凶天下者、規模術略、素定於胸中、而後功加天下、苟無素定之略、而運勇奮鬪、以僥倖于万一、安克濟哉、日本武以深宮粹質、奮不世之勇、東西千里、百年未合之地、皆指顧而定矣、世特見其勇、駭以為神、吾獨究其經略之迹、然後知日本武之功、非日本武之勇也、日本武之略也、何以明之、前是、武内宿称(すけのま)巡察東北諸國、還奏、其地可收為朝廷用矣、斯言也、日本武聞而知之、亦田道矣、於是航海急進、從相模歷上総、轉入陸奥、出葦浦、渡玉浦、至蝦夷境、攻其無備、襲其不意、而彼氣喪胆沮、不知其所以為禦者矣、不降何待、賊魁降而東西皆服、乃歷常陸抵甲斐、莫敢逆者、而信越猶有恃險不從者、國遣吉備武彥於越、

自入信濃、所至不戰而靡、雖中道即薨、然其經略之功、已定天下于一、時而有余、嗚呼古之立功於一方者有之、未有定天下若此之速者矣、而世之稱日本武者、但知其勇、不知徒勇而無略、可以圖一方、未可以圖天下也、

武内宿禰 千熊長彦 荒田別命……

〔三ノ上〕
武内宿禰、孝元帝曾孫、(朱)マシシオオカキコ、屋主忍男武雄心

命子也、景行帝二十五年、武内奉命、巡察東北諸國、二十七年、還奏、東夷之中、有日高見國、男女椎結、文身、風俗勇悍、号曰蝦夷、土地膏沃而曠衍、可擊而取、五十一年正月、賜宴群臣數日、唯稚足彦、皇子及武内、不赴宴会、共宿衛門下、以備非常、帝喜、遂立皇子為皇太子、成務帝是也、武生曰、益之戒舜也、曰作戒無虞、因失法度、因遊于逸、因淫

于樂、成務武内、不以逸樂為心、而克戒無虞、亘景行以之知其賢也、是日以武内為棟梁臣、成務帝即位、以武内拜大臣、置大臣始于此、仲哀帝二年、行幸越前角鹿、皇后及群臣從焉、天皇南狩至紀伊、会熊襲復反、帝親帥舟師征之、遣使角鹿、令皇后以下会於穴戶、居豐浦行宮、八年春、帝進幸筑紫、居香椎行宮、九月、会群臣議進討、皇后以為先征新羅、則熊襲自服矣、帝不從、親戰不克、九年二月、帝病崩于香椎宮、皇后与武内及諸大臣謀、秘不發喪、詔、中臣烏賊津、大三輪大友主、物部膽咋、大伴武以等、帥百僚守衛官中、密令武内奉梓宮至穴戶、殯于豐浦、遂決策征新羅、修船艦弓弩、論群臣曰、此事不必諉之汝等、吾自当之、事成共其功、不成吾独有罪、於是遣鴨別当熊襲、而自齋戒禱神祇、為男裝、誓師而發、十月至新羅、新羅王波沙寐錦、不意

我大兵奄至、惶遽不知所為、面縛出降、后命解其縛、遂入其都、封府庫、收函籍、納質子、申盟約、徵犒師金帛八十船、遂為歲貢定額、高麗・百濟、並望風歸款、於是、三韓悉服、乃置官司成兵凱旋、十一月至筑紫、十二月生皇子、名譽田別、初景行帝身材長大、日本武尊仲哀帝皆類之、及皇子生、亦奇偉、腕肉突起似母后雄裝負輶狀、古語謂輶譽田、故名、又以其在胎內以征三韓故、當時号曰胎中天皇云、明年三月、皇后共皇子至豐浦宮、乃堯仲哀帝喪、將奉梓宮還京師、時皇子庶兄麿坂・忍熊二王、拳兵要之播磨、皇后使武内奉皇子、航赴紀伊、會麿坂死、忍熊退軍住吉、皇后帥舟師、直向難波、忍熊又退軍菟道、皇后乃會皇子於紀伊日高、入小竹宮、使武内擊忍熊、忍熊敗死、群臣尊皇后曰皇太后、臨朝摂政、立皇子為皇太子是為心神天皇、都、磐余、謂之稚桜宮、太后摂政四十

九年、百濟・新羅朝貢、新羅所貢多珍異、而百濟非薄、命詰問其故、百濟使久底奏曰、臣等失道、出沙比新羅、新羅捕臣等、繫于圜圍三月、將殺、臣等仰天呪詛、彼畏而不敢殺、奪吾貢物、以其國賤物相易而獻、且曰、汝莫殺此事、如不從我言、則此還必殺汝、故不敢言、於是、勅讓責新羅使者、又遣遣人察二國情実、祈天神以簡可使者、天神誨從武内議、武内奉千熊長彦、長彦至新羅責之、明年、遣荒田別命、鹿我別命討新羅、二將乃与久氏等、勒兵至卓淳、於是、百濟使木羅斤資、沙沙奴跪等、率精兵來會、合擊新羅、破之、遂定比自怛、南加羅、喙國、安羅、多羅、卓淳、加羅七國、引兵西至古奚津、屠南蛮、忱弥多礼、以其地賜百濟、百濟王肖古、与其子貴須、率軍而來、比利、辟中、布弥支、半古四邑、望風而降、荒田別等、会肖古于意流村、肖古大

喜、執禮甚恭、既而諸軍皆帰、独長彦至百濟、与肖古盟于辟支山、又登古沙山、共座磐石上、肖古誓曰、若藉草為座、恐為火燒、以木為座、恐為水流、故座磐石而盟、所以示長遠不朽也、而今以後、永称西蕃、春秋朝貢、乃与長彦帰其国都、礼待加厚、仍遣久底護送焉、辛未歲、久底使事竣而帰、又命長彦共至百濟、布宣詔命、明年、長彦還、百濟王復使久底朝貢、自是歲貢不絶、長彦与有力焉、応仁帝三年、百濟枕流卒、子阿花幼、叔父辰斯篡立、是歲遣紀角・羽田矢代・蘇我石川・平群木菟、責問之、国人殺辰斯以謝、角等立阿花而還、七年、高麗・百濟・新羅・任那並入貢、令武内役韓人穿池、曰韓池、九年、武内奉勅按察西海、其弟甘美内宿禰、讒其密招三韓拋筑紫謀反、帝信之、遣使殺武内、武内聽而歎曰、我尽忠竭誠、無罪而死、命乎哉、有老岐直真

根子者、説曰、大臣誠忠、大公無私、是天下之所共知、今為大臣謀之、当密詣闕自明、猶不能回照、則死未晚也、人言僕貌肖大臣、請以身代、即伏劍而死、藤井蔵曰、真根子此等有功過紀信者、何則如彼榮陽之難、漢王不自決死、紀信縱不誑楚、安知不王別有奇策以出困乎、武内宿禰則否、既自決其死、真根子諫之、代之以死、若不然則宿禰必塗肝腦於紫陽、何以獲還皇都、以在後功於天下哉、是真根子功、所以為過紀信也、武内感愴慟哭、乃從其言、問道至京師以訴冤、勅面對質、甘美内伏罪、特詔赦死一等、武内執政如故、仁德帝五十五年薨、武内歷仕景行・成務・仲哀・応神・仁德五朝、在官二百四十四年、不詳其年寿、立祠因幡祀之、号高良明神、宇陪宮是也、及建応神帝廟、以武内配食、七子、羽田矢代宿禰、許勢小柄宿禰、蘇我石川宿禰、平群木

免宿禰、木角宿禰、葛城長江襲津彦、若子宿禰」○小柄宿禰有三子、曰星川建日子、応神朝、代皇木子大鷦鷯尊、繫木綿襦袢監御膳、

因賜姓大雀臣、曰伊刀宿禰、曰乎利宿禰○石

川宿禰子滿智宿禰、履中帝二年、与平群木免等、同執国政、滿智子韓子、雄略帝時、与紀小弓等、奉命征新羅、

「三ノ中」

平群木免宿禰、与仁德帝同日生、有鷦鷯入其

室、木免入帝產室、応神帝以為祥、命武内相

易為名、因曰木免、応神帝十六年、与的戸田、

帥師討新羅、先是帝遣葛城長江襲津彦于加羅、

召弓月人口、新羅留之、三年不還、於是詔木

免等、發兵問新羅罪、木免等兵既臨境、新羅

讐服謝罪、遂与襲津彦、将弓月人口而帰、住

吉仲皇子謀反、木免等扶履中帝而逃、從反正

帝至難波、誘刺領巾殺仲皇子、木免奏反正帝

曰、刺領巾有功於我、而親弑其君不可為訓、

宜誅之以明大義也、帝從之誅刺領巾、履中帝二年、与蘇賀滿智・物部伊苜仏・葛城円・俱

「三ノ下」

秉政、薨年百二十八、

紀角宿禰、応神帝三年、与羽田矢代・蘇我石

川・平群木免往百濟、責其王辰斯無礼、国人

殺辰斯而謝、因立嫡子阿花而帰、仁德帝四十

一年、奉勅再往百濟、始疆理国郡、審録物産、

子田鳥、仁德朝為都怒国造、

葛城長江襲津彦、応神帝乙酉歲、新羅遣汗礼

斯伐・毛麻利叱智・富羅母智貢調、欲以其先

所質微叱許智還、構偽奏請、太后不寃、許之、

命襲津彦護送、往宿对馬鉏海水門、毛麻利叱

智等相謀、使微叱許智先逃于新羅、縛藁為人、

置微叱許智之牀、給襲津彦曰、微叱許智違病

将死、襲津彦遣人視之、始知其見欺、大怒、

因収毛麻利叱智等三人、因于檻中、焚殺之、

直抵新羅、次陷輪津、攻拔草羅城、虜其民而

婦、壬午歲、新羅不貢、襲津彥師討之、十四年、使于加羅、召弓月人口、為新羅所留、三年而還、子葦田宿禰、腰裾宿禰、熊道宿禰、女磐之媛、為仁德帝皇后、葦田孫女夷媛、嫁市辺押磐皇子、生顯宗・仁賢二帝、

贊曰、神功皇后之還自筑紫也、麻坂・忍熊二皇子、稱兵邀之於路、其勢甚危、武內宿禰、擊忍熊而走之、終能定基業於倉卒之中、屬神器于皇太子、雖非声罪討逆之師、而臨陣決機、其功不可掩、輔佐五朝、為棟梁臣、享希世之遐壽、奕世昌熾、宜其享祀廟廷、而與宗柘不敵也、

賴襄曰、前志記仲哀崩之際、多曖昧者、後世說者、不免容疑於神功皇后、吾深會其前後事跡、斷知其不容疑也、夫熊襲久雄長西偏、以景行与日本武前後討伐、而其蟠根余孽、終不可拔者、蓋倚新羅為後援也、當時

諸大臣、更事如武內者、必有建舍近擊遠之策者、皇后以有籌略、從軍与議、亦右其策、而仲哀銳意誅鋤、不聽而親戰、敗衄病創、創劇終崩、皇后恐諸軍沮喪、賊來乘之、大事去矣、是以与腹心密謀、秘喪不發、留大連守行宮、如天子在狀、深溝高壘、相持不戰、而潛兵急發、以遂行前策、直擣巢窟、奪其倚拠、然後熊襲果不攻而下矣、特以鬪海波赴未知之地、衆情所疑懼、故多方託之神明日、神告我以宝玉之國、帝不從故暴殞、当相与勉往取之、皆鼓舞從兵之語耳、史氏從而實其事、皇張誇大、而後人不察、所以致紛紜也、胎中天皇之称、已見民望所屬、雖有庶兄之乘變圖自立、未幾就誅夷、撰政数十年、中外無異議、可知其事之暴白、當時厭人心、而何必容疑於千載之下、

嚴案、先是三百年、既有外国之事、上古質

樸、記載太簡、雖其詳不可得知也、以任那

遣使朝貢之文觀焉、威靈所被、東西夷戎、

相率賓服者、亦足以見其一斑矣、誰謂神后

與無名之師、以入三韓也、況新羅方為我叛

臣熊襲声援、久害德化者乎、

〔一〕塩垂津彦、大夫彦国葺孫也、勇敢多力、頭上

有贅長五寸三岐、為松樹狀、人呼曰松樹君、

崇神帝時、任那国遺蘇那局叱知朝貢、且曰、

臣国東北有三已汶地、曰上已汶・中已汶・下

已汶、地方三百里、民庶富饒、新羅欲得之、

兵戈相尋、民不聊生、請遣一將軍、以取此地、

帝大悅、勅公卿選擇將帥、衆議推塩垂津彦、即

令往鎮守之、其俗言宰為吉、故苗裔以吉為氏、

大伴談、室屋連子也、雄略帝九年、奉詔与紀

小君等討新羅、兵敗死之、從者大伴津麻呂、

与談相失、不知其死、人或指示其屍、津麻呂

奮躍大呼曰、吾主已死、何以独生、慷慨赴敵

而死、

〔五〕仁德十七年、新羅不朝、勅的臣祖砥田宿禰

小泊瀬造祖賢遣臣、往責讓焉、新羅大懼、

乃以玉帛珍異八十船來貢、

〔六〕竹葉瀬、田道、荒田別命二子也、仁德帝五十

三年、新羅又闕貢、遣竹葉瀬往責之、竹葉瀬

因循不果、俄勅田道、新羅若不恭、拳兵擊之、

新羅果悖慢、教來挑戰、田道固壘不出、賺俘

問虛実、对曰、有百衝者、驍勇絶倫、每為右

軍先鋒、若擊其左、破之必矣、田道乃選精騎、

擊其左軍、新羅大潰、乘勝縱擊、殺傷無算、

虜四邑人民而帰、

〔七〕物部麤鹿火、布都久留曾孫也、父曰麻佐良、

麤鹿火歷仕仁賢・武烈・繼體・安閑・宣化五

朝為大連、繼體帝之立也、有定策功、六年、

百濟表請任那・上哆唎・下哆唎・婆陀牟婁四

郡、哆唎守穗積押山、亦為請之、大連大伴金

麤鹿火之妻
亦真日本魂
矣、以室々
大男子不
若此一女子
哉、

村執奏、朝廷聽之、以麤鹿火為宣勅使、麤鹿
火妻諫曰、昔者住吉神、以高麗・百濟・新羅・
任那授胎中天皇、故太后ヤキナガタラシヒノ氣長足姬尊、与武内
宿禰議、每国置官府、以為海表藩屏、今輒奉四
鼎賜之百濟、妾窃恐上違祖宗之法、下貽万世
之譏、麤鹿火曰、汝言誠然、唯恐忤旨、妻曰、
請辭以疾、麤鹿火称疾、乃改宣勅使、使業已
行、時安閑帝為皇子、聞之驚、遣日鷹吉士、
追還前勅、百濟使人曰、天皇計便宜、既已勅
裁、皇子何得擅改、言必虛矣、縱令是矣、譬
諸以杖毆人、小頭与大頭孰痛、遂去、時人以
為金村押山受賂、二十一年、近江毛野將赴任
那、復其為新羅所侵之地、適筑紫国造磐井叛
拋火豐二国、毛野不得進、詔問可為將者於大
伴金村及麤鹿火許勢男人、金村等奏曰、麤鹿
火正直仁勇、曉暢兵事、举朝無能出其右者、
帝然之、八月、詔麤鹿火討磐井、帝親操節刀

授之曰、長門以東、朕制之、筑紫以西、汝制
之、專行賞罰、勿煩奏請、明年十一月、麤鹿
火与磐井戰於筑紫御井郡、斬之、余衆悉平、
宣化帝元年薨于宦、

〔八〕大伴狭手彦、大連金村子也、宣化帝二年、新
羅寇任那、父金村奉詔遣狭手彦及其兄磐援任
那、磐留筑紫、統其国政、以備三韓、狭手彦
往鎮任那、且救百濟、欽明帝二十三年、狭手
彦為大將軍、率兵数万伐高麗、与百濟合謀、
大破之、高麗王踰牆而逃、狭手彦乘勝入其王
宮、悉獲其珍宝而歸、

〔九〕紀男麻呂、角宿禰之後也、欽明帝二十三年、
新羅侵任那、男麻呂拜大將軍、率兵出哆喇、
調伊企儺、薦集部首登弭、倭国造手彦等從焉、
副將河辺瓊缶出居曾山、語問新羅攻任那之状、
遂至任那、先遣登弭於百濟、約束軍計、登弭
路宿婦家、遺印書弓箭、新羅得之知其計、卒

起大兵來逼，男麿逆戰大敗之，虜窮蹙乞降，

男麻呂乃旋師入百濟營，令軍中曰，夫勝不忘

敗，安而慮危，古之善教也，今臬軍絕域，摩

肩虎豹，接袂豺狼，豈可輕忽不思變難，拳軍

竦服，是歲冬，新羅入貢，崇峻帝四年，男麻

呂与巨勢比良夫等，同為大將軍，領兵二万余，

出居筑紫，再問任那之事，

「十ノ上」調伊企儼、為人勇烈、欽明帝時、副紀男麻呂、

問新羅之罪、軍敗所執、伊企儼不屈、新羅逼

之、脫其禪、露其臀、使向日本而呼曰、日本

將噉我髓、伊企儼使大呼曰、新羅王噉我髓

髓、新羅王大怒、益加陵辱、伊企儼不屈、遂

遇害、（未行）

巨勢德太古、大臣男人曾孫也、皇極帝二年、

德太古、位為小德、党蘇我入鹿、襲山背大兄

王於班鳩宮、及入鹿被誅、其党集兵、謀作乱、

德多古奉天智天皇命、諭以逆順、賊党潰散、

孝德朝、授小紫、大化五年、進大紫、轉左大

臣、白雉元年、新羅貢調使知万沙餐等、著唐

服泊筑紫、朝廷惡其恣易俗、譴責還之、德多

古奏曰、今不伐新羅、後必有悔、請自難波津

至筑紫海、多泛戰艦、以盛形勢、召新羅問其

罪、彼必懼服、無復後患矣、議竟不行、齐明

帝四年薨、年六十六、子黑麻呂、至中納言小

錦中、黑麻呂二子、曰邑治、曰小邑治、邑治

大宝中、從粟田真人為遣唐使大位、後至正二

位中納言、小邑治、從五位上、子界麻呂、為

邑治所養、承其後、累進從三位、為參議紫微

大弼兼兵部卿、

阿倍比羅夫、或称阿倍引田臣、崇峻帝二年、

勅觀察北陸道、齐明帝時為越守、四年奉勅率

戰艦一百八十伐蝦夷、齋田・淳代二郡蝦夷、

輸誠歸降、乃置郡領淳代・津輕二郡、会渡島

蝦夷等、大饗而帰、又伐肅慎、獲生鰐二、鰐

皮七十張、婦而獻之、明年、再討蝦夷、与衆夷議、置政府於後方羊蹄、遂伐肅慎、虜四十九人、以婦、賜比羅夫及道奥国司位各二階、六年、又以二百艦伐肅慎、到大河側、於是渡島蝦夷千余、前河而營、有一人、出營呼曰、肅慎舟師多來、將殺我、願渡河相屬、比羅夫命船召之、問賊動靜、因遣使召賊、賊不肯來、乃積綵帛兵鉄於海畔餌之、賊繫羽為旗、舟師來近、既而乞和、比羅夫不聽、進攻其柵遂破之、虜五十余人以婦、天智帝稱制、与前將軍阿曇比羅夫等救百濟、時為大華下後將軍、尋与前將軍上毛野稚子等討新羅、与唐援兵戰我軍不利、百濟王隨我師來投、其後比羅夫為大宰帥、進大錦上、子少麻呂、少麻呂慶雲元年、賜姓阿倍朝臣、和銅中拜中納言、以其公平超百寮、進叙正四位上、為造平城宮司長官、明年叙從三位、養老元年進正三位、二年転大納言、四年薨、

頗襄曰、當其初也、置府任那、譬使三韓、易置百濟之主、如奕碁然、何其盛歟、而何脩以致之、曰上下同心、国如一人、而処置外国、足服其心、是已、嗚呼、後之有国者、不必冀其盛、当学所以致之也、

武生曰、昌大之家、必有柱石之僕、休安之国、必有棟梁之臣、応神・仁德雖明聖、而武内之老成輔導之功居多、惜其言行鮮伝矣、夫人皇之初、人寿多百三四十歲、而武内三百余歲、則他未見其比、如可疑者、抑父子相襲、而史失其代乎、將上寿実有如是者也、齋藤馨曰、海外之域、非我地也、我無故而擊之、雖一戰而克、遂奄有之、然君子不為也、神功皇后之征三韓也、論者以為新羅援熊襲令叛、故后舍熊襲而擊新羅、根本既拔、則枝葉自服、此史之所不載、而事理所必有、吾亦以此知阿部比羅夫東征之由矣、比羅夫

受齊明命征蝦夷、遂伐肅慎、獲生羅二、羅皮七十張、再征蝦夷、置府于後方羊蹄、更伐肅慎、虜四十九人以歸、方斯時、叛者蝦夷耳、肅慎非我地也、我伐我叛者、可也、而伐非我地之肅慎、何哉、且蝦夷性愚、可以威服恩懷而無變、後世且然而當時之蝦夷、反亂相踵、不可制服、前比羅夫者、有御諸別田道之征、而其後刈田田村諸將又征之、然僅克輒復叛、數百年奧羽之地、無復一日之安、豈蝦夷之性愚弱於後世、而倔強于當時耶、願亦肅慎靺鞨之徒、為之後援、猶熊襲叛於筑紫、而新羅援之故耳、然則叛者蝦夷也、使之叛者非蝦夷也、前後諸將、皆知征蝦夷、而不知拔蝦夷之本、独比羅夫、奮踐荒漠不毛之地、赴海外不可知之域、侵冒蠻煙胡氛而不恤、直欲拔而取之、是与皇后之征韓、何異哉、皇后之兵、上下一致、精勁

靡比、故一挙拔之、而比羅夫以一將帥之力、自率部屬、而事遠略、一再征討、所獲不過數獸皮与數十生虜、若此時朝廷出兵繼之、必使拔巢窟、而移府于其地、左征右略、益闢恢廓、海外數千里之域、皆已沾王化矣、三韓地与漢近、故屬我、并屬漢我欲專之而不能、是皇后之業、所以伝万世為王家之外府、今乃急於凶西、而略於東北、後方羊蹄之府、後世無復修者、致使今日鄂虜韃夷、環視其外、漸成蚕食之勢、嗚呼、誰知千歲之前、且伐非我之地、而千載之後、軫致我地為外所窺之患哉、

齋藤謙曰、往昔三韓・任那・肅慎・靺鞨諸國、或服屬、或入貢、史不絶書、吾國威武之盛、震于殊域、後世服屬、惟琉球蝦夷而已、未知武略之盛、与古孰優、

將逃之荆蛮乎、不得不為之臣屬也、先是百濟貢論語千字文、而皇太子既師阿直岐・王仁學焉、其聞泰伯夷齊之事也必審矣、退讓三年、其慮之必熟矣、故皇太子此舉、學泰伯夷齊之意、而不學泰伯夷齊之跡、可不謂之善學哉、

又曰、応神帝信聖人之道、使菟道稚郎子學焉、釈氏之法入中国、其始信之始學之者、厩戸皇子及蘇我馬子、馬子大逆無道、而厩戸党焉、視諸応神聖明、太子孝友、仁讓義勇並至者、其一得一失、明如觀日、而仏者猶說功得不止者、何也、

〔七〕

頼襄曰、道一而已矣、道之在天下也、猶日月也、日月者天下之日月也、非一国所私有也、道亦然、父子君臣夫婦、無国無之、而慈孝忠義、有別不雜、皆存於自然、非有待於人作也、我邦列聖、保民如子、不讓堯舜

禹湯、其風俗尊君親上、相愛相養、又有過唐虞三代之民、則雖無經籍、其道固具在、特未有名而教之曰仁曰義者耳、譬若人家、

同是一里也、而居之有旧有新、某巷伯、某井溝、皆有名、因記以帳簿、新者必問於旧者而知之、旧者曰、是吾巷佰井溝也、可乎、今天下之仁義也、儒者指而私之曰、是漢之道也、有称国學者、斥而外之曰、是非我之道也、皆非也、道豈有彼此、載之以文、彼較旧於我、彼來而貢之、我取而用之、与釀冶織縫之工何異、載藉者織縫釀冶也、而仁義者蚕也桑也麴米銅鉄也、以麴米・銅鉄・蚕桑為自彼來者、儒者之見也、欲廢織縫・釀冶者、国學者說也、故曰、皆非也、夫道一也、則學亦一也、寧有所謂国云者乎、陋哉、

〔六〕

巖垣松苗曰、帝始召博士於西藩、授經典於

皇子、以興明倫之學、爾後為政、必由儒道、後世遣使于唐、命留學生、益明斯道者、帝固創之、嗚呼、帝寔為萬世億兆君師、故於列聖中、特廟祀之、與皇祖並稱、以其德不可讓也、

「八」

山懸禎曰、人之有仁義・忠孝、固天之所賦也、而其驕狠敖惰、亦氣質之偏、人不能無之也、有其實則有其名、凡自天地・陰陽・風雨・寒暑、以至於人物百事、有其實則命之名、以使稱呼、自然之勢也、聖人以其善者為法、而懲惡者、教之所由起也、今人家有子弟、孰不教之忠孝・恭儉、而戒其敖狼・驕惰乎、人君之子視萬民亦然、故一家之教、乃一國之所以教也、此道也、窮天地、亘古今、人類之所在、無適而不然焉、何有彼我區域之別哉、故雖我邦之人、忠孝・仁義、固同一性、但古未有文字之紀之耳、故

及漢土書籍之來、而隨其名稱而稱之、又以為教、亦自然之勢也、而近世有以其名義文字皆自彼來、概為出於彼土聖人之作為、而欲廢而斥之者、因斥我先皇博求善之公心而非之、派上古未有文字之前、而指其荒唐繆悠之說而以為道、自心神以往、列聖之所為、皆不屑之矣、是蓋出於其忌克之私心、而非公平之見也、然欲對漢竺而別創一道者、勢不得不然焉耳、

又曰、泰伯之讓、孔子稱為至德、夷齊之相讓、孔子曰、求仁而得仁、仁德兄弟之相讓、亦求仁而得仁、死而無怨者也、可不謂至德乎、

「四」

或曰、鷓鴣王仁聖且長、心神何舍之立少之為、其出於愛少之私情乎、而菟道王遂死於守義、則不能全其愛於身後、可謂明哉、嗚呼、心神一蔽於私、以失其明、違天下之

公道、速太子之非命、致三年之空位、是聖王之過、得非日月之食乎、武生曰否、不然、夫応神欲大明儒教於天下、故徵經典博士於韓國、顧諸皇子独菟道王好學賢明、則可位以任斯道矣、其為天下後世慮、不亦大且遠乎、而特以私愛告諸皇子者、蓋欲以父子之至情感発其心也、諸皇子苟以父之心為心、則必愛父之所愛矣、皇太子之位、得以固焉、応神之所圖、蓋如此而已、若夫皇太子之死於守義、大山守之包藏禍心、乃意外之變、雖聖王豈得預知之、則郁々之美、未不必勝之、則応神之所為、其以為過拳哉、

「五」 武生曰、難波菟道之相讓、猶夷齊之讓國也、信千古之美談也、而夷齊兩逃、以全其身、如菟道之墮命、何其痛也、及応神之立為太子、蓋固辭、固辭不得、蓋遠逃如泰伯、則庶乎免矣、然是自己然、而讓之者、方其未

然也、菟道王特見父之志不可凶焉、故且承命、以安其心、未知兄之志不可奪焉、故待父没然後讓、讓而不得、於是乎見死如婦、菟道王所處、無復遺憾、堯舜之道、孝弟也已矣、二聖之所以垂教於天下後世、其莫以加焉、

「十」 武生曰、予嘗論儒教有益於我、而仏法有損於我者、蓋儒教之行、当応神明聖之時、而菟道太子學之、以成讓德、全天倫、垂教於後世、仏法之行、当晨牝晦冥之朝、而上宮太子學之、以失典刑、網漏滔天之惡、其是非利害、昭々如此、而後世彼道之熾也、聖德太子、堂宇巍然、香火無絶、而菟道太子、遺跡湮没、幾無識者、可勝慨哉、

物部尾輿

物部尾輿、オホムラシメノ大連目孫也、父曰荒山、及欽明帝

即位、尾輿為大連、明年九月、帝幸難波、乃

問群臣曰、今將伐新羅、當用幾兵、尾輿等奏

曰、不可、曩昔男大迹天皇時、百濟遣使請任

那四果、大連大伴金村輕易執奏輒許、其所請

由是、新羅積怨于我久矣、臣愚竊以為未可以

輕伐、帝從之、十三年、百濟獻金銅积迦仏像

及經論、上表贊其功德、帝大喜、詔使者曰、

朕未曾聞如是微妙之法、因問群臣曰、西蕃所

獻之仏、相貌端嚴、所未嘗見、朕今可礼否、

大臣蘇我稻目、勸帝拜之、尾輿及中臣勝海奏

曰、我國家、古來惟敬天地社稷百八十神、春

夏秋冬、祭之為事、今乃拜著神、則恐起國神

之怒、帝曰、宜授情願人、遂賜稻目、是後、

諸國大疫、民多夭亡、久而愈熾、尾輿・鎌子

又奏曰、嚮不聽臣言、以致斯禍害、不遠而復、

必當有慶、宜造乘仏像、以補前禍、帝納焉、

詔有司、造仏像於難波堀江、悉焚伽藍、子弓

削守屋、

史論曰、物部尾輿、敬神排仏、可謂知本矣、

惜其不學無術、不以物則民彝開陳主聽、徒

以災厲徵其言、嗚呼此乃所以反招其法之盛

行也、

松本巖曰、古之良將、先勝而後戰、故師出

必以律、今觀尾輿之請罷伐新羅、其意蓋謂

今日之師、實無名於我、而有辭於彼、是士

氣奮惰所係焉、其為不可先勝也、審矣、故

婉辭以諫、而帝從之、亦將相之良哉、

又曰、以災厲動主聽、納約自牖、果然、帝

納其言、詔造仏像於江、悉焚伽藍、非善諫

而何、後經三十余年、仏法遂延漫者、既戶

皇子及蘇我馬子之力耳、非尾輿之所知也、

論者或咎其不以物則民彝開陳焉、可謂酷矣、

巨正純曰、仏像始來本朝、天下疫、內裏始火、

此時百濟聖明王淫仏、為新羅亡、梁武帝淫仏、

為侯景亡、亦此時也、

巖垣松苗曰、百濟王聖明、深溺仏説、遂獻仏像於本朝、而是後為新羅所攻、為擒而見殺、

所謂福徳果報者何在、稻目子馬子、亦繼父志好仏、聽天堂快樂之説、流涎蕩心、益極奢慾、至弑崇峻帝、孫蝦夷、曾孫入鹿相統為逆、噫我邦於仏法、稻目・馬子之崇奉為始、而人臣縱慾弑君者、亦馬子為始也、先是眉輪有弑安康帝、是座童年不知君上不可讎之義耳、如馬子者、天下共討之賊也、而使其老死牖下、可嘆哉、

山懸禎曰、(興)信仏者未必獲禍、亦未必獲福也、而世之佞仏者、唯悅其福徳果報之説焉耳、是以利心盛而義理昏、往々至危亡國家者、非信仏之罪、而惑利之禍也、及其罹乎禍、而仏亦不敢救之、則其不足信、亦可知矣、

物部弓削守屋中臣勝海
捕鳥部万

物部弓削守屋、尾輿子也、繼父為大連、敏達朝仏法漸行于世、大臣蘇我馬子、首崇信之、守屋心不喜之、頗有所規諫、十四年、人民多疫死、守屋与大夫中臣勝海カクシ、俱奏曰、自先朝以来、疾疫流行、生民將絶、此豈得非蘇我臣盛信仏法之故哉、請速禁絶、詔從之、守屋躬自往寺、踞于胡牀、毀塔宇、燔仏像、棄余燼于難波堀江、而責馬子及其徒信仏者、遣佐伯御室、逮馬子所崇信三尼、馬子啼泣出之、吏人奪其納衣、撻於海石榴市、馬子甚恥之、由是構怨、守屋嘗与穴穗部皇子相善、皇子惡陰抱異志、使守屋率兵攻、三輪逆使守屋攻殺之、馬子歎曰、天下之乱不久矣、守屋曰、非汝小子之所知也、用明帝二年、帝不予、詔欲帰仏令群臣議之、守屋・勝海又奏曰、背国神而敬蕃神、臣等所未知也、唯馬子贊之、引豊国法

師入宮中、守屋大怒、押坂部毛屎ケツシ、密告守屋曰、今群臣凶君、將要於路、守屋乃退居於阿都別業、聚兵自衛、勝海亦聚兵心之、作彦人・竹田二皇子像厭之、既而勝海知事不成、適水派宮、歸于彦人皇子、舍人迹見赤禱トシノイヒ、伺其出宮、擊殺之、而馬子益招集其党、日夜警備、及帝崩、守屋欲立穴穗部皇子為嗣、託胤於淡路、而与穴穗部皇子相謀、事泄、馬子遣兵殺穴穗部皇子及宅部皇子、而与泊瀬部、竹田、豊聡耳、難波、春日諸皇子、及紀男麻呂、巨勢比良夫、膳カンシテ、賀柁夫、葛城烏那羅ウナラ、俱率師攻守屋、遣大伴噺、阿部人、平群神手、坂本糠手、春日臣、從志紀郡抵涉河家、守屋親率子弟及家兵、築稻城拒戰、兵勢甚壯、守屋登樹雨射、諸皇子軍恐怖三退、豊聡耳及馬子、整兵進攻、迹見赤禱遂射殺守屋、余衆潰散、子男親戚、或有變姓名逃匿者焉、世伝大連家多藏本邦古

犬亦有日本魂者、可以人而不若犬

典籍、是時散亡殆尽、後學嘆惜焉、捕鳥部万トリベノマン、守屋資人也、当馬子攻守屋、將兵一百、守難波宅、聞守屋死、乘夜潛逃抵茅渚チヌ、有真香邑、与其妻訣、遂匿山中、馬子遣兵索之、走入叢篁中、以繩繫竹梢而搖曳之、衆意其有伏兵、不敢逼近、万乃逸去、有一人伏溪口、射之中膝、追者亦及、隔水而射、飛矢如雨、万輪振刀、大呼奮擊、殺三十余人、竟自刎而死、肆尸於市、夜大雨疾雷狂風、万家所畜白狗、窃銜其首、至有真香邑、跑古冢埋之、躬臥其側、不食而死、廷議義之、命瘞白狗、遂封万墓与之对、国司又言、是役也、戰死於餌香川原者数百、身首異处、姓名難弁唯認衣色取之、有桜井田部膳ササ、所養狗、能識其主、接統身首、伏側守之、待人收其屍而去、林道春曰、馬子弑崇峻、太子何党馬子、而不討賊哉、太子宗室也、已称守屋之惡、起稻城

之役、守屋未嘗弑君也、其惡其罪何在哉、親見馬子之弑逆、而因循以從之、則馬子之罪、亦有所分耶、

史論曰、崇峻崩而無嗣、額田部皇女推古、蘇我

氏之出也、馬子既行弑逆、權無出其右者、蓋

群臣承其意而勸進、此国朝女主登極之始也、

而帝納皇太子之言、盛興仏教、勸寺院、度僧

尼、天下翕然嚮之、惑溺之甚、在女主固不足

論、而不能討馬子之罪、亦非所責也、

山泉禎曰、當是時、豐聰与馬子、方興仏法、

於是、尽誅除排仏者、物部守屋・中臣勝海之

徒、独与馬子固結為党、固是私意耳、凡世之

信仏者、亦唯悅其福田利益之說、則本皆出於

私心、何有於義理矣、蓋人私意一萌、則知識

昏蔽、是非顛倒、莫所不至焉、豐聰之不能討

馬子、亦不足怪也已、

又曰、敏達英明、不信仏法、詔馬子曰、汝欲

為之、勿惑他人、天語可謂簡要、此知其法之不可也、既知不可、而許馬子為之、則私之也、

在廷諸臣、皆知其許馬子、則孰有不嚮其風者

哉、使帝毅然禁遏馬子、毀絕仏像經論、而一

遵祖宗之法、則社稷之福、可勝言哉、用明享

世不永、頗尊崇之、馬子無所忌憚、与厩戸皇

子同志、殺弓削守屋・中臣勝海、而其法盛行、

浸淫瀾漫、蠹害天下、未必不由天語輕發之所

致也、

賴襄曰、儒學与仏說、皆自外国來者、無挾也、

而仏說一入吾国、有好之崇之、以易君父者、

何哉、儒學叙人倫、平易無可喜、其文雖外来、

而其実固在我、不如仏說之新異宏闊誇大足聳

人聽也、吾嘗誦三韓之史、其君之惑於仏說、

以致乱亡者皆是、吾邦未至如彼也、而有酷肖

焉者、夫人臣行弑逆、開闢以還所無、可謂天

地之大變矣、而諉之過去之報、幾乎三綱淪而

九法數矣、厩戶智慧過絕人、姑為太子、以屬人望、其志在異日即真擅乎天下、而倚於馬子之勢、馬子与大連相軌、欲除之而自逞、亦倚太子以濟其姦、而皆藉於仏説、遂致誦呪媿典禮、堂塔塗膏血、王業之衰、大端在此、三善清行之所言、可以驗焉、雖然、清行特言其費而已、不知其顛倒是非、混淆善惡、烈於洪水猛獸之害、姦雄之人、每藉、之以解其心、下及北条・足利之崇禪教、莫非宗此旨也、我邦君臣之義、度越万国、而西竺之說壞之、歸之於土灰沙塵而止焉、而開其端者、厩戶・馬子也、可勝概哉、千載之下、獨織田氏、断然不惑、庶幾匡正祖宗之國者矣、是以今之仏説、行於愚夫愚婦、而為人上者之信之、不至如古昔之太甚、是我邦之幸也、焉知非祖宗佑之冥々之際也耶、旧事之記、出於厩戶之手、蓋亦有錯乱事實、以資自便者、不可不察也、

又曰、国朝初有大臣、尋置大連、並聞軍國之政、蓋分其權、使無偏重也、蘇我氏以外戚為大臣擅政、而物部氏官大連、与之抗争、物部氏敗、而蘇我氏至行弑逆、則權不分爾、其後厩戶与中大兄、並以太子管朝政、多經年所、大友与高市、並以皇子為大政大臣、為日淺、其不委權於人臣、其意一也、及至文武、乃定知大政官事之目、以親王為之、位在左右大臣之上、自是其後、耆德宗室、更膺其任、以至於聖武之初、朝廷清明、綱紀畢張、無有權姦壞國之事、當是時、朝議斟酌、祖宗之意、立為至当之制、可為後世法者、夫太政大臣之名、見於大女高市、前後所無、蓋以為定国儲之漸耳、非可常置之官也、何則人臣夾輔天子、不可專管太政、人臣而管太政、是弁髦天子也、故特屬之親王、而不敢立官名、称知太政官事、如曰是儲王也、而与知此官庁之事而已、非矣

任其官也、實任其官者、則有左右大臣、仍分之也、而其下有弁官、有納言、有外記、判事、體統相屬、管轄而上、而天子臨決焉、所以尊人主之勢、而防權柄之下移也、人主不深察於此、以藤原不比等之為外舅、欲寵以太政大臣、幸而不敢拜、是猶唐朝臣之不敢拜尚書令、以避太宗旧銜也、如孝謙之於僧道鏡、不論可矣、至文德、以授藤原良房、其後為帝戚者、往々狠其任、居之不疑、然後祖宗之制一變矣、再變而至武門于政、有主將係此官者、世以為稀事、以為是非藤原氏不拜者、不知藤原氏之拜、已非古也、噫世變至此、可勝浩歎哉、

齋藤馨曰、厩戶与蘇我馬子、協心崇仏、而物部守屋拒之、卒為其所亡、余曰、守屋之拒仏也、即助仏也、夫欲拒之者、必先知其教之為何如、然後知其拒之宜何如、守屋欲拒仏、而不知仏之教為何如、則未也、仏之教、空虚寂滅、無

有人倫日用相愛相生養之道、而其視父子、君臣、為漠不相関之人、故為之徒者、往々弑父弑君而不疑、他日馬子弑崇峻、而厩戶恬視不怪、愈与之友善、是其教使然也、則仏既以無父無君教人矣、是君子所以欲斷滅之掃蕩之、而使其無遺類也、不然、仏不過外国一奇異之談耳、拒可、不拒亦可、曷必動兵戈驚朝野而拒之哉、守屋果知厩戶・馬子之所奉者、為無父無君之教耶、必當奉有父有君之人而可也、而其所奉者誰欤、非穴穗部耶、彼穴穗部者、方敏達之崩、窃懷覬覦、憤群臣之集殯宮曰、何朝死王而不朝生王、及用明即位、陰謀不軌、又欲蒸先皇之后、強入殯宮、而怒三輪逆鎖門不納、使守屋殺之、及用明崩、守屋凶立之、不克、夫先皇崩而欲蒸其后、又冀其位、則其為人、既已無父無君矣、是亦一仏耳、而守屋為之竭力、殺無辜之朝臣、推不当立之皇位、

而其名既已不正，乃欲拒廐戶・馬子之佞，庸可得哉。方此時，守屋苟責穴穗部而斥之，正朝政、敬國神、脩神世以來相承之常典、而罔所欠，則彼安能拳外夷之道而加之，即拳而加之，人心不服、滅之無難、唯守屋不然，故彼弑逆之迹未彰、而我党無父無君之人，其罪已著，天下無助之者，烏得不亡，守屋亡、而無拒佞者，佞之害乃被天下，故曰、守屋之拒佞、即助佞也、嗚呼守屋既不知佞教之何如，則其拒佞、特以其自外而非，我旧有故爾、自外而來、非我旧有者、文字也、縫織也、孰非是者、推守屋之心，則將拳文字縫織而拒之耶、武生曰、世人皆謂守屋氏為佞敵、故亡守屋氏、皆出於上宮大子之意也、予獨以為不然、蓋太子仁弱之人也、且是時年甫十六、雖曰聰敏、猶童心而已、豈有意於亡守屋氏、亡守屋氏者馬子之首謀也、馬子固欲逞逆威、故以佞教師

其虎狼之心、諺所謂捕鼠猫隱其爪者也、而耽々逐々、覬覦朝廷、吞噬不從己者、顧諸皇子、獨穴穗部剛毅不可制也、顧群臣、獨守屋忠貞不可奪也、且有勝海為之服心、其他皆可以利誘、可以威服、故誣穴穗部、以將姦炊屋姬殺之、以興佞法、深結太子心、以祈病欺蔽天皇、愚弄炊屋姬及諸皇子、皆為己党与、殺勝海以鍛守屋翼、而後守屋氏孤立可殲焉、然以國神天意猶有援之、故用兵艱難、僅得克之、守屋氏既亡、則拳天下唯馬子所欲為、明如太子、在其術中、而不自知也、馬子信奸賊之尤者、而後世党佞氏者、乃謂守屋為逆臣、何其冤也、嗚呼馬子佞面狼心、不惟欺當時、以欺後世、可惡之甚也、予故表其心而誅之、使馬子聞我言、亦將服其罪焉、獨惜守屋氏、尽忠守正、而不免於死亡、夷王室之大禍也、詩曰、人之云亡、邦國殄瘁、不亦痛乎、予今抗言其冤、千

載之下、將為守屋氏之忠臣矣、

巖曰、武氏之說、可以為守屋之斷案矣、

実曲当郷戎
之過莫尚焉

〔卷〕
「十ノ下」

日羅

日羅、火葦北国造阿利斯登在任那府所生子也、

敏達帝十二年、下詔曰、当我先皇之世、新羅

滅任那、先皇謀復之、不果而崩、朕謹承遺詔、

欲復任那、於是、聞日羅之在百濟、賢而有勇、

遣吉備海部羽島徵之、百濟愛其材、而不肯遣、

帝再遣羽島、固召之、百濟遂使恩率德爾・余

怒・可奴知・參官・挽師德率次干德等護送、

来抵吉備兒島屯倉、朝廷遣大伴糠手子勞之、

復遣大夫等、慰勞之於難波館、日羅被甲乘馬、

抵門而下、徐進庁前、跪拜曰、火葦北国造阿

利斯登之子臣達率日羅、奉勅来朝、不敢寧处、

乃解其甲上之、詔館於阿斗桑市、供給優厚、

随其所欲、遣糠手子、阿倍目、物部贄子、就

正大明確切

問討新羅復任那之策、日羅奏言、夫治天下之

要、在愛養黎民而已、何遽興兵致危殆為、臣

為当今之計、令上自臣連二造、下至百姓、家

給人足、無所闕乏、行此三年、待食足兵足、

上下一和、不避水火、同恤國難、而多造船艦、

列置海津、誇張聲勢、使韓客見之、則必生恐

懼、然後選才能、使之百濟、明視恩威、召其

國王、國王不来、召其太佐平王子、先服其心、

而問其罪、何患新羅、何慮任那、帝喜之、恩

率參官恐其言已因陰事、密命德爾・余怒、暗殺

日羅、帝大怒、收德爾等、下獄鞠問、皆服罪、

乃以德爾賜日羅族誅之、

武生曰、善哉日羅之策國也、是我先皇所以安

海内服戎夷之方也、予固非欽明之用兵、而日

羅一言蘇息彼此生靈幾千万、可謂博濟矣、敏

達善納用其言、後八年至崇峻時、詔遣紀男麻

呂等、率兵二万余、屯筑紫、使吉士磐金於新

羅、吉土木蓮子於任那行成、遂復任那、賢者之言、有効如是善哉、日羅之策国也、不勞一戰、不殺一人、以威西虜復亡国、務本之功、赫々如此、

藤井蔵曰、一時明良之会頓革旧弊、暗西土先王之制、可謂仁之至也、宜哉、皇統悠久、宿禰之後亦綿延也、
冊子原寸 縦一九・八櫃 横一四櫃 三八枚

〔二ノ上〕

野見宿禰出雲人、天穗日命十四世孫也、垂仁

一八八〇ノ三

朝大和有当麻蹶速、長大多力、每自大言曰、

(表紙) 一日本魂第二編下」

天下有能敵我者乎、安得遇其人、一決雌雄也、

帝聞之求对、或薦野見宿禰、帝即日遣使召之、

日本魂 第二編卷之下

命角力焉、野見宿禰賜蹶速脅腰骨折而斃矣、

出雲 松本巖 編集

乃以蹶速田宅悉賜野見宿禰、由是邑有腰折田

藤原鎌足

(朱) 〔六〕

野見留仕朝廷三十二年、皇后日葉媛崩、先

〔十二〕藤原鎌足、一名鎌子、本姓中臣、父御食子、為

是、皇弟倭彥命薨、以其近習數十人為殉、昼

小徳冠大鏡曰、鎌足生于常陸、元享積書曰、和州高市郡人、其先天兒屋根命、

夜哀号声聞于外、帝聞而惻之、詔禁殉死、至

為瓊瓊尊輔臣、其孫天種子命、仕神武帝有功、

是、帝使群臣議之、野見宿禰奏請、延トシヘ、埴ニ、以

掌祭祀、天種子命八世孫大鹿島命、垂仁朝為

造車馬人物等形、樹之墓、帝嘉之、立為永制、

大神宮祭主、大鹿島十一世孫常磐大連、欽明

以野見任土部職、賜姓土部臣、(朱)「別本ニ評アリ」

朝始賜姓中臣、常磐大連生可多能祐大連、御

食子乃可多能祜大連子也、鎌足博涉書伝、器宇宏遠、智略絶人、皇極帝三年、蘇我入鹿既殺、山背王、倍無所忌憚、漸謀篡奪、起第甘穡、称曰宮、其子曰王子、出入擬乘輿、鎌足慨然欲正綱紀、是年拜神祇伯、称病不就、退居三島、鎌足素善輕皇子、皇子亦称病不朝、鎌足教詣皇子留宿、皇子知鎌足志在匡濟、礼遇特至、鎌足又察宗室諸王可輔以濟功者、属心中大兄皇子、然無由通情、一日陪皇子、蹴鞠於法興寺槐樹下、皇子靴偶脱、鎌足跪奉之、皇子亦跪受之、由是情好日密、南淵漢人、以推古朝入唐学生、聚徒講学、号曰南淵先生、鎌足与仲大兄、俱受業焉、每相往来、密議於車中、無計不相協、鎌足曰、成大事者、不可無毘輔、今日之計、非得蘇我石川麻呂則不可、王宜納其女以為妃、而後与之謀、則成功之路莫近焉、皇子大悅、鎌足往說石川麻呂進其女、自是石

川麻呂亦赤心奉皇子、鎌足又薦佐伯子麻呂、葛城稚犬養網田、会三韓使至、欲以其進貢之日举事、及期、帝御大極殿、入鹿為人多疑、劍不違身、鎌足使俳優調之、入鹿笑而解劍、入就位、皇子戒守門者、鎖絶出入、聚衛士一所、如将賜物、親執長鎗隱戶側、鎌足持弓矢警衛、使子麻呂、網田匿二劍於貢櫃中而進、石川麻呂前說表文、将尽、鎌足促子麻呂、子麻呂畏縮不發、石川麻呂手戰声顫、流汗被面、入鹿怪問之、石川麻呂曰、天威咫尺、不覺乃爾、皇子恐其失機、直入斫入鹿肩、子麻呂斫其脚、入鹿攀御座乞哀、皇子伏奏曰、入鹿翦滅宗室、覬覦神器、反形已著、陛下寧以天孫易入鹿哉、帝則起入内、入鹿遂伏誅、皇子入法興寺、以兵自備、諸皇子公卿皆來從、入鹿臣属、謀擁其父蝦夷作乱、既而潰散、蝦夷悉焚古今凶書珍宝而自殺、帝欲佞位於中大兄、中大兄以告

鎌足、鎌足曰、古人大兄、殿下之兄、不可越次、輕皇子、殿下之舅、而齒德俱高、不如讓焉以答民望、從之、輕讓於古人、古人固辭、薙髮入吉野、後謀叛被誅、輕皇子即位、是為孝德帝、便立皇姪中大兄為皇太子輔政、罷大連置左右大臣及內臣以阿陪倉梯麻呂為左大臣、蘇我倉山田石川麻呂為右大臣、而以鎌足為內臣、授大錦冠、增封二千戶、或曰、賜功田一百町、詔曰、社稷獲安、寔賴公力、軍國機務、惟公處分、鎌足誠忠、居官司之上、進退廢置、無言不聽、始建元号大化、是年三韓朝貢、百濟撰任那使事、其數有闕、詔卻之、遣使檢察任那國界、詔左右大臣曰、治國之方、當遵先王之軌轍、為政之務、在於無失信於民、詔臣・連・伴造、問民所患者、具狀以聞、八月、遣設鐘匱於闕、聽有冤枉者投牒撞鐘、九月、遣使諸國、錄戶口、詔曰、歷世天皇必置標^{アラハスミシロ}代

民、垂名於後、其臣・連・伴造等、亦各置己民、縱情驅使、割水陸地、以為已有、或兼并數万頃、或無立錫地、及進調賦、先自收歛、然後分進、及有徵發、各率己民、隨事而作、方今百姓猶乏、而有勢者、以私地壳百姓、年索其佃、今後不得壳地、勿妄作主兼并貧弱、十二月、遷都難波長柄、曰豐碯宮、二年正月、宣新制、詔曰、大夫所使治民、重其祿、所以為民、前代所置子代民、^{コシノカ}處^シ屯倉、及臣・連・伴造・國造、村首所在部曲・田莊、一切罷之、賜大夫以上食封、宮人百姓布帛、各有差、始修京師、每坊置長、四坊置令、按檢戶口、督察奸非、置畿內國司、郡司闕塞斥埃防人、造鈴契、界山河、定郡大・中・小、置大領小領主政主帳、定租庸調法、造戶籍、制班田收授法、置里長、定田畝、凡田長三十步、廣十二步為段、十段為町、段租禾二束

二把、町租禾二十二束以柜黍中者一之広為分、十分為寸、十寸為尺、五尺為步、三百六十步為段、以容柜黍中者一千二百為籥、十夕為合、十合為升、十升為斗、十斗為石、田一段得禾五十束、一束得米五升、段米二石五斗而輸二束二把、則取米一斗一升也、凡給口分田者、男二段、女減三分之一、每六年檢戶籍班田、凡庸正丁、歲役十日、若須收庸者、布二丈六尺、一日二尺六寸、制田調、凡絹繩糸綿、並從鄉土所出田、一町絹一丈、四町成匹、長四丈、広二尺五寸、繩二丈、二町成匹、長広准絹、布四丈長広准絹繩、一町成端、又有戶別調、一戸布一丈二尺、凡調副物及贄、亦從鄉土所出、二月、三韓入貢、三月、詔諸國司曰、凡為人上者、当先正己、而後正人、己不正、何能正人、凡國司在國、不得專判罪、及受賄苦下民、莫藉官勢取公私物、宜各食部內粟、騎

部內馬、八月、詔諸國造、納賄國司、兩求其利、貧黷污穢、不可不治、若有犯者、次官以上降爵位、主典以下決笞杖、其贓物倍而徵之、又詔、定葬式、勿得過制、申禁殉葬、詔諸國造兵庫、間地收兵仗、繕治沿辺兵備、九月、遣使徵新羅質、罷任那調、三年正月、觀射于朝、四年、治營船柵備蝦夷、置柵戶、五年二月、定置八省百官制、十九階冠、白雉二年、新羅入貢、卻之、以使者著唐冠也、五年、詔謙足（兼）授紫冠增封戶、皇極・齊明帝四年、使越守阿部比羅夫率舟師百八十艘伐蝦夷、降之、置淳代・津輕二郡領、又伐肅慎、五年再伐蝦夷、置後方半蹄郡領、六年、新羅借唐兵滅百濟、百濟佐平鬼室福信遣使獻唐俘、請迎其王子豐璋為王、詔許之、十二月、詔救百濟、令駿河國造船艦、七年正月、車駕至筑紫、七月、天皇崩于朝倉宮、皇太子奉梓宮還難波、十一

月、殯于飛鳥川原、臨九日、遣大華下阿曇比羅夫等救百濟、別令小山下秦田來津、以兵五千獲送百濟王子豐璋、立為百濟王、授織冠、壬戌歲正月、皇太子素服制軍國事、賜金策於佐平鬼室福信、給糧仗布帛、拋周留城、進擊唐兵破之、走新羅兵、癸亥歲二月、福信獻唐俘、六月、我兵伐新羅、拔沙鼻岐奴江城、已而豐璋猜福信專權、殺之、以故群臣不付、九月、唐劉仁軌等、水陸并力攻周留城、我兵拒之白江口、不利退、小山下秦田來津死之、明日復進戰、敗績、豐璋棄城逃高麗、皇太子召諸將還、甲子歲春、改增冠位為二十六階、冬、興筑紫水城、置防烽耆岐・對馬等処、乙丑歲春、追贈鬼室福信小錦下、分処百濟投化民、鬼室集斯等男女二千余口於東國、給復十年、冬、大閱于菟道、是歲、唐使劉德高來修好、丙寅歲、秋大水、免租調、丁卯二月、葬皇

極・齊明天皇、三月、遷都近江滋賀、十一月、城高安^和・屋島^讚・金田^對馬、天智帝元年正月、天皇即位、二月、立大和姬為皇后、秋講武、近江置牧馬、三韓入貢、是年蓋大化維新綱舉目張者、皇太子及鎌足之力居多焉、白雉五年、詔鎌足授紫冠、增封戶、既而皇太子即位、是為天智帝、帝即位一年、鎌足疾病、帝臨其第、親問所患曰、天道輔仁、何言之虛、積善余慶、猶是無徵、若有所欲言、便可以聞、鎌足奏曰、臣之不敏、生則無益軍國、死不欲擾百姓、如其葬儀、願從儉素、時論稱之、尋使大海人皇子就第賜大職冠、授大臣位、賜姓藤原、明日薨、帝再臨其第、使大錦上蘇我赤兄宣恩詔、賜金香爐、鎌足二子、長僧定慧、入唐留学、次不比等、初葬鎌足於撰津阿威山、定慧帰自唐、改葬于大和多武峰肖像祀焉、

史論曰、恨之蚩々、必頼君上為之法制、以

教率輔翼之、乃得遂其生養、故泰之象曰、天地交泰、后以財成天地之道、輔相天地之宜、以左右民、祖宗經國之制、至崇神始立矣、然猶有闕而未修者、孝德以慈儉為宝、日晏忘食、勤以自勵、大綱既舉、万目畢張、懸鐘設匱、以求善言、是明四目達四聰也、鑄市司津濟之稅、是閔市譏而不征也、至若建号紀元、置八省百官、造戶籍、禁兼并、弁上下、定民志、良規懿範、不一而足、如其戒國司之詔、富哉言乎、此孔孟扶世立教之旨、而好儒之効、亦可觀焉、帝王之學、詞芸固非所貴、而要在經世化民、若帝者可謂真好儒術、至治之隆、求之前古、亦不可多得矣、

永井定宗曰、内大臣歷事于孝德・齊明・天智三朝而不忒、討入鹿之逆、而安社稷、制官階、定禮儀、三朝善政、多賴大臣之功也、

然大臣以為未足尽臣職、遺奏薄葬、嗚呼自古人臣有微功、則誇其功、挾其勞、無君為亂者多矣、故曰、小人有非常之功者、國不幸也、今大臣功冠群臣、猶以為未足、可謂知臣道者矣、

賴襄曰、國朝之建、創於神武、開於崇神・景行、而成於応神・仁德、其後德衰、加以雄略・武烈之酷虐、至敏達・用明、大權下移、姦臣專國、徵天智王業或幾乎熄矣、天智奮宗室之中、運謀決機、親斃大姦於輔座之下、即登天位、天下所望、而退讓遷延、歷於兩朝、非有曠世之度、何能如此、而裁定制度、經緯天地、以開万世之太平、蓋以武王之烈、而兼周公之才、稱曰中宗、非溢也、大凡國朝以簡質治民、上下同心、國如一人、是國勢所以威四外也、及通隋氏、變質為文、殆失其故、及至天智、百度大定、

後世莫改、大抵取於李唐之制、而所以勝於唐氏者、曰立吏簡、取民庶、是不失我邦固有之美也、後王之過於模倣、文縛太甚、務於刻剝、則不達祖宗立法之意、而武門之治、民反便之、未必不由於此、雖然、武治有其簡、而無其廉、所以不如王政也、蓋神武以還、國有造、梟有首、雖尽由朝廷選而命之、或因其旧望、世襲其職者、往々而然、及至天智、蕩而廓之、尽郡県之、置国司焉、考課易置、收權朝廷、蓋天子精選六十六人之吏、以治万民、為民置吏、非為吏屬民也、雖然、其後国司有更代、而郡大小領、仍或以族望為之、及關東用兵、有大名小名之目、亦其地方豪族、多出人丁者、而鎌倉創守護地頭、用其類充焉、終成封建之形、而天智之制泯焉、是古今之大勢也、而貴氏族者、由於国族、雖明王之制、終莫之能勝欵、

又曰、天智画一之政、天武以還、經於持統・文武・元明・元正、而莫之或更、率由其旧、而倍修治之、課牧宰、禁姦利、通言語、明軍政、正度量、覈律令、其記於策者、班々然可按也、而其大旨在於保民而已矣、民之於君、猶水之於魚、土之於木也、有此則活、無此則死、故保民乃所以自保也、国朝之定租稅、已輕於二十取一矣、而列朝之政、有水必減、有旱必蠲、有疾疫興作軍旅、必給復之、其逋租積欠、在十數年之前者、時出令除免之、歉懇如此者、不徒垂恩以結其心也、不如此則民力薄、民力薄則国本弱、欲強其本者、必培而沃之、猶恐其或蹶、有根斯有枝、有民斯有君、列聖之所為、亦察於此爾、後世則不然、以為君本也、民末也、務培克之、浚其膏血、以自殖、輔其欲者、謂之能吏、呵責鞭撻、以求応副、流亡歲多、

田土歲蕪、補目前之升合、而損後日之億萬、
國以貧弱、至不能自保、則誰之咎歟、故曰
君之保民所以自保也、抑雖後世之君、非不
欲保民也、無奈國用不足也、故欲保民者必
自儉、不特自儉也、以此率人、所以上下俱
給也、當列聖之時、勸民課種諸穀、至蔬菜
之類莫不曲盡、而交易之用、則止於錢、非
如後世之汲、汲造金銀幣也、而未嘗聞其用
之或滯且乏、所以能然者何哉、聖武初年、
以京師士民、板屋草舍、難營易破、五位以
上、及庶民力堪營弁者、令以瓦葺、嗚呼其
風俗之不奢也如此、後世之貴金銀賤穀粟、
上下常苦不給、而農民無息肩之日者、其故
可知也、

山泉禎曰、天皇深崇儒術、銳意圖治、於是
制度大備、綱紀悉舉、本邦之文物、於是為
彬彬矣、蓋當此時、距皇祖千有余年、風氣

大開氣運方盛、若日之將中是其時也、

又曰、世有主太古之簡朴、別創一道者、其
意以為、本邦簡朴之風、散而趨華麗、淳厚
之俗、變而流詐偽者、是先皇慕漢土文物之
失也、余謂為此說者、其意善矣、然其於天
地之理、則未達也、試以一歲氣運言之、春
陽生物、其初未暢達、盛夏長育之、燁々乎
美矣、秋冬肅殺之氣至、枝枯葉脫、而後春
意復生、是一歲氣候之變化也、天地之氣運
亦然、其初也淳朴未散、及風氣漸開、淳變
朴化、而文明光華、郁々乎盛矣、盛極而衰、
禍亂乃生、亂極禍稔、而後復其治、是天地
氣運之變化也、故治亂盛衰、則天地之氣運、
而人情趣向、亦与时推遷、是自然之勢也、
故聖人有通變之道、隨時而變化、其道不窮
矣、孝德・天智之間、實本邦氣運極盛之時
也、於是乎、制礼法、興文物、燁々郁々、

以稱人情時勢、亦氣運之自然也、今欲使太古簡朴之風長無變、人情趣向常如一、則非天地自然之理也、

藤田彪曰、大臣蘇我入鹿、世窃權柄、罪惡貫盈、天智帝龍潛、与中臣鎌足、学周孔之道於南淵氏、明良遭遇、不啻水魚、同心戮力、神謀果斷、殄兇賊於瞬息、措宗社於磐石、夫以帝之英武、鎌子之偉略、遽升天位、直列大臣、其孰曰不然、而帝能久守儲位、輔佐大政、鎌子亦為内臣、屈於左右大臣之下、大化中興、宇内一新、當是時、東宮与内臣、其薰陶啓沃、獎順匡救如何也、此其神聖英武、忠義謀略、雖曰亦皆根乎天資、而非資切磋磨勵之功、則其効又焉能至此、周孔之道、於是乎大可觀矣、

或曰、皇極・孝德之姉也、天智之母也、蓋暴白入鹿罪、以致天討乎、名正言順、不患

不濟也、乃疑懼密謀、結以姻婭之私、而出乎燕丹荆卿之下策、何也、夫人臣擅殺入於朝得辭其罪乎、武生曰、不然、夫蘇我氏之立根、豈可易枝者哉、趙高鹿馬之權已成、而王莽篡漢之勢且至、況有古人皇子為之拔援、皇極亦惑而不知其奸乎、雖二皇子以昆弟母子之親致忠告、恐不見信、幾微一動、禍敗尋至、崇峻・山背、殷鑑不遠、觀諸異方、

漢竇武陳蕃、以大臣因竇后之親、奏誅宦官、以謀泄終死宦官之手、今夫入鹿之強、不啻如宦官、而二皇子与鎌足、未有竇武陳蕃之權、是事之至難者、而克成之、鎮靖中外者以密也、易曰、幾事不密則害成、又曰、君子安其身而後動、易其心而後語、定其交而後求、君子脩此三者故全也、夫二君一臣者、亦脩此三者而全也、且其所以大成功業、則南淵講学之資居多、与後世為無礼講、以謀北条氏

者、非同日之談也、

又曰、孝德大化元年、適唐太宗貞觀十九年^(太)也、唐治方美、故我制度效唐者為多、如租庸調是也、孟子曰、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其美皆什一也、夫制地之法、至周尽善、莫以尚焉、秦開阡陌、壞井田、暴斂橫征、而速亡、漢興、寬其政、薄其稅、三十而取一、然而兼井游惰之弊作焉、不如井地公田之均平也、今我先皇祖法、大抵二十而取一、寬則寬矣、而不效良法之周、效後世之唐者何、蓋周之井田、非始於周、始於舜禹、至周大備也、我大化之法、非如于大化、始于先皇、至大化以唐潤色之而已、夫井地固不可遽作、故彼邦一廢、不得復舉、況斯方環海之邦、山多而平地少、則井田決不可画也、然則王代之制、信為得焉、假令周公興於此、亦從之而已、

至武家当路、王代之制漸廢、武士自專、割拋橫行、不奉朝命、及乎豐太閤創立霸業、出令改以三百步為段、定免斗代六公四民之法、至於東都為政、亦依其制、兵農遂分、租法甚重、率十而取六、亘古今、徵異域、未有征地如此之重也、上下困窮、未有甚於是時也、有王者興、宜監於此、以定其制矣、

齋藤馨曰、中臣鎌足、輔天智而誅入鹿、定天下之大亂、立天下之大制、功高万世、固無異議、吾独疑其立孝德之際、形迹未免出於私也、史曰、皇極欲禪位於天智、而天智問之鎌足、鎌足對曰、殿下之兄、有古人大兄、而殿下超次承大統、恐失恭遜之義、不若讓皇叔輕皇子、以答民望、所謂皇叔、素與鎌足相親善者也、當此時、天智之功、足以繼天位、而皇極之禪、可謂副天下之望、即使其立、雖古人大兄之覬覦、安能沮之、不

此之立、而立与已親善之孝德、其心不可謂非私、其心私、則定天下之乱、立天下之制、皆為孝德、非為天下、而万世之功、不過成一人之私、於是乎、鎌足之功墜矣、故吾以為鎌足之迹出於私、而不避者、其心有所大公、而不立天智、乃所以為天智、亦所以為天下也、治天下者、患在無德為之本、而在法不為之制、苟無闕雖麟趾之德、則周官之法、孰能行之、世皆知鎌足之制冠服、定位階、革封建、收土豪、一新百度、有功於天下、而不知不知不立天智之功更大、何也、百度之一新、法也、末也、而天智之不立、德也、本也、蓋有功難、有功而不居、尤難天智誅入鹿、其功固大、然使其受皇極之禪而不辭、自恃其功、而無敢遜讓、則其德不足称、而百度之備、亦徒法而已、且恃功則怠、怠則荒、天智苟以是心而蒞天位、驕奢

淫佚、不期而至、吾未知今日之天智、為他日之何如天子也、向者天智之問也、其心豈不日今之天下我造之也、我受禪、亦何不可、而鎌足抑之、故天智自知其非、遂不立而立孝德、及孝德崩、又不自立、而再立皇極、至皇極崩無代立者、而後自立、若不得已然是以恭遜退謙之風、靡然被天下、而加以凡百制度、此其所以治浹而沢久也、然而鎌足不立天智、可矣、其立与已親善之孝德者、何也、曰初入鹿之擅政也、孝德疾之、称病不朝、与鎌足囚之、則鎌足之得近於天智者、或且出孝德之意矣、果然則謂天智之功、即孝德之功、亦可也、而鎌足以有可立之功故立之、非以与已親善也、皆所以為天下也、(符之)鎌足唯欲為天下、故其迹涉私而不避、其迹涉私而不避、愈可以見其心之大公矣、巖曰、大職冠之於天智帝、明良遭遇、千歲

一時、所謂相濟為美者、故天智帝之盛德大業、即所以為大職冠之盛德大業、嗚呼盛哉、

嗚呼大哉、

安積信曰、租庸調之法云々、

智尊境部秦秦友足犬養五十君谷塩手大野果安田辺小隅物部麻呂

帝大友元年、大海人皇子、称兵于芳野、既而皇師連敗、芳野将村国男依等、進薄瀨田、帝悉衆軍橋西、智尊将兵為先鋒、奮身大戰、遂敗死之、

境部秦クスリ・秦友足トモヅリ、壬申之乱、将兵与東将村国男依戰、兵敗死之、

犬養五十君イヌカヒノイフキミ・谷塩手ハザマシノホテ、壬申之乱、将兵与村国男依ナモリ、戰于粟津、兵敗死之、

壬申之乱、皇師既連敗、多降于東軍、於是將軍大野果安オホノノリ、擊東将大伴吹負于乃樂山、大敗

之、追至八口、疑有伏而退、天皇崩後、不知其所終、

(朱) 田辺小隅アベノフスミ、壬申之乱、将兵越鹿深山、卷幟息

(朱) 鼓至倉歷クラシ、定軍号以別敵兵、衆皆銜枚、夜半

斫營、事出不意、营将田中足麻呂、不知所為、

衆悉乱走、足麻呂独知軍号以故僅免、小隅又

進襲荊荻野营、為多品治所邀擊而敗走、不知

所終、

壬申之乱、皇師既敗績、芳野兵困宮、公卿群臣皆逃、独物部麻呂、及一二舍人從帝、帝走而無所入、乃還山前、自裁而崩、

〔後〕 武生曰、壬申之乱、与明靖難之事、何其相

類之甚也、夫大友皇子之有才学、猶建文之

崇儒敬師克繼祖業也、且其各為正統之主亡

論已、大海人与燕王、均以英武之資、乘亨

運之会、收集人心、克成大事、然叛逆之名、

則不可免也、而世人或以成敗論、乃追咎大

〔前〕

友建文、而歸美於天武与世宗、唯君子能建大義以裁之、不溢其美、不蔽其惡、以正勸懲之典焉、明史特書靖難兵起、不敢斥其反、我常史乃斷以反書於策、信足使亂臣賊子凜乎骨寒、可不謂直筆哉、

賴襄曰、天武之於天智、猶宋太宗之於太祖、而其於大友也、猶明成祖之於建文也、凡書記所錄、以子書父、必有隱而不証、以曲為直者、不可不信已、吾特怪、天智不早定儲貳、使太弟与太子分位疑似、所以速王申之禍耶、雖然、以天智之智、豈有不慮此、察之事情、有難言者矣、蓋天武之与天智、同為皇極之所出、烏知無有如杜太后之使兄弟相反者哉、在天智之時、有幸必從、有大号令必使頒、異日以皇子知太政、其久属中外之望者、可知也、唯然、是以難於立年少之大友、及大友年二十四矣、乃以為太政大臣、

蓋欲待其名望足敵太弟、然後立為太子、而不凶其俄不予也、則不能不召太弟属後事、而諸臣已知其旨、所以蘇我安私戒太弟、太弟有披荆之請、其無燭影斧声之禍者、幸也、大友已立為太子、数与大臣詛盟、而其防備太弟、周矣、然適足以迫其起、而決機赴會、每為所先制、真建文之類耳、太弟之南、已有放虎之目、迫亦起、不迫亦起、然因其迫、以激衆心、如不得已者、扼其吭、折其背、其敏兵機、不啻過燕棣、而及難定、独斬大臣数人、不問其余、則非永樂瓜蔓抄之比、宜乎能續天智之緒、不失天下之望也、至其修明前制、用心武備、令親王諸臣、官無文武、務習軍事、如逆睹後世文武分途、国勢偏枯之弊者、嗚呼、是天武所為武也欵、

藤原不比等宇合麻呂

藤原不比等、内大臣鎌足第二子也、授直広肆、持統朝為判事、進直広弼、賜資人五十人、文武帝詔曰、先朝所賜藤原朝臣之姓、宜令其子不比等承之、但意美麻呂等供神事、宜復旧姓、尋進直広弼、与撰律令、為中納言、大宝元年、授正三位、軫大納言、慶雲元年、進從二位、增封八百戶、四年、詔嘉其世有勤勞、追褒鎌足、比諸武内宿禰、乃賜封五千戶伝子孫、不比等固辭、受二千戶、以一千戶伝子孫、和銅元年、進正二位、拜右大臣、養老二年、任太政大臣、固辭不受、監修律令、四年、加授刀資人三十人、是年薨、年六十二、帝深悼惜焉、為之廢朝、举哀内寝、遣大納言長屋王・中納言大伴旅人、就第宣詔、贈太政大臣正一位、諡文忠、賜封戶資人、一如存日、先是、藤原氏未置氏長者、至不比等始命為之、天平中、献渤海貢物於六陵、并祭不比等墓、宝字初勅

天下、不得称鎌足・不比等名、四年、勅曰、子以祖尊、祖以子貴、此則不易之彝式、聖王之善行也、先朝太政大臣藤原朝臣者、非唯功高於天下、又為皇家之外戚、是以先朝贈正一位太政大臣、此雖拋我令已極官位、而准周礼、猶有不足、窃思勲績蓋於宇宙、朝賞未允人望、宜依齊太公故事、追封近江国十二郡為淡海公、繼室從一位巢狗養橘宿禰、贈正一位、為太夫人、不比等四子、武智麻呂・房前・宇合・麻呂、女宮子媛・光明子、武知麻呂正一位左大臣、武智麻呂策、在房前南隣、因称南家、房前称北家、四子、豐成・仲麻呂・巨勢麻呂・乙麻呂、房前東海・東山二道節度使、薨贈正一位左大臣、賜食封二千戶、限二十年、宝字中贈太政大臣、子、永手・真楯・清河・魚名・楓麻呂、最顯、而真楯自有伝、宮子媛文德帝夫人、光明子聖武帝皇后、

宇合、靈龜中為遣唐副使、叙從五位下、養老初、還自唐、任常陸守、為安房・上総・下総

按察使、累進正四位上、遷式部卿、神龜元年、

陸奥海道蝦夷叛、殺大掾佐伯兒屋麻呂、宇合

為持節大將軍、討平之、振旅入京師、帝遣內

舍人、迎犒近江、賞功叙從三位、授勳二等、

副將高橋安麻呂以下一千六百九十六人、賜勳

位有差、天平三年、始置參議六人、宇合為之

首、仍兼卿、為畿內副總官、尋改西海道節度

使、進正三位、兼太宰帥、九年薨、年四十四、

宇合器宇弘雅、風範凝深博涉墳典、旁達武事、

雖經營軍國、特留心文藻、為當時翰墨之宗、

以其為式部卿、世称式家、初宇合在太宰府、

善修軍政、号令嚴明、宝龜末、勅太宰府、遵

行其法、麻呂、歷左右京大夫、進叙從三位、

為兵部卿、拜參議、為山陰道鎮撫使、又為持

節大使至陸奥、与鎮守將軍大野東人謀、擊悉

降蝦夷、麻呂以其為左右京大夫故、称京家、
子浜成、

武生曰、易云、謙尊而光、其不然乎、大織

冠為佐命元勳、淡海公以賢哲承其後、父畜

子禽、為朝廷所委任、而恭勤抑損、辭五千

戶之封、不敢就大政官之位、可不謂至謙哉、

其所猷為、律令之外、雖無所伝、而温々德

容、有可想者也、詩云、南有樛木、葛藟纍

之、樂只君子、福履綏之、藤氏奕葉之盛、

蓋有所由云、

舍人親王

舍人親王、天武帝子也、持統帝九年、授淨広

式、文武朝為親王叙二品、慶雲元年、加封二

百戶、和銅七年、又加二百戶、養老二年、授

一品、三年十月、詔曰、開闢以來、法令尚矣、

君臣定位、運有所属、泊乎中古、雖有率由、

綱目未彰、逮近江世、弛張悉備、至藤原朝、頗有損益、由是稽遠祖之正典、考列代之皇綱、承纂洪緒、此皇太子之任也、然年齒猶稚、未閑政道、惟夫握鳳曆而登極、御龍圖以臨機者、資補佐之材、乃致太平、藉翼贊之功、能保運祚、況夫舍人新田部親王、百世松桂、本支協於昭穆、万雉城石、維磐重乎國家、宜吐納清直、能輔洪胤、扶植仁義、以翼幼齡、然則太平之治可期、隆泰之運必致、可慎哉、今二親王、宗室年長、在朕屬重、既有旧典、宜加寵賞、其賜一品舍人親王、內舍人二人、大舍人四人、衛士三十人、益封八百戶、通前二千戶、二品新田部親王、內舍人二人、大舍人四人、衛士二十人、益封五百戶、通前一千五百戶、舍人以供左右雜使、衛士以充行路防禦、於獻欽哉、以副朕意、先是、舍人奉勅修日本書紀、四年五月成、上紀三十卷、系圖一卷、八月知

大政官事、及聖武帝即位、益封五百戶、天平七年十一月薨、遣從三位鈴鹿王等、監護喪事、其儀準太政大臣、命王親男女悉会于葬、遣中納言多治比叟守等就第宣詔、贈大政大臣、廢帝即位、追尊曰崇道、敬皇帝、尊夫人当麻山背曰太夫人、所生男女悉為親王、

史論曰、史者所以著興廢垂勸戒也、国朝庶事草創、文教後興、上世之事、鬱而不暢、渙而不華、履仲四年、始置国史於諸国、記事言、達四方志、此国宰之史生、而亦史官所由起也、推古二十八年、皇太子厩戶与蘇我馬子、撰天皇紀・国紀、其子蝦夷之乱、罹兵燹而亡、天武九年、詔川島・忍壁二皇子撰帝紀及上古事、其書亦不佞矣、舍人親王奉元正之勅、著日本書紀、以浩博之才、騁雄贍之文、蓋掾二皇子之成書、參以稗田阿礼之言、上自神祇、下至持統、列聖往事、

粲然可觀、繼之者有後紀・實錄之撰、莫不依倣親王之書、遂使後之覽者得以考信而覈實、則親王之於文史、可謂其功冠於古今矣、居宗室之長、為維城之固、与新田部親王、垣鏡克諧、同寅協恭、輔佐皇太子、致雍熙之治、追尊之典、光于史冊、宜矣、

武生曰、大哉舍人親王之業也、夫我皇朝惟懋純德、不尚文辭、是以紀言書事、所伝多齊東野人之語已、況自神代及于茲、年紀悠久、文武事繁、舍人氏乃網羅遺言、張皇湮晦、可謂難哉、今視其所載、上古之事、未為必無捩言也、然徵斯書、神聖垂統之跡、其由何有所考、故予嘗推親王之功、以為与日月争光、非諛言也、

又曰、元明・元正二女主而已、其所詔令、何其多美談也、勸農憂民、戒國司之為私、遭災自咎、屢發給復之政、加之、求直言、

拳良吏、修律令、撰國史、兢兢業々、惟日不足、未嘗有般樂怠敖之思、民人庶而壞地闢、殆致刑措之治、是蓋由淡海、舍人二賢相、繼居樞要、故其所施為、有合於古先哲王之軌矣、而能用二賢者、二女主也、書云、任賢勿忒、又云、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉、二女主有之、

巨勢麻呂

巨勢麻呂、慶雲中為民部卿、叙從四位下、和銅中為左大弁、在官公平、授正四位下、於是陸奥・越後・蝦夷等、侵擾良民、乃徵發遠江・駿河等七國兵、以麻呂為陸奥鎮東將軍、賜節刀、与民部太輔佐伯石湯・内藏頭紀諸人、出自兩道討平之、進正四位上、六年、進從三位、靈龜元年、拜中納言、奏、建出羽國、已經數年、土地膏腴、田野広衍、然吏民稀少、

狄徒未訓、請徙近國民以夷之、綏撫狄徒、兼保地利、徙之、養老元年薨、

道首名 佐伯国益、神人為奈麻呂、佐々貴山由氣比丹波広麻呂、海部常山、物部志太大成、新

治大直、葛江馬養、孔王部山麻呂、多治比池守、多治比水守、石川年足、紀末成、紀田上、紀深江、甘南備高直、藤原岳守、長岑高名、南淵永河、清原有雄、山田古嗣、丹卒門成、伴成益、春枝王、紀安雄、忠貞王、平季長、源為憲

〔十二〕

道首名、位追大耋、文武朝与撰律令、大宝初、

奉勅說僧尼令於大安寺、和銅中進叙從五位下、為遣新羅大使、歸為筑後守、養老二年、進止五位下、卒年五十六、首名少治律令、曉習吏職、其為筑後守、撰肥後事、勸勵生業、教督耕種、至植菜菓、養鷄豚、曲尽事宜、時躬按行、有不遵教者、輒譴責之、老少窃怨罵之、及取入、莫不悅服、又興築陂池、以広灌漑、肥後味生池、及筑後所在陂池、皆是也、人蒙其利、至今給足、故言吏事者、咸以為称首、

及卒、百姓祠之、貞觀中詔賜從四位下、孫広持、承和中為遣唐史生、追褒首名政績、改賜広持姓当道朝臣、山県禎曰、昔鄭子產、從政一年、與人誦之曰、取我衣冠而褚之、取我田疇而伍之、孰殺子產、吾其与之、及三年、又誦之曰、我有子弟、子產誨之、我有田疇、子產殖之、子產而死、誰其嗣之、今首名治民、勸之生業、曲尽事宜、民初歎其勞而怨之、後享其利而悅之、是与子產之從政、皆是尽誠以治民、不違道以求譽者也、大抵世之為吏者、因循姑息以悅民、以求一旦之譽、是以其実功不至於民者多也、如首名誠可以為吏者之模範矣、宝龜中、有正五位下佐伯国益者、使于東山道、覆檢損田、有廉勤之名、為河内守、及卒、追褒贈位一階、賜其家稻千束、延曆中、神人為奈麻呂、為撰津能勢郡領、同時近江蒲生郡大領、佐佐貴山由氣比、丹波天田郡大領、

丹波広麻呂、豊後海部郡大領、海部常山、皆居職匪懈、撫民有方、詔並授外從五位下、物部志太大成、為常陸信太郡大領、出家資周百姓急、褒授外從五位上、新治郡大領、新治大直、進外從五位下、播磨明石郡大領、葛江馬養、下総媛島郡主張、孔王部山麻呂、並外正六位上、或居官不怠、頗著効績、或分施私蓄、賑恤貧乏、事聞褒之、

⑧多治比水守、左大臣島子也、大宝中為尾張守、時持統上皇將幸參河、至尾張、賜水守封一十戶、遷河內守、和銅初為近江守、至從四位下、所在有政績、賜田一十町、穀二百斛、衣一襲、入為右京大夫、除宮內卿、四年卒、子土作、至參議從四位上、

⑨多治比池守、左大臣島長子也、持統朝授直広肆、大宝中改授從四位下、和銅・靈龜間為民部卿、尋為造平城京司長官、累進從三位、為

太宰帥、上言薩摩・大隅二國貢隼人、八歲而代、道路遙隔、去來不便、或父母老疾、或妻子單貧、請限六年相替、又帥以下事力、依和銅二年六月十七日符、減半給綿、自此以來、驅使之丁、凡諸屬官、皆為辛苦、請停綿給丁、欲得存濟、許之、養老元年、褒善政、賜綾絹絁綿布若干、明年任中納言、尋轉大納言、進正三位、神龜初、增封五十戶、賜靈壽杖絁綿、進從二位、天平二年薨、遣使弔賻、子家主、養老中為出羽国司、天平中為鑄錢長官、勝宝中帝御東院召見、授從四位下、宝字四年卒、子長野、延曆中至參議從三位、

石川年足、大紫蘇我連子曾孫也、祖安麻呂、少納言小華下、父石足、有文藻、和銅中歷河內守左大弁・太宰大式、天平元年、權為參議、至從三位、年足性廉勤、好讀書、最習於治体、起家補少判事、頻歷外任、天平中叙從五位下、

為出雲守、在官數年、百姓安之、帝嘉之、賜
純布及正稅三万束、俄為東海道巡察使、遷陸
奥守、進正五位上、除春官員外亮、兼左中弁、
進從四位下、為春宮大夫、勝宝元年進從四位
上、以式部卿兼紫微大弼、拜參議、五年叙從
三位、為太宰帥、宝字元年、改神祇伯、兼兵
部卿、任中納言、進正三位、賜勳十二等、奉
勅与惠美仲麻呂等、改易官号、勅各上意見、
年足上封事曰、臣聞、治官之本、固據律令、
為政之要、應須格式、方今科条之禁、雖著簡
牘、別式之法、未有制作、伏乞作別式、与律
令並行、遂作別式二十卷、其条目各繫本司、
雖書未施行、而時頗雜用其法、尋為御史大夫、
以遷都賜稻四万束、六年薨、年七十五、遣撰
津大夫佐伯今毛人、信部太輔大伴家持弔賻、
子名足・豐成、名足從三位、豐成正三位、並
至中納言、

〔十四〕^ロ 紀田上、角宿禰十一世孫、大納言船守子也、

田上通暎武芸、兼有文才、最長於政事、大同
初為相模守、百姓懷之、三年、秩滿入京師、
天長初卒、子深江、

〔十五〕^ハ 紀深江、少遊大學、略涉史書、自文章生為少

允、歷主稅助・式部少丞、弘仁末叙從五位下、
天長・承和間、累遷左近衛少將、兼備中守、
為兵部大輔、出為伊予守、性寬和、不為物動、
所位有治績、百姓安之、時稱為脩吏、卒于官、
年五十一、

〔十三〕^イ 紀末成、大納言古佐美子也、幼而聰悟、博學

文籍、延曆中調式部丞、時議許其廉拳、出為
伊予介、大同・弘仁間、歷常陸・出雲・大
和・越前守、所在以幹濟聞、至正四位下、天
長二年卒、年四十五、贈正四位上、

〔後〕藤原岳守、從四位下三成長子也、少遊大學、
涉史伝、工草隸、資性寬和、士無賢不肖、傾

心引接、天長中侍仁明帝於青宮、応対左右、

拳止閑雅、甚所器重、為內舍人、尋丁父憂、

哀毀過礼、仁明帝即位、除右近衛將監、俄遷

内藏助、承和中進叙從五位下、兼讀岐介、歷

左馬頭・左少弁、以聾耳不便聽受、固辭之、

出為太宰少弐、適得元白詩筆上之、帝甚耽悅、

進位一階、數年入為左近衛少將、累進從四位

下、再為左馬頭、擢右近衛中將、兼美作守、

嘉祥初遷近江守、有殊政、百姓悅服、既而罷

婦、無復榮進之心、論者高之、仁寿元年卒、

子滋柯、近江掾、

「前十六」

甘南備高直、敏達帝之後、武藏介清野子也、

身長六尺二寸、少為文章生、善屬文、工琴書

大同・弘仁間、歷太宰少監・西海道觀察使判

官、左近衛將監、叙從五位下、累歷陸奥・上

野介、天長中遷常陸守、有惠政、会採訪使緣

前司所犯、并座高直、停釐務、吏民感其德化、

競遺資用、高直素被嵯峨上皇眷顧、未幾任撰

津守、承和初累進從四位下、丁母憂、哀毀過

礼、殆至滅性、三年卒、年六十二、

長岑高名、右京人、幼而入學、年二十一、補

文章生、在官數十年歷式部・民部二省少録・

少内記、以貧請外、天長元年、除安房掾、數

年入歷左右少史、転左大史、承和初為遣唐使

判官、自正六位上、進外從五位下、兼大膳亮

美作權介、從大使藤原常嗣赴唐、在道進一階、

常嗣以船中雜事、一委高名、時副使宦小野篁

至太宰府、称病不行、以故高名至唐、得從大

使而上殿、帰進一階、除伊勢介、進正五位下、

特旨召為嵯峨院別当、歷山城・阿波守、遷伊

勢守、兼齊宮權頭、除播磨守、齊衡中累進正

四位下、任右京權大夫、高名清直奉公、前後

守七国、政尚蔽明、百姓不饑、常戒子孫曰、

吾素清貧、家無斗儲、瞑目之日、必從薄葬、

天安元年卒于官、年六十四、

〔十九〕南淵永河、右兵衛佐槻本老之孫也、父奈氏麻

呂、散位從四位下、永河嵯峨帝龍潛之時、与

朝野鹿取等侍読書、大同初為少外記、及帝踐

祚、遷民部少丞、授從五位下、任但馬介、歷

民部・治部少輔、累遷右近衛少將、尋歷左右

中弁、遷治部大輔、叙從四位下、任内藏頭、

特勅為冷泉院別當、兼越前守、承和中為大宰

大貳、政以仁愛為本、民庶仰慕、入拜刑部卿、

歷播磨・近江守、至正四位下、尋致仕、仁寿

初朝廷以其宿老、優授下野守、不赴任、頃之

軫因幡權守、天安元年卒、年八十一、子年名、

天長末補文章生、為少内記、逮任仁明・文

德・清和・陽成四朝、歷職内外、至大納言正

三位、薨年七十、小野有山莊、嘗聚耆老為尚

齒會、皇朝尚齒會、是為始、

〔二十〕清原有雄、出自舍人親王、父貞代王、從五位

下大監物、有雄有風操、通政事、式部卿葛原

親王薦為正親祐、承和中進叙從五位上、為越

前守、歷玄蕃頭中務大輔、遷撰津守、境内安

靜、黎庶悅服、倉粟充美、政化大洽、嘉祥二

年、以治績最著、授從四位下、明年遷肥後守、

天安元年、進從四位上、卒于官、百姓追慕焉、

山田古嗣、左京人、父益人、外從五位下、越

前介、古嗣天性篤孝、廉謹寡言、幼喪母、敬

事從母、嘗読書傳、至樹欲靜而風不止、子欲

養而親不在、流涕不禁、卷帙為之沾濡、後丁

父憂、哀毀過礼、天長三年、為陸奥按察使記

事、入歷少内記・少外記、軫大外記、公卿有

異議、每諮詢焉、古嗣推薦文士、多見举用、

承和中累進從五位下、為阿波介、政有声績、

初阿波・美馬兩郡、每罹早災、古嗣到任、築陂

蓄水、以備溉灌、民賴其利、仁寿中入為左京

亮、進從五位上、任相模權介、卒于官、年五

十六、

「二十一」丹墀門成、父曰豊長、為内藏助、門成弘仁初

歷少判事・大和大掾、天長三年授從五位下、

為丹波介、土民蠱戾、旧号難治、門成性剛直、

莅以猛政、庁事之前、笞杖疊積、数年部内大

治、承和中為彈正少弼、遷刑部大輔、任武藏

權守、逾年為真、所部曠遠、盜賊充斥、門成

臨職、不久風俗肅清、奸猾斂迹、遷大和守、

搏擊豪右、無所回避、境内夷晏、百姓戴之、

仁壽三年、叙正五位下、卒于官、門成雖無学

術、長于吏事、所至必樹風声、時人称焉、

伊成益、左京人也、少入大学、及長能文章、

登進士科、為左京少進、天長・承和中、歷式

部少丞・大藏少輔・右少弁・左中弁、叙從四

位下、成益為人質直、奉法不阿權貴、議僧善

愷之訴、不合旨、奪官爵、嘉祥中授正五位上、

文德帝即位、進從四位下、出為丹波權守、境

内清肅、以廉潔称、仁壽二年卒、年六十四、

春枝王、左京人、三品忍壁親王之後也、父嗣

王、從五位下、春枝少仕嵯峨帝、為人謙遜、

有異才、敦崇仏道、承和初為越後介、政績頗

著、十年以新遭大喪、妙簡司牧、春枝中選、

叙從五位下、任能登守、田野荒廢、百姓疲弊、

春枝悉心經理、莅職数年、民庶蘇息、部内大

安、仁壽中歷中務少輔・正親正、齊衡中進從

五位上、為下總守、以疾不之任、隱居養痾、

詔給節位祿等、一准見任、三年卒、年五十

九、子岑王、承和中賜姓清瀧真人、

「二十二」紀安雄、大学助教種繼子也、安雄幼以学行見

称、性寬綽柔順、始補得業生、天安中為大学

直講、貞觀中累進從五位下、転助教、安雄專

精経業、頗閑文辭、時撰修格式、勅扨有識者

安雄与焉、為勘解由次官、兼下野介、進從五

位上、遷主計頭、元慶初出為武藏守、政貴簡

夷、吏民安之、秩滿歸京、除鑄錢長官、兼周

防守、声績滅於武藏、仁和二年卒、年六十五、

二十三

忠貞王、賀陽親王次子也、賀陽親王即桓武帝

子也、忠貞王天安二年授從四位下、貞觀中為

大學頭、遷中務大輔、歷彈正大弼・撰津・河

內・大和・播磨等守、元慶三年拜參議、檢校

大和班田、累兼宮內・刑部卿、美濃・近江守

卒于官、忠貞容貌甚醜、而志尚高遠、幼而就

學、粗通五經、出歷任諸州、威惠兼舉、民不

敢欺、庠序之風、所在日興、能吏之化、与橘

良基見並称、声誉之美、為宗室之最、

平季長、大納言高棟子也、貞觀中以式部丞掌

渤海客使、元慶中為兵部少輔、兼伊勢權介、

遷左近衛權少將、兼陸奥守、賜近衛四人為隨

身、仁和二年為右中弁、尋転左中弁、為問山

城民苦使、奏曰、得諸郡司解狀爾、諸院諸宮

及諸王臣家、或爭百姓戶田、或奪浮浪財物、

不據国宰、無牒郡司、闖入部內、逼相庄略、

專擅威權、不弁理非、田園因斯荒廢、財產為

之空竭、望請裁許被停止者、伏檢案內、訴訟

皆從下始、若有越訴、法設科条、今愚昧百姓

不悟此理、告人囑請、甲官而乘威、前人媚託、

乙家以挾勢、国郡官司、無力禁止、望請、自

今以後、相爭財物田宅之輩、假勢王臣、不由

国郡者、不限土浪、不論蔭贖、決杖一百、所

爭之物、皆悉沒官、諸院諸宮王臣家許容者別

当并家司、科違勅罪、如此則窮民再蘇、勢家

弭害、勅依其請、進至從四位下右大弁、寬平

九年卒、

源為憲、光孝天皇玄孫、筑前守忠幹子也、受

學於源順・橘正通、举文章生、歷任藏人・伊

賀守・式部丞、正曆中為遠江守、州禰民戶凋

弊、為憲至任、撫愛有方、漸致豐贍、田疇墾

闢、倍徙旧籍、頗称能治、長徳元年任滿而帰、

以功叙從五位上、而在散位二十年、長和三年
会美濃・加賀二国守闕、為憲上書請任之、遂
歷二国守、每赴詩筵、必携一囊、名曰詩囊、
或感懷焉則入頭囊中、吟賞不已、殆至涕泣、
時人莫測其意、所著有本朝詞林、

藤原高房山田春城

「十七」藤原高房、參議藤嗣子也、身長六尺、膂力過
人、有意氣、不拘細謹、仕嵯峨・淳和二朝、
為右京少進・式部大丞、天長四年授從五位下、
任美濃介、威惠兼施、囑託不行、發姦摘伏、
盜賊屏息、安八郡有陂渠、擬防決壞、土人相
伝、防渠有神、不欲遏水、逆之者死、故前守
懼不修、高房發民修之曰、苟利於民、死不恨
矣、由是漑灌通利、後世賴之、席田郡有巫、
為妖術以蠱惑人、党与蔓衍、民被害矣、而長
吏恐怖、不敢入其界、高房便單騎馳入其邑、

捕巫誅之、妖害遂絕、歷備後・肥後・越前守
所在著稱焉、仁寿二年卒、年五十八、子山陰
史論曰、藤原高房、禁巫覡、絕妖妄、蓋有
西門約^(狗)之風焉、

「十八」山田春城、字連城、右京人、曾祖白金、為明
法博士、該通律令、言法律者、咸資准據、春
城年十五入學、嵯峨上皇使皇子源明就學、挾
大学生之僑者、与之遊処、春城応選、与明説
諸子百家、遥授丹波權博士、以為勉學之資、
太上皇崩、仁明天皇繼使卒業、侍校書殿、披
閱秘書、内藏寮賜食、遥授備後權少目、遷備
中權少目、承和十二年、对策下科、明年為少
外記、仁寿元年、授外從五位下、頃之、遥授
駿河介、三年請之任、為政驗察、吏民畏憚之、
境内駿河郡有神、号阿氣大神、新遷自伊豆、
国司白官、建祠奉祀、祢宜祝等、付会以奇異
誑惑百姓、春城考訊、窮其姦狀、歲時致享而

已、夷民終服、其秋以事入京、諸儒改判春城策、僉曰、尺木寸玉、非無瑕節、況於大方、

陛置之第、叙從五位下、歷勘解由次官・玄蕃頭、天安二年遷左京亮、兼大學助、尋卒、年四十九、春城性寬裕、而議論切直、無所阿避、不事細芸、不懼答崇、卓有儒者氣象、

巖曰、議論切直、無所阿避、不事細芸、不懼答崇、亦可以為日本魂也已、

倭果安

丈部和廣 君子丈麻呂 丈部路祖父麻呂 丈部安頭麻呂

奈良許知麻呂 丈部乙麻呂 小谷五百依 建部大垣 矢田部黑麻呂 藤原世嗣 家

早富麻呂 基貞親王 小野篁 財部繼麻呂 伴家主 丸部明麻呂 丹生弘吉 重明親王 下毛野公

助 藤原宗通 僧某 藤原実行

〔二十四〕倭果安、奈良許知麻呂、並大和添下郡人、果

安孝于父母、友于兄弟、凡人有飢病、自齎私糧、巡視看養、登美・箭田二鄉百姓、感其恩義、敬愛如親、許知麻呂稟性孝順、與人無怨、

嘗遭後母之讒、不得入父家、絕無怨色、奉養弥篤、和銅七年、旌二人孝義、終身勿事、

〔二十五〕

丈部知積・君子尺麻呂、並相模足柄上郡人也、孝行彰聞、靈龜元年表其閭里、終身勿事、

丈部祖父麻呂、漆部司令史從八位上石勝之子也、養老四年石勝座盜司漆、当流、時祖父麻呂年十二、弟安頭麻呂九歲、乙麻呂七歲、同詣闕請曰、父石勝家貧為養兒輩故盜司漆、因得罪今將投遠方、冒死伏請、我等三人沒為官奴、贖父之罪、詔曰、人稟五常、仁義斯重、

士有百行、孝敬為先、今祖父麻呂等、沒身為奴、贖父之罪、欲存骨肉、理当矜愍、宜依所請為官奴、乃免石勝罪、無幾免祖父麻呂・安頭麻呂等徒良焉、

藤井臧曰、幼而智過人者、晋王戎、漢黃琬、唐孔穎達・王勃之類、自古為不勲也、然至孝動人、如後漢長孫慮輩、則固不易得矣、能使

其父免嚴刑、兄弟不軫溝壑、我丈部氏之子、其庶幾乎、三兒皆同、可以觀氣類矣、

山県禎曰、赦有罪者非善政、古人譏之矣、然如積父之罪、以褒賞其子之孝節、亦足以風勸一世民俗、則察其実情、而時為之可矣、丈部氏之三兒幼弱、欲没身以贖父罪、其至性最可愍也、況其罪非大辟極刑乎、

綱引金村、備後葦田郡人、年八歲喪父、哀毀骨立、尋丁母艱、追慕益深、景雲二年詔賜爵二級、復其田租終身、

小谷五百依、甲斐八代郡人、建部大垣、信濃更級郡人、五百依以孝見稱、大垣為人恭順、事親而孝、景雲二年並免其田租終身、

矢田部黑麻呂、武藏入間郡人、事父母至孝、生尽色養、死極哀毀、齋食十六年、終始不闕、宝龜三年免其戶徭、以旌孝行、

藤原世嗣、延曆中為大學頭、天長中至從四位

武生曰、地理志略曰、地
野足利郷下
安置先聖像
藏五經正義
疏等論孟注
孝經論孟注
皇朝儒臣蓋
傑然者、淵
源之學、不
履之流、文
雅

上、為人謙遜、不恥下問、恭謹接人、後守伊勢、會兄訃至、百里走赴、尋卒、

風早富麻呂、安芸加茂郡人、德行懿美、竭力孝養、父母没後、不食滋味、哀慕不已、天長十年勅叙三階、免戶田租、

基貞親王、淳和帝弟四子、而皇后之出也、神姿清秀、孝誠懇至、天長七年賜近江稻二千束、越前稻一千二百束、承和初賜越前坂井郡荒田二十町、十一年授三品、特勅預内宴、十三年

為上総大守、貞觀十一年九月薨、
小野篁、參議岑守長子也、弘仁中岑守為陸奥守、篁隨父赴任、日慣馳馬、頗善其術、後還

京師、不復事學業、嵯峨帝聞而歎曰、斯人之子、而為弓馬之士、豈不惜乎、篁由是慚悔、

始志于學、十三年奉文章生試及第、天長中歷巡察・彈正少忠・大内記・式部少丞、進從五位下、除太宰少弐、尋丁父憂、哀毀過礼、明

之可稱也、
足利學校、
經戰國以至
于今、不為
廢惡、其為
遺蹟、可謂
遠哉、

年起為東宮學士、拜彈正少弼、与清原夏野等、
奉勅撰令義解、承和初除美作介、為遣唐副使、
兼備前權守、任刑部大輔、累進正五位下、及
使唐借正四位上、三年引見紫宸殿、賜綵帛・
貲布、又御紫宸殿、賜餞御被一襲・赤絹被砂
金、篁請授小野神從五位下、既免、遭風破船、
不得進而還、四年再赴唐、初定使船次第、大
使藤原常嗣所乘居第一、号太平龍、最為堅硬、
第二船篁所乘次之、第一船毀壞、常嗣欲奪篁
船、奏請換次第、許之、篁忿恚曰、朝議不定、
二三其言、受命之日、分配已定、今翻以朽損
与我、論之人情、是為逆施、有何面目以率下
乎、篁家貧親老、身亦尪病、当汲水採薪致匹
夫之孝耳、遂称病篤、不復上船、作西道謠、
刺遣唐之事多犯忌諱、嵯峨上皇見而大怒、令
論其罪、帝下勅曰、小野篁身奉綸旨、出使外
境、而称病不行、准拋律条、可処絞刑、今特

有死罪一等、処之遠流、因免為庶人、竄于隱
岐、在路作謫行吟七十韻、當時稱誦之、數年
召還、帝愛其文才、歲余詔復本位、尋為刑部
大輔、除陸奥守、入為東宮學士、兼式部少輔
進從四位下、為藏人頭・左中弁、十四年任參
議、兼彈正大弼、嘉祥初轉左大弁、兼信濃守
為斑山城田使長官、兼勘解由長官、歲余進從
四位上、以病歸家、文德帝即位、加正四位下、
授近江守、明年病瘳、復為左大弁、未幾病動
不朝、帝甚愍之、屢遣使視之、賜錢穀、就家
授從三位、及困篤、命諸子曰、氣絕則殮、莫
令人知、薨時年五十一、世称野相公篁事母至
孝、家素清貧、俸入皆施親友、文章冠絕當時
最妙草隸、後世模楷焉、初在太宰府、与唐人
沈道固教相唱和、道固常称其富艷、弘仁中帝
幸河陽館、賦詩一聯云、閉閣唯聞朝暮鼓、登
樓遙望往来船、以示篁、篁曰、聖作甚佳、但

〔朱〕此處へ前
シテ武生曰ノ
評ラ入ルヘ

改遙作空最妙、帝愕曰、是白樂天之句、遙

本作空、朕聊試卿、適見卿与樂天詩情同也、

時白氏集始至、獨藏秘閣、世未有睹者、以故

大為天皇所稱、其精詩如此、平生所作、往々

有与樂天句格相似者、世以此重之、然為人

羈好直言、不為當世所容、忌其才者、呼為野

狂、以羈狂官音相通也、故算有暗作野人天与

性、自古狂官世呼名之句、子保衡・葛絃・俊

生、保衡正五位下、陸奥・阿波守、葛絃正四

位下、太宰大貳、練達政事、世稱循吏、俊生

從五位上、刑部大輔、葛絃子好古・道風、好

古自有伝、道風善書、逾勁神逸、冠絶今古、

歷事醍醐・朱雀・村上三朝、至正四位下内蔵

権頭、康保三年卒、年七十一、後世称道風及

藤原佐理・藤原行成曰三蹟、

財部繼麻呂、加賀能美郡人、有至性、父母既

没、朝夕哀慕感愴鄉里、承和四年勅叙三階、

表門閭、免租終身、

伴家主、安房安房郡人、性至孝、父母没後、

口絶滋味、設像供養、事之如生、事聞、承和

中勅叙三階、終身免戸田租、旌表門閭、

丸部明麻呂、讚岐三野郡人、外從八位上、己

西成子也、年十八、入仕京師、積勞任本郡大

領、請讓其父、自守子職、孝養備尽、父母既

老、其家与明麻呂相距十里、明麻呂定省不懈

朝夕往還、国司上言、請准式蒙貢奉、嘉承元

年勅叙三階、免戸田租終身、

丹生弘吉、若狹遠敷郡人、幼喪父、独与母居、

力田奉養、愉色婉容、温清仏懈、每朝詣父墓、

擗踊哀痛、其所種雖遭水旱風蝗、未嘗被害、

郷里以為孝感之所致、事聞、貞觀中勅叙位二

階、

〔二十六〕重明親王、醍醐帝第四子也、延喜八年為親王、

尋叙四品、為彈正尹、兼大宰帥、進三品、歷

中務・式部卿、天曆八年九月薨、年四十九、

重明好學有才名、性至孝、及帝崩、哀慕不止、時臣子喪例、皆執期除服、唯親王獨公朝之外、衣食服器、不敢用綾羅朱漆、心喪三年、天曆中帝內宴賞菊、屬杯於重明、天子親賜杯酒於親王、始于此、所著吏部王記、子邦正・行正・信正・共賜姓源朝臣、

〔二十七〕下毛野公助、仕撰政兼家為隨身、嘗從父武則賭射左近馬場、不勝、武則怒撻之、公助伏而受之、人曰何不逃、公助曰、父老足弱、追我疾走、恐致顛躓、若有損傷、是重吾罪也、是以受而不逃、聞者感歎焉、

〔二十八〕藤原宗通、右大臣俊家子也、容貌魁偉、最達時務、治家有法、上下輯睦、人無間言、一時稱之、得白河上皇眷遇、屢預大議、至正二位權大納言、世稱阿古丸大納言、

〔二十九〕僧某、不詳名字、事母至孝、而家甚貧窶、其

母嗜生魚、無則不能下箸、僧常買而羞焉、時白河上皇嚴禁屠殺、不能得魚、母頗絕食、疲憊幾死、僧不堪悲惋、自往桂河、捕二小魚、巡吏執之、并魚送於官、法司鞫問、僧収淚曰、法之所禁、誰不遵守、況身在穢門破戒律、罪不可逃、但我母老且病、非肉不食、今雖放此魚、不可復生、幸饋母所、聞一下箸、則雖就嚴刑、亦非所憾矣、辭氣懇切、吏卒感泣、上皇聞之、賜金帛放還、

藤原実行、權大納言公実第二子也、永久三年為參議、累進從三位、歷兼左右衛門督・檢非違使別當、天承元年為權大納言、進正二位、久安六年拜太政大臣、特許節會不就班直上殿、保元元年致仕、応保二年薨、年八十三、号八条太政大臣、又称三条、实行有才学、肄習威儀、性至孝、親有疾、衣不解帶、晨昏侍養、遭父喪、藤原基俊來弔、繫和歌於梅樹曰、牟

加志美志、阿流自我保珥氏、牟迷我延能、波

奈陀珥和礼珥、毛能我多利世余、实行感傷、

答歌曰、祢珥加倍流、波奈能須我多能、由加

志玖波、多陀古能毛斗鳥、加多美斗波美余、

子公教・公行・公宗、公教自有伝、公行従三

位参議、久安四年薨、公宗正五位下、民部太

輔、

或曰、村童野人、与親王公卿学士大夫同伝、

不亦不倫乎、巖曰然、子唯觀其外也、

巖又曰、西土俗間、称二十四孝、喧伝到於

皇朝、兒童走卒、亦皆嗟賞、嘖々不已、而

若王祥之不忠、郭巨・孟宗之怪誕、間有不

雅訓者焉、屬者、選純孝者、適得二十四名、

可謂奇中矣、

一八一 久光公召命ノ請書

今般不図モ再

勅使御下向

宸翰拝戴被仰付不肖愚昧之小官、別而恐縮至極奉存候、

就而病体勉疆仕申、来春中

闕下ニ拝趨仕、奉謝深重之

天恩度奉存候、此段御請申上候間、宜御執奏被成下度奉

伏願候、敬白、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第六卷第九五四ノ五

号文書ト大略同文ナリ)

文書原寸 縦一六・八釐 横一五釐

〇六三 久光公へノ建言

郡県封建優劣論其他

氏名不明

冊子原寸 縦一九・八釐 横一四釐 三八枚

一八三 藩内諸家積金利殖方法其他ノ建言 氏名不明

拾貳万四千貫文

二通

三ヶ年目貳拾四ヶ月

一八八三ノ一

拾五万三千七百六拾貫文

一錢三千貫文ツ、

四ヶ年目三拾七ヶ月閏月込ル

本重富御領主一列九家

拾九万三千七百三拾七貫六百元

(島津忠公) (島津珍珍) (島津久治) (英之進カ、島津忠敏)
樂水様・備後様・図書様・栄之進様・二之丸公子方

五ヶ年目四拾九ヶ月

御兩人

貳拾四万貳百三拾四貫六百元

一同貳千貫文ツ、

六ヶ年目六拾壹ヶ月

本私領持并持留之領主拾五家

貳拾九万七千八百九拾貫九百三拾四文

(島津齊興カ) (島津珍珍カ)
勝姫様・典姫様方・御本丸御姫様・二之丸御姫様方

七ヶ年目七拾四ヶ月閏月込ル

一同千五百貫文ツ、

三拾六万九千三百八拾四貫七百五拾八文

先祖勲功家筋 新納・山田・島山・桂等一列拾壹家

八ヶ年目八拾六ヶ月

メ凡四拾六家部位

四拾五万八千三拾七貫百四文

合拾万千五百貫文

九ヶ年目九拾八ヶ月

一初年貳割利付貸付置

五拾六万七千九百六拾貫九文

拾万貫文本錢

拾ヶ年目百拾壹ヶ月閏月込

貳ヶ年目拾貳ヶ月

七拾三万五千六百三拾七貫百七拾壹文

拾壹ヶ年目百拾三ヶ月

九拾壹万貳千九拾貳百文

拾貳ヶ年目百三拾五ヶ月

百拾三万千百拾五貫七百貳拾四文

拾三ヶ年目百四拾八ヶ月閏月込

百四拾貳万五千貳百五貫八百拾六文

拾四ヶ年目百六拾ヶ月

百七拾六万七千貳百五拾五貫貳百拾六文

拾五ヶ年目百七拾貳ヶ月

貳百拾九万千三百九拾六貫四百六拾八文

拾万貫文ツ、拾五ヶ年之間

毎年四拾六家部出銀之賦元利

合千六拾六万七千八百拾壹貫五百三拾六文位

正金ニして三拾五万六両余ニ相及可申候、

文書原寸 縦一六・八糎 横一八三糎

一八八三ノ二

「(表紙) 上」

万国軍兵を選挙する之法、大約農民百人より二拾歳以上四拾歳位迄之内耆人を採而常備兵とす、争戦之砌は七拾人より耆人を採る、其干戈尤急成時は五拾人より貳拾五人迄之内より耆人採る、常は農ニ歸し、争乱之起る時召集、隊伍ニ編ス、是を急備兵といふ、然而詛は其費之夥多なるを省くか為なり、各国之兵備凡如此由ニ御座候、

皇国ニ於ては、就中御一新後、兵士之数を定め、規則御確定被為在度、尤御当国之儀は、諸外城等迄過分之土族被召置、大小ニ応シ候而は、万国ニ比較之所無之、都而月々日々困究^(窮)を待之外有御座間敷、一昨年之戦争以来、追々御一新ニ乗し、壮士輩一時之愉快を宗として、末長く最通候儀、全不心付、人望之關係するを計而已ニ而、行先如何罷成者ニ可有之哉、恐入次第奉存

候、

一土地返獻、国主・城主等之名号被相止、万国折衷、復古新法混雜、郡県真似之藩知事・土族等、上古更ニ承不及、名目等專君威を輕く曳落迄ニ而、譬へは大木之根を丸め、技葉を切斷して、庭前之植木ニ仕立、翫物同様衆人之目を驚かせ、楽ニ考、心之佞拵直す塩梅ニ而甚以恐入候、殊更普代之手人を年季抱・日雇取同様ニ致候而は、乍恐

主上は勿論、君公ニ而茂孤立ニ被為成、自然曲直を以て下を御料、人氣御取鎮め之道出来兼、日々万国公法と欵、公平論と欵、無故議論相立、

皇国之御威光、万国江光輝之度無覺束奉存候、(島津得仏)

公御以来数十代、封国不被為失、御連統被為遊候御家筋、乍恐 御代々様ニ茂賢明之君上而已御家督被為遊候訳ニ茂無之、以来迎茂同様之御訳ニ候半、甚以乍恐縮御思慮ニ被為涉、永代 御子孫様ニ至り、御同様弥増勤王被為尽候様御確定之本を被為立度御時節欵と奉

存候、今度之御一新は名ト実ト相違之政体と申者のミ御座候、諺ニ、箸を束ニして難折、或は変化無究之妖物、身体大小如意自在を好、梅干ニ変化して一口ニ被呑込、腹中ニ被納しと申噂茂有之、新規を好ミ氣佞ニ変化致し候而は、一口ニ被吞候懸念無之共被中間數候、就中洋外米国之政治等、日増伝染時運ニは可有之候得共、皇国之体は全く無之様可罷成奉存候、

一軍局之形勢は、内外物ニ対して盛大を愉快として、御一新之機会ニ乘し、衆人之力を以古来より之難事を心安弁解し、所置之相付候次第は誠ニ感心ニ而、美事ニ茂可有之候得共、鎌倉之時、奥州之所置如旧制、秀吉・家康茂同様、命令を下して天下方向を定し由、方今は旧格を崩し、人心之疑惑を起す弊無之とも難申、今日ニ至而は、人情事変を御汲取御所置無之候而は、乍恐足利・北条之如く慾情深もの、反而策略を以而人心を懷は不時之變相生茂難計、御着眼被為在度儀と奉存候、

一 王政之御時茂、源平其外之武家之一族家人、国々江住居して、自己より源家之家人、平家之士と唱へ、尽忠之族不少、就而は王臣而已ニ不限事明白ニ御座候、ケ様ニ異説を唱へ候様御座候而は、如何ニ御座候得共、

皇国は上古より門地世臣を以而相立候 御国体ニ而、御国ニ於而茂、御家族・御同胤之衆茂過分有之候間、改而御一族又は御家人と名目被相改、何家部ト被極置、以来別立・他家養子等之儀は、藩士族江勝手ニ出入御免被仰付度、陪臣は前九年・後三年之時分、頼義・義家、奥羽之士民服従してより世々随従いたし候由、當時外国日本之挙動を伺候砌、能々内場堅固ニ罷成、君臣上下之分相立、根本動揺不致様無御座候而は不立行様可罷成と奉存候、

一 御家門方、是迄之寄合以上之処、現在之人物評論仕候而は輔佐之向茂無覺束、其内人才有之候而茂、當時は忌嫌訳ニ茂候哉、志茂伸兼候勢ニ而、いつれ成上ニ人才乏敷所よりケ様ニ成立候半、夫茂原因を糾し候得は、

三百年来太平之世ニ安逸ニ活計出来、治世後、旧將軍家、藩々疲弊之道を立、天災を待而、河々・寺々・城等之普請ニ手伝等申付、適々手当行届候而茂、富国強兵不出来様致し、諸大名を江戸江曳寄置、參勤交代等散財之外無之、又大坂等之豪富ニ金銀融通之道を開置、現金之格護乏敷者江茂、豪富之名目を免し、銀手形預等紙札を以而両替屋と融通之道を立、諸大名花美驕奢無限、用途不曳足様罷成、国産前借之趣法と成立、国産は集滿して、都会之有と相成、倍疲弊仕候茂全世振ニ而、更ニ教育之道茂不相立候得は、俄ニ武文之才芸を諸人と引較へ甲乙を付候儀、不教民を戦しむると等敷遺憾之儀と奉存候、 御先代様比ニは古学崩、其外色々之党ニ而混雜仕候事茂御座候由、ケ様之折は君意を以而国家を保護すへき門葉達故、教育之道を被為立、門葉江人才之出来候様有之度、罪を巨室ニ不得と申事茂御座候得共、何レ家柄之面々は難被捨置儀と奉存候、 一 御高祖得仏公御以来御同胤之御親族方ニ茂、国家ニ関

係仕候程之内乱等有之御代茂被為在候得共、今更名分
相開候上は、宗家尊敬之道万世動不申訳ニ而御座候、
併眼前洋学弊被相行、一体共和政治之如き風俗ニ而、
貴族・世臣等不用之姿と相成、往々忠厚之風儀薄く罷
成候半欵、古昔押川強兵衛、時之権威家平田増宗を除
き候如きは、以来年季抱模様之仕掛ニ而は、中々無覚
束奉存候、

一音信贈答之儀、真実相止処六ヶ敷段は、古今来稀成事
故、枝葉は先被差置、根本を定候様有御座度申さへ、
商民勝手能キもの御免年限明キニは、前広高札ニして
橋々江被立置、入札を以而願書差出候様被仰付候得は
可然哉、諺ニ「ミール」取が「ミール」ニ成之之理ニ
而、互ニ娼疾仕候人情之者故、酒之一品ニ而茂、上戸
下手之好を變する如く、意外ニ弊害生し来り、名目迄
茂善政永久難行候間、大筋之相立候様本体を被相定度、
後世ニ至り、君臣之礼義見掛之飾者と相成、君上臣士
を疑ひ、臣下君上を疑來、自然と君臣之情義薄く罷成、

名分丈は甚厚く相見得候得共、其実は却而無御座候、
勿論當時開化文明と口々唱候而已ニ而、更ニ心術之心
掛見分涯を立派ニ致し候迄ニ而、無筋事柄茂、同類さ
へ多キ者は却而美目と相成、手厚キ風俗被行候処更ニ
見留無御座候、人情風儀迄茂、復古仕候様有之度者ニ
奉存候、慶安以前は勤仕中ニ殉死之御約束、追々申上
者多御座候、勿論

垂仁天皇之御宇、殉死御禁止は、殉死之旧例ニ相成、
泣声甚敷被為聞召、御禁止にて、寛文比徳川代、殉死
を禁し候は、治世を着眼ニして差止候半、当時如キ戦
国ニ而は、夫程志之厚き者を被召仕度御事と奉存候、
加藤清正之家老飯田覚兵衛、平生自事を為さんと之考
ニ候得共、存生中色々逢深切候故難遂致奉公居、清正
死後ニ及生涯望居儀を不達と後悔仕候由、清正是無双
之豪傑文、忠心ならずとも、覚兵衛か長を取召仕居候
半、君臣互ニ厚意を以而相合て、御誠心を押立被召仕
候得は、音信沙汰等ハ勿論、万事無令ニして被行可申、

(島津義弘)
松齡様帖佐餅井田原ニ而御鷹野之折ニ、浜田民部左衛

門富隈江御機嫌伺として、淳朴成姿ニ而白金越参上掛
御目通りニ罷出、御丁寧ニ御会釈被遊候付、後醍院喜
兵衛嫡子少三郎新参者故、老人之姓名を不存、尋問之
上初而相知り、有名之民部左衛門さへ如此欵と驚惑仕、
御晦致し候伝説茂御座候、又は、朝鮮より帰朝之時分、
兵士一同御感状焼捨、子孫之者ニ至り、殿様江御難題
を申上もの出来候半茂難計杯申談候儀杯、旧国之故ニ
御座候、ケ様之風俗ニ罷成度ものニ御座候、尤朝鮮・
関ヶ原之御感状被下候員數、御領国中之御高前ニ而は、
不足仕候古伝説御座候、

一御一族は別段、御家人株は勅許之職務不被仰付、三四
等職限ニ而、別段之人才は其身代、藩士族ニ而相勤候
様被遊度奉存候、

一往々之御見留被為付候儀は、衆人面皮之変如く、色々
異説相起難行候ニ付、兩三ヶ条宛ヶ条書を以而御題被
相下、度々御下問被為遊度、一同封書を以而各見込獻

言仕候様被仰渡候得は、洋外儀事院同様之訳ニ而、壯
士輩現在盛大成儀は弁解仕居候得共、因循成世振、万
端閉塞起り安キ世上ニ成人致し候年輩之者共ニは、是
迄諸事試験仕候沢茂可有之、夫々封書を以被聞召上、

老若貴賤之情義御貫徹之上、追年之御所置銘々存慮獻
言、御取捨を以而御家運長久之処、御確定相成候哉ニ、
世評等取沙汰罷成候得は被行立、無此上御事と奉存候、
一魯西亜・英・仏・米国等、夫々毛布・金・銀・銅・鉄・
鉛・錫・硝子亦是石炭等、其国用余有而各国江掛致交

易、右等之税を以而軍用其外一切之用途ニ当て、海陸
之兵威を輝シ、盛大成者之由ニ御座候、皇国之儀は
程ニ応シ、先ツ兵隊之定數被相定度、就而は兵器等各
国へ御調文等茂可有之候間、絹糸・茶類其外生産ニ心
を寄、山野等不毛之地ニ桑・茶植増、十分手之相付候
様有之度、何事茂方今之務、功業を急ぎ、一時之愉快
を志し、金銭用度出入之大數を考茂不仕、今成ニ而は、
万々疲弊之外無之、政体相立候期有之間敷奉存候、

一拾ヶ年以前迄は、毛布類珍敷物ニして、鎗鞆・紙入・提道具等ニ拵へ、物数奇ニ相見得來候、毛布常服、且は縮緬板占^(稀)・帶地類迄、蟲品立派ニ仕調、日本品より格別最安ク罷成候故、都鄙男女共相用候ニ付而は、御国紙札は御藩内限、太政官札は

皇国限ニ而、現金銀不殘異人之手ニ落、年々諸色之直成高料罷成候、是等之儀、御上ニ而は如何思召被下もの御座候哉、

一御一族・御家人株、世祿迄ニ而は後年難立行可罷成、尤御藩内中多人数故、一々御救助之道六ヶ敷訳ニ候間、右之株は別段御構無之様被定置、第一 君辺江親敷積財之道被召建置度、就而は、旧御一門方初一所持、又は有功家筋之者江弍百石ツ、被下置株茂有之、建白通御採用相成候得は、おのつから一連中其儀可奉願候間、右之内より拾五ヶ年之間、左之通之趣法にして御積金被成候得は、弍拾年之後は格別成御用途罷成可申候、洋人之仕立居候「バンク」と申趣法、不動ものゝ由御

座候間、誰そ壯年之内、洋学ニ而茂致出精度望之者江「バンク」之掛御申付、金子預ヶ置御趣法被召建度、尤右利分之内より勤学料被下候而可然、いつれ商法相場書等之新聞紙、時々手ニ入不申候而は、丈夫成バンクニ而茂懸念之訳御座候半、

一錢三千貫文ツ、

本重留御領主一列九家

栗水様 凶書様 備後様

栄之進様 二ノ丸公子方御兩人様

一錢二千貫文ツ、

本私領并持留之領主拾五家

勝姫様 典姫様

御本丸御姫様 二ノ丸御姫様方

一同千五百貫文ツ、

先祖勲功家筋 新納・山田・畠山・桂等一列

拾老家位

右之家部江差出候様趣法親敷御下知被遊候得は、一ヶ

年拾万貫文余ニ相及、拾五ヶ年目元利千百何拾万貫文ニ相及可申候、右趣法、商人江式割利付式ヶ年限ニ御貸付、毎年利足上納ニ而、亦々御貸付、凡拾人位江拝借被仰付、三四ヶ年目より長崎江五万兩、大坂・神辺(戸)之間江拾万兩、東京・横浜之間江拾五万兩ト、ハンク江御貸付ニ相及申度、其向ニ巧者之人物有之候得は、其者江取扱御委任相成候而茂可宜、右之錢筋は、御領国ニ而は逆茂御趣法被行立不申事と奉存候、併三四四年之間は、いつれ成御国許有富之商人共江御貸付、凡五万兩ニ相及候而より御旋行被為遊度奉存候、

但当分變動致易き世上、如何様之世振罷成茂難計、本文通御積金之道相立居候得は、後年變事有之折、御趣意十分相立可申、且は御手人御救助之道茂、右之内より御弁用出来可申奉存候、

一御領内融通之紙札之儀、後來之見留を能々被召仕度、他藩領紙札は毎度下落仕趣法被行兼、官は勿論、一統之難儀と罷成、國中疲弊仕候段每々御座候由、當時之

模様ニ而は、御藩内茂同様之向ニ相違有之間敷、併他藩之儀は官より引替、又は豪富之者江兩替等之道十分手を付置候得共、何分藩内狭く、且は国用ニ付差掛り入費相重ミ、紙札ニ候得は何程ニ而茂召仕安キもの故、近他領迄茂人氣能致通融候得は、繰出方及過分金高、藩内不相応ニ相及処より、現金ニ而引替候儀難儀罷成、無人氣成立候得は、不殘紙札現金ニ引替度、我先ニト少々直安ニ而も繰替度、追々馳来候故、逆茂紙札現金と難儀候処より、官又は豪富共難儀成立、夫故全く通融相止坎、亦是格段下落仕坎、上下共難立行様罷成由、御当藩之儀は、是迄新金・大錢等鑄造之沢茂有之、且は西目下瀉・東目菱刈・真幸・日州表・屋久島・種子島・琉球等諸所手広、殊ニ琉球之儀は、一ヶ年一度往来位之商法取曳故、速ニ懸合茂弁達仕兼候処より、急速不人氣ニ茂罷成坎、又は近比之御旋行故、諸人不取馴故、是迄は随分算当を以而融通仕候得共、拾ヶ年以前ト相替り、一文之銅錢、一文之鉄錢同様融通時

分人氣ト格別相違仕、錢ニ茂高下金銀同様罷成、是迄
通投遣ニ而は全く通融相止歇、格段下落仕ニ相違有之
間敷、自然少藩同様之場ニ人々至誠を尽訳ニ參り兼、
年限抱之役人ニ而は、来年比よりは如何様とも罷成様
無之様罷成可申、能々丈夫之御趣法相立、兩替等之儀
茂、官府亦は豪富共江吟味被仰渡、早目防禦被召付度
儀と奉存候、尤諸色追々高料相成候儀は不得止事訳ニ
而、殊更御藩内は高直ニ相見得候訳は、諸色之御取締
迄ニ而、根本心付無之事と奉存候、就而は此後何程諸
色高料ニ相及候とも、別段御取締向江は御手不召付、
初発金銀錢之紙札御払出、三都は勿論、
皇国通融之金錢同様之曳合ニ而直段被立置御払出故、
又候同様之直成之通融相成候様、嚴重之御趣法相立、
諸国同様曳替会所被召建度、左候得は眼前ニは御国益
之廉相見得不申候得共、御藩内通融之紙札、現金同様
ニ而一体之潤と罷成、且御蔵々入払之金錢茂同数ニ而
諸上納株銀高過分御益得ニ可有御座、其節は諸色諸国

押并直段下落仕訳御座候、只今ニ而は輕き商民之内、
口錢所ト相唱候者共、蒸氣船出船前、又々臨時他国ニ
現金銀繰出之折を見合、互ニ申合を以而、金相場相立
向ニ形行、誠ニ遺憾之至ニ御座候、此趣法被召建不申
候而は、行先は上下困窮仕、一足茂不被歩様成立は案
中之儀と奉存候、

冊子原寸 縦二八・二種 横二〇種 一一枚

一八〇 久光公風俗矯正ノ論告

治国平天下之大本、五倫五常之外無之事候処、争乱以
來、藩内之風俗、倫理ニ反キ候義不少、悲歎痛哭之至
ニ候、畢竟重職之面々易簡輕便、過激ヲ專とし、殊ニ
兵隊之容貌、夷風相学候様布告有之候故之義、以之外
之事ニ候、向後末々之者ニ至ル迄、上下尊卑之礼讓、
内外彼我之明弁有之候様、奉行頭人父兄等心ヲ用ひ、
分而教諭可有之事、

但無謀之攘夷論ハ一切停止、

一兵隊ト雖、平日は

皇国之容貌勿論之事、

但當時之戎服ハ、以前之甲冑・火羽織ニ可準事、

一年若之面々歌踊等一切停止之事、若法ヲ乱り候者ハ、

不差置敵科申付候事、

一上下尊年之礼讓、屹と可相立候事、

一方今、文学盛ニ修行有之事候得共、実行之者相少、只

己か好所之議論之助といたし候義、沙汰之限ニ候、以

来風習相改候様、学館之面々心ヲ可用事、

文書原寸 縦一六・七種 横一〇六・五種

一八五 三条相国ノ論書

公卿諸侯并在職之人々、不法游蕩之行状、敵ニ制禁之御

沙汰有之度、既堀長門守ヨリ建言之様ナル事も有之、今

般彈正官ヲ被設候ニ付ても、既往ハ不問シテ将来ヲ敵ニ

戒ルノ一号令有之度、彈正出候ハ、御談ニテ取成有之

度候、猶乞公評、

文書原寸 縦一七・二種 横三九・五種

一八六 久光公ヘノ御沙汰書

島津從三位

朝旨を遵奉し藩政改革行届、殊ニ「兵備充実」其任ヲ尽

し候段、岩倉大納言岩倉具親復命、被聞食候。より及

奏聞、從來知事を羽翼養成之功不少「其任ヲ尽し候段」

御満足被為

思食候旨

御沙汰候事、

文書原寸 縦一七・八種 横二一・五種

一八七 諸制度改革意見

立案者不明

一府藩県之惣檢地有之度候得共、此涯難被叶奉存候間、

時節ヲ御見合御施行之事、

一公領一年之上納高・諸運上相料し

朝廷上より府県一年分之内入金、海陸軍常備兵等之年

分之御用途ヲ定る事、

本文假令は、一年分之御入用金千五百万両ニ而、上納高・運上銀取合千万両ニ及、五百万両之不足ニ候ハ、右不足之分は、朝廷上并府県諸御役場之月給被下方之多寡ニ応し、且大小名之高割ニ割掛、御差足ノ事、

一臨時之御入用金ノ大数ヲ量る事、

本文右貨幣局製造之余潤并ニ商税等より御宛行相成、余金有之様ニ働キ、年々積金ニいたし、海陸軍宏張之本ニ被差向度、

一大金ヲ費事柄相分居候ハ、前年会計局江御示し、会計官是を翌年之出入ニ算し、不足之節は預備之手当可有之候事、

一差掛臨時之御用途有之、御手当難被相調折ハ、欧羅巴同様之振合ニ而、利足付ニ而、本朝中之富家より御借入、手形御渡付之事、

一商税并ニ船税御取立ノ事、

但船税は船之大小ヲ以多少ヲ定メ、商税之法則は和漢

一定之例見当り不申、則西洋各国之法則を糾し、本朝之氣質ニ応し相堪候丈飽迄 御熟評之上、税銀之法則御取立相成度、

一會計局中ニ一局ヲ設ケ、諸局府藩県出納之勘定嚴重ニ点檢有之度事、

但出納を司候局とは異なり候様、

一諸局府県ニ於而も出納取扱之規則を定め度事、

但金銀出入之節は其職掌ニ堪候者と雖も、一己之計ヲ以出納ヲ得しめざる様、

一諸藩高割ニ応し、大小軍艦国役ニ備候様、尤小藩は混合相備候事、

本文諸藩相堪候程ニ寛ニ御割付、期年相立、敵命下り度、軍艦相備候場ニ、右入用金三部ニ、又は半減ニ而、金貨ヲ以、

朝廷江致上納候様御座候ハ、兵権一ニ帰し、尾大不振之憂(嫌カ)も無御座、一段之御事と奉存候、

一 諸侯

朝覲も三年ニ一度在京、日數も一二ヶ月位ニ御定メ、右藩守衛之兵も減少、其外何篇入費相省ケ候様御仕掛相成度、

一 前件通、年分之御用途不足之分ハ諸藩江御割掛之事候

ハ、当分軍持局江高割ヲ以、上納之株は御免相成度、一朝廷上之御役場より府県之諸官員可成少人数ニ而相弁候様、

一 大小名・上中下大夫之領地、一往

朝廷江返献、改而
朝廷よりは是迄之通支配被 仰付事、

本文 朝廷より改而御預之上、公論ヲ以、領地十分之一ツ、返献仕度、右被召上候土地ハ、先キ是迄之

通、其藩江支配被仰付、貢税而已上納仕候様、

一 社寺御寄付高も一往

朝廷江返上、由緒寺御糾ノ上、或ハ其俣被召付、或ハ半減、又は御取揚之事、

一 貨幣器械相立候ハ、金銀地金便利宜ク、御取入之道

相立、欧羅巴江致比較而

朝廷之金銀貨幣御鑄立之事、

付佐渡・生野其外金銀銅山江一層之御手被為付儀は勿

論ニ候、

一 門徒宗之類は致説得、彼より年々致上納銀候様仕度事、

一 朝鮮江使節被差立約条取結、和親且商法ヲ被始メ度事、

一 朝廷・諸藩・府県ニ於而も、用る所之用紙を定る事、

一 印紙ヲ製し、諸局府藩県江之公訴并上下三国売貨諸条

約・証書等取替し候節は、右印紙ニ非れハ、御採用裁判なき御定メノ事、

但於一局印紙ヲ製し、夫々江差向、中立之直成ヲ加、

是ヲ売らしめ候様、欧羅巴各国ニ於而も同様之処置

御座候ハ、必ス其益も数百万兩ニ可及候、又政府

之印紙ヲ以、飛脚書状之便ヲ助け、其印紙ヲ売しむ

る事は追々可有之候、

一八八 山階宮晃親王ヨリ島津久光公へ 書添共二通

年賀状

〔包紙ウラ書〕
「島津前中将殿」

晃

玉案下

一八八八ノ一

〔封紙ウラ書〕

「島津前中将殿」

晃

玉案下

ノ

〔墨訂〕
二

追申、從定丸同様御慶申入度旨ニ候也、

新玉芽出度益御安全御加寿珍重令存候、此玄方一包、不相替年始申入候印迄ニ令晋上候、尚期永日候也、

辛未

正月元日

恐惶謹言、

文書原寸 縦一八・二種 横四七・五種

一八八八ノ二

書添

〔邦家親王〕
伏見一品宮七十賀ニ付、東伏見宮・晃兩人ニテ、催方致

し、近親及知己よりタンサク所望致し候、乃一ひら御詠進被下候ハ、千々万々忝存候、御家来中ニ歌道志の人

多候よし兼々伝承候、何卒詠進候ハ、大ニく忝存候、此ニ寄而祝といふことをニテ集メ申候也、

島津前中将殿

晃

文書原寸 縦一八種 包紙原寸 縦三二・六種

横九・八種

横 四二種

一八九 岩倉具視卿ヨリ島津從三位へ

岩倉勅使ノ報告

〔包紙ウラ書〕
「島津從三位殿」 具視

平安内啓

緘

」

追々〔欠損、春カ〕
暖候

聖上益御機嫌能為涉御同慶此事ニ候、尊卿ニも弥御安
全欣然、併兼而之御持病如何哉、尚令承知度候、寔ニ先
達ハ、

勅使とし而下向之処、速ニ

敕旨御休認御奉命有之、本月六日無異帰東、万端

奏聞ニ及ヒ候所、不一方

御満足被為在、此上は一日も早(欠損、御カ)□出京有之候様、只管御

待被遊候、尤臣子之分、駕ヲ不待シテ行云云、段々御配

慮之趣ハ勿論、真に御病氣、不得止次第等ハ懇々言上、

凡而被

聞食分候事ニハ候得共、何分ニも遠ク 勅使被差向候程

之御義ニ付、素より等閑ニ被為止候御事ニも無之、殊ニ

方今之所 皇国大基礎可相立機会と被

思召候間、呉々迅速御上京之様可申入旨ニ候、小生ニも、

邂逅奉 勅伝宣之処、其廉判然相立、一分上ニ於而も、

実ニ面目ヲ施し候義ニ而、(欠損、深カ)□忝存候、(三条業光)条公始ニも喜悅申

計り無之、為天下被賀候との事ニ候、只遺憾は御遅速而

已ニ候得共、追々御加養も有之候事と存候条、御勉強、
御約之通り、来月中ニは、必々御登京之様令懇禱候、乍
去、小生ニハ、現場御容体も承知仕為候事ニ付、万々一
未だ御十分ニも無之候ハ、縦令暫時ニ而も一応ハ御出

府有之、其上風土之違ひ彼是ニ而、御在(欠損、京相カ)□成難きとの

事ニ候ハ、如何様ニも尽力可仕候間、右辺ハ相舍居候

間、差越候事なから、内々御心得迄ニ申入置候、将亦参

着ヨリ滞在中、終始段々御念入候御取扱、全ク 勅使江

之御仕向ニ而候得共、過当之次第不浅忝存候、殊ニ発途

之節ハ御心入品々御恵投、其上家扶ヨリ末々迄ニも、品々

御遣候、呉々忝存候、乍序厚御挨拶申入候、此品乍如何

令進上度旁要用而已如此候、早々、以上、

二月十五日 具視

島津從三位殿

追而、西郷ニも早速御差出、段々御建言之趣、夫々

被

聞食

叡感、不少御採用之廉、則被 仰出候事ニ候、万事
ハ同人江申置候間、尚御聞取可給候、末筆且憚ニ存
候得共、知藩事殿江別段書状不差出候、宜敷々々傳
伝声願存候也、

文書原寸 縦一六・四寸 包紙原寸 縦二六寸

横四五・八寸 横三九寸

一八〇 三条相国ヨリ大久保參議へ

井上馨歐洲派遣ノ件

弥清康大賀候、然ハ井上馨理事官として歐洲ニ派出之事
昨日御談申候通、大藏卿(伊達宗城)へも申談候、格別異議も無之と
ハ存候得共、經濟上之義は大藏卿之關係有之義ニ而、自
然異論ニても有之候而ハ不可然候間、尚老台(重徳)よりも大隈
氏ニ談合有之度、小生今日ハ少々所勞氣ニて參否之程未
決ニ候間、乍略義此段書中を以て申入候、宜御考有之度
候也、

四月十三日

実美

大久保殿

文書原寸 縦一七・三寸 横六二・三寸

一八一 前橋藩士城井寿章ヨリ西郷隆盛へノ進言

功臣ニ対スル賞典遺漏ノ件ニ付

伏以

皇運隆盛百度維新ノ今日ニ際会スルヲ得タルハ、王室
中興ノ時至ルトハ申シナガラ、貴藩ノ天下ニ先ツテ勤
王尽力セシニ頼テ也、然レトモ其先驅ヲ為スモノハ、草
莽志士大義ヲ首唱セシヨリ、其風ヲ聞テ諸藩士脱走シテ
事ニ從ヒシ功ヲ資ラザルヲ得ズ、是故戊辰八月中天下ニ
布令シテ曰、近年有志輩四方ニ周流シ、義ヲ唱ヘ難ニ殉
シ、大ニ国家ノ命脈ヲ維持ス、今日 朝廷復古ノ運ニ際
会スルモ、自ラ其首唱ノ力ニ資ル云云、又其既ニ死セシ
者ニハ、祭養ヲ賜ハリ追奠ス、又招魂社ヲ設ケテ、伏水
ノ役以来戦没ノ士ト一同ニ祭奠ス、然レトモ其賞典ニ遺
漏極メテ多シ、且ツ其妻孥流落ニ任セテ恤典ノ挙ナシ、

又且ツ幸ニ幕府姦吏ノ網羅ヲ漏レテ首領ヲ保ツモノ、往々草野ニ沈滞シテ収録ヲ蒙ラズ、是レ天下ノ士ノ憤懣シテ、不平ヲ草莽ノ間ニ鳴ス所以ナリ、豈照代ノ一大闕典ニアラズヤ、蓋シ朝政其名アツテ実ナキモノ甚多シ、豈啻ニ是レ而已ナランヤ、今日賞罰ノ二典ノ挙ラザルハ、朝政ノ振ハザル所以ナリ、顧フニ執事ノ賢明必ズ寿章ノ喋々ヲ待ザルナリ、刑罰ノ事ハ姑ク置之、賞典ノ公平ナラザル、其一端ヲ挙レハ、前大隅守島津公(久光)ノ如キ、皇室再造ノ元勳アレトモ、今日マデ褒賞恩賜ノコトアルヲ聞ズ、是レ天下ノ士ノ窃ニ憤惋大息スル所ナリ、昔シ延元中興ノ皇業ヲ遂ケザルモ、皆ナ賞スベキヲ賞サズ、賞スベカラザルヲ賞シ、都テ賞罰ノ二典ヲ失ヘバナリ、大政復古以来、勤王ヲ口ニ籍キ、四方ニ奔走セシ浮浪不逞ノ徒、動モスレバ草野ニアツテ乱ヲ謀ルモノ、皆ナ賞典ノ遺漏ヲ憤懣シテ口実トセリ、窃寿章、延元ノ覆轍ヲ蹈セラレンコトヲ恐レ、一昨年以來屢当路ノ諸公ヲ干シテ建言スレトモ、更ニ顧ミ給ハズ、寿章不幸ニシテ此言

ノ他日ニ驗アランコトヲ懼ル也、今般執事ノ召命ヲ奉シ、旧知事公ニ從テ東登スルヤ、天下ノ士、領ヲ引キ目ヲ刮ヒ、日夜新政令ノ出ルヲ渴望ス、万口一談、皆曰ク、日ナラス積弊ヲ改革シ百度ヲ一新シ、中興ノ偉業ヲ仰キ見ントスト、蓋シ天下ノ士、貴藩ニ望ヲ屬シ、執事ヲ瞻仰スル、如此モノハ豈偶然ナランヤ、伏テ願クハ、執事速ニ此事ヲ朝廷ニ上言シ、賞典ノ遺漏ヲ取調ヘ、草莽沈淪ノ士ヲ収録シ、又且ツ大ニ恤典ヲ挙ケ、其妻孥ノ流落ノ者ヲ賑恤シ、上ハ以テ朝廷ノ闕典ヲ補ヒ、下ハ以テ天下ノ士ノ心ヲ慰メ玉ハンコトヲ懇願ノ至リニ堪ズ、若シ朝廷ニテ御採用ナクバ、執事宜シク天下ノ士ノ為メニ是レヲ貴藩ニ於テ施行スベシ、嘗テ聞ク、朝廷ヨリ所賜十萬石、貴藩固ク辞スト、願クハ之レヲ奏シ、請テ其十萬石ヲ賞典ニ充テ、施行アラセラルレバ、豈啻ニ朝廷ノ闕典ヲ補ヒ、天下ノ士ノ心ヲ慰ム而已ナラズ、元弘ノ覆轍ヲ蹈マザルニ庶幾シト奉存候、此他、執事ニ瀆告セントスルコト甚タ多シ、他日執謁ノ節口頭

ニ付スベシ、寿章、頓首再拜、

辛未仲夏望

前橋藩士族
城井寿章

鹿兒島藩大参事
西郷君執事

冊子原寸 縦二四・五櫃 横一六・五櫃 三枚

一八三 和田正道ヨリ久光公ヘノ建白 合三冊

新政論。新政余論二卷

一八九二ノ一

(表紙)
「」 新政論

新政論序

上天立君使之統国設官分職以安民、理国者凡有六典焉、
治也、教也、礼也、政也、刑也、事也、是則漢土周宦之
政典、而固国政之事無不統于此六典也、治典者理之使不
易其常、治必先官府而推以紀万民、教典者導之使不

常、教必先官府而推以擾万民、礼典者交好常、有以相親
統百官而推以諧万民、政典者分守常、有以相制正百官而
推以均万民、刑典者辞令常、有以相戒儆百官而推以糾万
民、事典者財利常、有以相資任百官而推以生万民、分之
則雖涉六名、合之則歸一治、故政府大臣總掌此六典輔君
治国、是古今和漢之常經也、然随世之變遷、至於政事之
因革法制之廢置、則必使大臣公心協謀、博詢利病、広攬
詳挾、務適時宜、更其所可、更則不嫌於違俗、守其所可、
守則無憚於襲、故既令既行、堅如金石、信如四時則吏民
莫不傾耳、承聽感動信服此之可謂治国之本体矣、今一新
政体也名実相背体用相反、修拳更無所見、而制令變易頻
數、遠一年近一月、甚者朝夕改、官吏不知所守、民庶
不知所從、而釋其弊原蓋由、議論未精、思慮未審、事理
未通、人情未尽、是非未弁、取舍未識、或牽於好惡之私、
或溺於迎合之說也、臣於是、區々之忠憤不能自止、粗因
所見而妄有所論、薄劣淺陋、固無足取、而唯憊々一念之
忠、儻幸勿鄙擲、未必無小補於新政之万一、臣正道謹序、

新政論卷首

論政治之得喪

凡治國家之道，以德禮為本，以政刑為末，然四者不可偏廢，苟惟有德禮，而無政刑，雖聖人亦無如何之，而政道之尚公平，刑法之貴寬大者，則王道之所必為，而固不俟論也，然古今有時世之寬肅，風俗之異同，則酌量其利害得喪，而時勢不得已，則有可嚴政刑，是則所以使小人不狎法陷罪，而發仁愛忠厚之意，亦不出王道之外也，嗚呼於方今之世也，下疆凌上，臣有權君無威，上下無分，貴賤無等，官府失体，有司謬職，且背法犯禁者又多焉，當此時也，政刑悉以施嚴猛，可謂適宜矣論矣，而政治之本体，則以制度紀綱，可維持之者，而其寬猛抑揚之際，量時處位可令適其宜也，然世之學者，動徒唱王道說德化，而斥刑名法術，嗟乎此腐儒迂生之空論，可言而不可用也，夫刑名法術也者，扶植制度紀綱之大用，制度紀綱者，維持國体之大柄，其維持者，則何所為，以禮義規曲，以法律戒非，以禁憲防惡，使

世無暴悖放縱淫盜姦邪之患，是也，是故今也，法制禁憲之設，須要本嚴明使人畏懼敬謹而不敢犯，若觸法違禁者，則加刑罰，以莫所寬，假其跡雖似苛酷，然所謂殺一人而活万人之道，固可謂真仁政矣，其執持制度，以匡正風俗之責，則監察，糾明兩官之任，而就中監察，則普配大活眼，最敵視官府，監督政道，予懲盜患，警治姦凶之要職也，然今有監察之名，無刺箠之實，而上責實之政不行，下勵行之風不興，是固所以人体不具，有司曠官也，是以，欲求治道，更精撰人才，協力同心，以使各伸才竭心，為急要乎，

論嚴制度

或先生自幼慕諸葛亮之為人及其功業，竊謂吾亦人也，當路期其功，雖然，語人則恐以狂人目吾，而不敢語人也，而先儒輩亦有斥亮，為申韓之學者，固可謂淺識之鼠輩矣，嗚呼亮之治國出師也，嚴法度明賞罰，正大公平，而實發忠厚仁愛之意，亦不出刑名法術之外，然亮死之日，雖遷廢之，人為之有泣，下致死者固可稱大德

之君子也矣、是以、今也治国家者、必可為模範亮也、

固制度嚴法律、則政權歸上、命令行下、而政治可整也、迂生輩以嚴法制、為申韓之學者、則不識時務之論、不俟言明矣、然非敢為迂王道、其所施之嚴峻、皆随世応事、自仁愛忠厚之意發則固協王道仁義之標準、此之可謂真政道矣、

論監官体任

凡無貴賤無親疎、有罪則罰不赦、有功則賞不漏者、諸葛亮能之也、嗚呼可謂真公平矣、然於今之監官也、唯專穩便易簡、不察政治之得失、不竭非違之監督、頗有偷安苟且之弊、而会措置則涉瑣微小事、而大綱不举也、夫細故繆妄、人情之所必有、而悉糾以法則、朝野無全人、苟監官举小過、錯大事、則下怨望、而国家乱、是故、細故則疎之可也、然紊土風、誤人倫、濫礼義、敗国家之類、則雖細故必罰莫赦、儻其志適武門、或出忠憤、或發孝心、或起義激之類、則雖小事必賞莫漏、励武門、厚風俗、匡士道、警非常者、則監官之任、豈為

輕哉、

論刑官体要

方今暴士狂徒、淫盜鼠窃之熾、頗增長于前世、是如何、則刑官不識時務、寬典偏举人心狎侮、而法憲不立、制度不行、即所以罪人滋長蔓延也、夫刑也者、弼教輔政之具而其寬猛執中、可使適其時之宜也、吕刑云、輕重諸罰有權、刑罰世輕世重、周書云、刑新国用輕典、刑平国用中典、刑乱国用重典、或說云、刑新国用輕典者、以其旧染汚習、不可遽正、姑以教之宜以柔克之義也、刑平国用中典者、以其已安、已治、既富、既庶、陶冶被服、莫不卞治、則教化已明、習俗已成、宜以正直之義也、刑乱国用重典者、以其頑昏暴悖、不可訓化、則殲渠魁、滅彊梗、宜以剛克之義也、方今之世、乃乱国而吾

藩頗有暴悖、不可訓化之勢、何以寬典輔治之為乎、諸葛亮輔劉備治蜀土、頗尚嚴峻人多怨歎者、然始於蜀土也、劉璋闇弱德政不修、威刑不肅、人臣專權、自恣君臣之

道、漸以陵替、是以、亮所以繩之以嚴也、非所謂刑亂
國用重典者乎、況劉備寬仁大度、而亮不以嚴輔之、是
以水輔水也、故備以寬、亮以肅、備以緩、亮以急、備
以仁、亮以義、猶疾除甘苦之相成也、亮之以嚴治蜀者、
則為治之要輔君之道、而固可謂王佐之才矣、嗚呼孔明
而尚以嚴峻、況於今之人臣乎、

論監察糾明分職

監察糾明分職者、則蓋倣

朝廷之彈正台与刑部省乎、然於

朝廷之政也、涉天下之広事務之大、固不得不分職也、夫

設官司也、必以所轄之広狭、所統之衆寡、所莅之繁簡、

可定官數員、叢爾藩國与

朝府不同、宜弁識体裁也、夫監察糾彈、非違糾明、聽斷

獄、訟事務、僅異時混淆重複、或間隔齟齬、或遲疑猶

予或繁冗紛煩、体裁其不適乎、是故、可合併兩局、戮

力同心、能使兼尽其事務也、然則勸懲予奪之權、制度

法律之柄、遏盜禁暴之術、出一轍体用兼舉、時務齊整、

無繁煩冗費之憂、而基業能立乎、稿其合併之制、為如
左、

刑法局廢監察糾明之局名、
更改稱之如上

總裁 二等 定員一人

掌總判・監察・糾彈・鞠獄・刑名・捕亡・贓贖

典刑 三等 同五人

掌執持・憲法・審斷・刑名廢糾明奉行
充之

監察 四等 定員十人

掌提督・制度・監察・非違・与議・刑獄

鞠獄 五等 同十人

掌鞫問・獄訟廢糾明奉行副役
充之

巡察 六等 同十五人

掌巡視・糾察廢糾明奉行見習
合今之巡察

檢事 八等 同依旧

掌檢視・警察

管牢 九等 同依旧

掌監守・獄室・檢察・獄囚

筆者 十等 同十人

掌官中簿書・鞫問口書

捕亡長 十一等 同依旧

掌追捕・搜索之總務使今之符士充之

捕亡

掌追捕・搜索使今之足輕充之

論士風暴戾

本藩士衆之壯烈武斷、所以超絕於他藩者、則振古固有之

遺風、而頃歲尚開張文教、優遇士衆、更張軍政、日盛

月大、雖然、天下弊囊、世道彫喪、已數年、且戊辰以

降、大難未平、天人未定、創業率出權謀、致使禮義弗

興、風俗未改、而吾

藩輕銳粗勇之士氣、愈馴致暴俗、而尊嚴不立於上、威令

不行於下、議論馳高遠捨近改、而尚遠略好兵戰、而不

修經術、頗馳疆梗、敗禮法、殆不可訓化、當此時也、

貴官大職、宜銳意勵精、上奉

君命、下行教化矣、夫教化者、貴教之以忠、順示之以樸、

直正之以禮、法勵之以道、義使人羣々遷於善、邪偽之

心、嗜欲之性消化也、苟放恣傲慢、而不可訓化者、則

宜本重典尅嚴法而懲治也、是時勢不得已之法、而亦不

出王道、仁義之外也、豈苟而已哉、

論軍政闕典

夫兵也者、天討之器、而誅暴治亂之法、固不得已之道

也、而戊辰大捷以降、天下稍憩席之隙、而天人未定、

治亂難測之秋也、於是乎、鍊兵疆藩、以守護

王室、為最大急矣、然其鍊兵疆藩者、則在於号令行、号

令行者、則在於法律嚴、法律嚴者、則須要使兵常如踐

實地、斯須無怠慢矣、是以設軍律也、常變必貴嚴峻、

而不混淆常律也、然今闕軍律、而駁然混淆常典、或以

率爾之衆議、而既決也、或嚴、或寬、或濫、或縱、

更無一定之法典、可謂軍政之大闕典矣、宜撰簡、當明

備之軍律、然則軍政精整、而克致干城乎、

論地頭体裁

凡於地頭職任也、事務多端、而最以更張富庶之道、精勵辺衛之任、為至急矣、然方今拜其官職者、迂生庸愚之人不寡、而不識緩急輕重本末先後之時務、當一端之物議也、疑畏猶予因循固陋、頗繆体裁、是以失威望、士庶輕視之、是何以任辺衛富庶之大職、嗚呼以此官与任此人、寧闕官可也、然世猶多遺才、更精撰人才、宜黜陟減否也、

論新進士族

嚮廢門閥、而於其貴戚家士、則有班士籍者、然其中寓居市肆、内業商工外飾士裝、或工役于商家、或与商民交友、或仰豪商鼻息、其醜態豈可堪哉、吁其素習之卑弱、更不識名分節操之可貴也、是故、嚴然責令可使婦住本所、婦順本職、若依然寓市間、安賤業者、則固卑弱如之、何其可土用之乎、断然黜貶于輕賤可也、莫必以姑息議処焉、

新政論卷尾

右新政論、臣嚮奉刑官、有任其責、故建議於政府大臣、然以不奉可否之酬誥、再三獻書于

藩公殿下、亦不賜酬誥、臣窃以為指陳無狀、触忤

上意、或臣之積忱未足以仰勸

君聽、無可奈何也、然區々之忠憤、不能自止、亦欲獻書于

副城殿下、而前書皆以和文、今茲倣漢文、文意頗失其体

且謬旨趣、愈重贖冒之罪、臣所敢不顧也、唯百万尺愚

衷、以期威命之下而已、臣和田正道謹記、

冊子原寸 縦二八釐 横二〇釐 一七枚

一八九二ノ二

〔表紙〕 新政余論 〔

上新政余論表

臣疎賤干冒、嚮以犬馬之誠、昧死百拜、聊表芹意謹獻
諸左右妄論、新政之体用凡九条、曰政治、曰制度、曰
監察、曰刑法、曰軍政、曰地頭、曰士風、曰名分、曰

遺才、極知僭踰無所逃罪、然

殿下汎容至渥、不以臣狂愚、而至使伝事下

問、其条四、曰君無威臣有權、曰貴賤無等上下無分、曰

官府失体有司謬職、曰人才隱野事旨悉係于機務、臣亦有微意在、故不得徑官司上言、伏願拜謁、以

聞

殿下賢明、垂

慈念許詣拜、而臣謹昧死冒犯、亦上進論文、以予具于愚

对之一端、題曰、新政余論云、然固陋不識、時務疎愚、

不知忌諱、握筆至此、不自知其言之過于激、亦不自其

言之過于泛、罪当死、不勝恐懼戰慄之至、仰願

殿下、聽政之燕間、少賜

省覽、臣誠惶誠懼百拜謹对、

明治四年春三月

和田正道

新政余論卷首

君無威、臣有權

君自謂、凡人君之為威也、自修自行、乃文乃武、然後德

可輝於下、苟惟俟輔相制令、而專尚威嚴者、則豈曰人

君德義之威望哉、宜監也、嗚呼

君上之言既及此、乃人君德威之基本莫大焉、豈可不感戴

哉、然漢高祖以干戈而一統天下、上下紛紜、喧嘩争功、

飲酒妄呼、拔劍擊柱、高祖憂之、叔孫通乃設礼典立制

度、而群臣仰上如天日、君上之權方立、臣下之分已定、

而高祖始知皇帝之貴也、而高祖天資寬仁大度、素備君

德尚如此、然則君威之立与否者、何惟与君德哉、亦是

由礼制之立与否、輔相之行与否也、當此時也、固人君

雖可修其德布其威、然大臣亦不可不竭輔弼之責也、今

尊嚴威令所以不行者、則固在于不竭輔弼之責也、而臣

嚮論所以謂上無威下有權者、則固下無礼也、下所以無

礼者、則粗勇輕銳之士衆、戊辰以降、變于暴戾放縱之

習俗、決裂礼義廉恥、放失樸直忠美、既浸染于洋夷之

氣習、日馴致于浮薄之風俗、頗謬名義、視

君上如寓公、由是尊嚴威令不行、紀綱制度不立、礼義殆

墜地、或云、國之所以為國者、以夫天叙天秩者、實維持之也、為國者志存于典禮、則忠順和陸之風興、協力一心、尊君親上、其彊孰禦焉、不然則三綱淪喪、人心乖離、國誰与立、軍旅雖精疆何所用哉、夫礼也者、天秩之常經、而防範人心、綱維世變、平治國家之大柄也、苟國無礼則君位危、君位危則上失威望、下無忌憚、大臣擅事、小臣行暴、礼云、班朝治軍、蒞官行法、非礼威嚴不行、其班次朝儀、各有位次、整治軍伍、各有部分、臨蒞官府、各有職掌、三者皆有法、而其法則非威嚴不行、威嚴則非礼不行也、故欲贊成人君之威望、則在上下正礼、欲正礼則在張制度紀綱、正命令法律也、先儒云、威則人不敢犯嚴、則不敢違而所以致其威嚴者礼而已矣、又云、安上治民、莫善於礼、礼敬而已、又云、礼一失則為夷狄、再失則為禽獸、聖人恐人入於禽獸也、故於春秋之法極謹嚴、中國而用夷狄礼、則夷狄之其格言告戒又不少、而方今

本朝之正氣掃地、頗奉夷礼信夷說、貴夷器、万般倣彼心

術氣象狂瀾、礼義廉恥廢絕、或汚辱頭上、或壞乱士裝或侵暴人家、或乱妨行人、或醉倒路頭、或狂戲婦人、皆是公肆陵犯、放逸無慙、傲慢怠惰、殆均禽獸、慨歎不知所言、而礼者君臣父子日用常行之際、須臾不可離也、今也、文化日開月盛、士臣亦蓋匪前日之愚蒙、豈得謂不識義理乎、夫學問之道、捨礼而何以修身齊家治天下國家乎、道德仁義非礼不成、教令正俗非礼不備、分争弁訟非礼不決、君臣父子非礼不定、兄弟朋友非礼不睦、聖語云、恭而無礼則勞、慎而無礼則蕙、勇而無礼則乱、直而無礼則絞、夫恭而無礼則成疲勞、慎而無礼則徒畏懼、勇而無礼則流陵犯、直而無礼則傷訐切、其弊如此、故礼者人君之駕馭之大柄、人臣服事之大要、豈可不謹嚴哉、

貴賤無等、上下無分

士庶之於容貌服章也、武臣者乱髮戎服、文臣者綵髮常服、庶人者半髮小髮、凡雖有品級之規制、尽不行于世、然固非

本朝一定之成制、而今士衆無武臣無文臣、或半髮、或剃髮、或脫刀、或一刀、或佩匕首、或寓居于市肆、內業商工、外飾士裝、或役使于商家、或与商民交友、或仰豪商鼻息、貴賤雜駁、上下混淆、更無所識別矣、夫名分者、禮典之體要、國政之大柄、不俟論明矣、於是乎、敵然不可不設制度張紀綱正禮義也、

官府失体、有司謬職

凡為政也、須要弁天下之勢、察事体之宜、一事之施、一令之布、委曲審定、以為久遠之規矣、然今也、政府之失体闕典、其大者有三、曰禮、曰教、曰法、即前文所論禮制教令不行者是也、而頗好侈、大貴新奇、求虛文張名聲、恃一時之功利、而自以為殊、非策之偉且得乎、不知有富大之名、而其実尽空虚矣、好其侈大尚新奇者、何以言之、即今如紡績及鋸器械其他機巧珍奇之事物、惑溺心醉於洋夷之發明新奇、而不弁識商量、天造地產之物理、体制頗涉于巨万之經費、虚耗国力之類是也、求虛文張名聲、專功利者何以言之、今政令之弊

也、雖尊王道仁義、宗正大公平、然其実則不免皆出權謀譎詐之末流、乃變革政体也、其所令則深弁名義之大体、不立一毫之私見、举人才更張政務、以小權莫犯大權、或措己之職務、莫問人之職務、或為官求人、為人不求官、若無其人、則闕其官可也、或莫令有冗官、幸位其旨趣、固嚴且正、雖然、未嘗及見其事实、是名実相反、欺世罔人之甚者、而何以謂之一新乎、然今也、時運弊襄、人体不具則固脱然不能行聖人之政、必能量時宜隨人心、正名分去虚勢、以施適要、更張体用、兼举之政事、可謂治道之実用矣、元憲宗問治道之要於耶律楚材、楚材對曰、生一事不如減一事、興一利不如除一害、此語深長、至当之名言、官府有司之龜鑑、莫善焉、然設文教也、体不立而馳用、惟有張名聲之習、如設今之學校、措置士館而別本學校、或第一小學校、或第二小學校、第三、第四連之、或兵學校、或鄉校、四方連館結社、狹隘之地陸統無不學校、而名雖如美、其実則涉駁雜詭異教法、學規不純一、而學問無方、心志不

定、且議論多而成功少、虛文勝而實効微、最偏信洋學、廢棄典經、設為異教而為一種巧妙之學風、勸養導生徒、或遠招賓師、靡然偏倚于此、趨迎懇懇、饗給之厚備至、更使官府增冗費、一般多事而其人必非其人、是所危疑也、又施民事也、基礎未立、百冗未治、而徑以興大業為事、惟有求功名之風、如行今之檢地、人体不具、財用不足、議処紛紜、支計勞擾、差繆闕失、豈為小哉、吁有仁政之名而無實效之舉、識者最恐其功不全也、亦或為人求官、而為官不求人、或非其位而謀其政、或制令朝定夕改之類為不少、如此者皆是謀事之始、措置不得其宜、故而乃官府失体有司謬職之所致也、

人才隱野

先儒云、學問無方、心志不通身之罪也、心志既通、而名譽不聞、友之罪也、名譽既聞、而有司不舉、有司之罪也、有司舉之、而王者不用、王者之過也、又云、忠臣舉賢不避仇讎、其廢也、不阿親近、聖語云、赦小過舉賢才、或云、用人者無親近仇讎之殊、惟賢不肖之察

其人未必賢也、以親近而取之、固非公也、苟賢也、以仇讎舍之、亦非公也、天下之賢非一人所能尽、若必待素識而用之、所遺亦多、必舉之以衆、取之以公而已、不容毫髮之私於其間、則無遺才曠官之病矣、然今也、官吏之升降除拜、必与其朋類相牽援、党己者用之、忤己者捨之、故親近常得時、疎遠常沈淪、是古今之通弊、而以今考之、要路之官、其他之有司、往々從軍之士、党類蝟集、而嘗不經汗馬之勞者、則皆同寒蟬徒拱手耳、夫三軍之徒進則勇鬪奮戰、雖能為其君尽力、退則不為必有國家經綸之才、猶有角者無牙也、今雖世乏良材略懷利器、而不經軍旅者間有之、是故

君今汎問國人、審察人才、物色以訪求之、使寒蟬如遇盛夏、則必有飲曉露吟清風者矣、夫國家舉事為治之道、雖非一端、其要有取人之善用人之能矣、人各莫非所知、亦各莫非所能、心有所知則發以為言、己有所能則用以為才、言有善否、人君則惟其善而取之、莫所伏藏于下、才有大小、人君則隨其才而用之、莫所遺漏于外、則無

担任偏信之謬、失体闕典之憂、而国家治道之根軸莫大

焉、今也、所以有遺才曠官之病者、則恐有觸疑畏嫌疑

者、政府豈不修省哉、所謂遺棄之人才、則別以、上所封之、故不記載于此也、

新政余論卷尾

冊子原寸 縱二八釐 横二〇釐 一五枚

一八九二〇三

(表紙)

上

上副表

臣愚賤、嚮承之拜糾明奉行、而惟知

君命之重、不敢揣、已猥奉之、然方今国事艱難、官事缺

掌、加之、刑者天討之所寓、人命之所繫、臣非劣不足

塞其責、固不可拜任者也、是以未幾而上辞表、然

官府不聽之、再上之、而輒聽之、臣拜謝其

恩命、杜門就孤陋、未半歲而再辱

顧命拜同職、不得復固辞而奉之、惟尊慕

君上、竭瑣劣之資而已、當此時也、窃憂政刑紀綱相紊、

暴悖放縱日酷、故不揣、已唯以任其官之責、尺縷々之

心、憤然建議治道於官府、或条疏芹意於大臣、然經教

旬不奉酬誥、臣以為、事旨悉謫陋無由採摺焉、而竟會

成自己之無狀、獲罪蒙罷黜之譴、恐懼謹肅、不知復所

言而已、然伏惟、不以人廢言、不以言廢、直千慮一得、

或有取焉、是以臣愚輒奮区区憂国奉

君之愚衷、不避斧鉞之戮、再条具其論、以獻書于

藩公殿下、汎容至渥、不以臣狂愚、而下

問事旨係機密、然

君親不問之、至使佞事伝之、是故臣不得上陳之、而冀拜

謁以

聞也、然弥教旬不賜酬誥、臣愚固非知其故、然窃以為、

卑意淺言不渴

聞、或妄論激語觸忌諱、而拜謁直言所不許也乎、夫古聖

賢之君詢問、及百工之民、采薪之夫、誠以淺近之言而

不廢也、虞舜察邇言、故能成聖化、晋文聽輿誦、故能

恢霸功、大雅有詢于芻蕘之言、洪範有謀及庶人之義、

是則聖賢所以務徇衆心、不敢忽細故也、唐陸宣公嘗告

其君曰、太宗以虛受為治本、以直言為國華、有面折廷

爭者、必為霹靂雷霆之威、而明言獎納、有上封獻議者、

必為黜心意之欲、而手勅褒揚、故得有過必知、知而必

改、存致雍熙之化、沒齊堯舜之名、此後世人主所當取

者也、是以臣昧死干冒、伏願

君上銳意求治務、不自賢而孜孜汲々、渴聞不倦、虚心好

問、許拜謁直言、是雖如小事、然君德之大体、政治之

大柄、豈敢忽哉、是故臣犬馬之情不能自止、而既經家

令以獻言愚對之概略、即新政余論是也、於其微旨、則

俟詣拜之期而上

聞、然不復賜酬誥、不得尽愚疑而竟至今日、嗟乎犬馬恋

主之情、不知復所類也、然臣愚以為、難虛賜

問、反覆數回、以請謁見、大臣上言而遂許進見于政府、

臣百拜謹上愚對言論、相接指陳無狀、頗失举措焉、桂

四郎(久松)・橋口彦次(參三)・大迫善右衛門(貞徳)・橋口与一郎、会同聽

之、然皆猶不識得其事旨者、而讓事於左右、或折辭色

之妄發、或抑指陳之尽言、故一言不得尽其情、一事不

得述其理、漸至上陳其梗概、然臣之言、固狂愚鄙陋、

無所采取、故自抑退而罷去、雖然臣愚亦以為、有患者

之言聖人摺之古語、今政府大臣豈曰聖賢之人哉、於是

臣狂愚昧死干冒、謹猷別表二卷

副城殿下、臣愚伏願

清問之燕略賜

省覽、恐事旨無狀、冒瀆

君威、寔狂妄罪当死、且左右之人固仇疾、臣妄言亦罪所

不免也、然与牀迫於權勢之威、憂疑於一己之禍、嚙口

結舌、以座待國家之難、孰与犯死一言為國万一、

冊子原寸 縦二八種 横二〇種 七枚

一八三 神奈川和蘭公使ヨリ伊達宗城少将へ

日本ト瑞典諾威トノ条約締結ニ就テ

余既ニ一二ヶ月以來、スウエーデンおよびノールウエー

ゲン国王陛下より、同国と日本国との和親并ニ商法条約
取結の儀ニ付、委任を請し事を、余貴下ニ大坂出帆前、
第三月廿九日書簡ニ而報告し、而して此条約取結の事ニ
付、談判シ給へる目代を

御門陛下ニ而命シ給ふべき処置を余貴下ニ願ふたり、去
第五月廿日、当港ニ而余此の大事件ニ付、陛下の長官東
久世中将并ニ肥前侍従と面晤セリ、而して、
(通徳)
(鍋島茂実)

御門目代任催促すべき旨、急速貴下ニ書き送らるべき趣
を余ニ約束されたり、

既ニ大坂より屢船入港すと雖も、王国スウエーデンおよ
びノウルウエーゲント日本国との和親并ニ商法条約取結
の事ニ付、余が願ひの返書を今もつて落手せず、而して
此条約取結事ニ付、誰れが日本目代ニ命じられ給ひしや
を余ニ報告し給ふべく、余此書を以て、貴下ニ謹而願う
榮を得たり、

千八百六十八年第六月四日

金川

在日本和蘭
ポリチーキアゲント兼
コンシユルゼネラル
ドデガラーフ・ブン・ポルスブルック
手記

皇
宇和島太守
伊達伊予少将台下ニ

文書原寸 縦一七・六種 横一一五・五種

一八四 三条実美ヨリ大久保大藏卿へ

昨十四日廢藩置県ノ件

今般廢藩被

仰出候ニ付、別紙之通至急御布告相成、可然遂評議候間、
其省へ打合申候、明朝返答承度候、艸々如此候也、

七月十三日

大藏卿殿

実美

文書原寸 縦一六・五種 横二一・五種

恐惶謹言、

一八五 三条相国ヨリ大久保参議へ

寺島宗則ノ件

孤雲之趣承候、如來翰尤ニ存候、左候へハ寺島之処ハ無
拋義ニ付除置、八字参朝可有之候、仍此段申入度如此候
也、

七月卅一日

実美

大久保殿

文書原寸 縦一七・二種 横三七・一種

〇八六 薩藩置県ニ付久光公へノ上申

氏名不明

桂、大山綱良等ノ意中ニ就テ

一八七 薩藩置県ニ付島津家ノ旧恩ニ対スル赤誠披

瀝ノ願書

去ル巳年 御変制之節、

君臣之名目は相離候得共、正敷 知事之 御奉命被為

在、万事之 御指揮ヲ奉仰、於情義従前と相変訳無御座、

聊安心仕居候処、今般郡県之制ニ被 召替候ニ就而は、

君臣之名実全ク廃絶仕、追々は東京 御住居ニも可被為

成、時勢とは乍申数百年來奉蒙 御養育、一朝にして分

離仕候儀、千万難奉忍至情ニ御座候、不肖之私式、人ケ

間敷奉申上恐縮之至ニ御座候得共、子々孫々永ク 御門

下ニ罷在、御奉公申上度存慮御座候間、其式ニ至り候ハ

、 御内々貫籍ニ被召加被下度奉願候、乍恐微衷被

聞召下奉願候通、御免許被成下候様奉哀願候、誠恐誠恐

頓首、

明治何年何

何某

文書原寸 縦一八・二種 横九一・五種

一八八 斎藤貞蔵ヨリ朝廷へノ建言

天下中賢徳賢才御精撰方法

(表紙)
「天下中賢徳賢才御精撰方法建言稿本

写」

謹而奉申上候、度々犯尊嚴、遼東豕之鄙言、御飽饜ノ程如何ト恐縮ノ至御座候得共、御維新トハ乍申、戰爭後御倥偬中ニ付、御人撰御詳密ニハ未タ不被御行届候乎ニテ、兎角戦功ノ方々大官ニモ被為任候処、廟堂ノ政ニ不堪共戰場ニ勇猛ナルモアリ、戰爭ニ勇強ニテモ廟堂民政ニハ不協モ有之候、人々ノ長短得失ニテ難誣候処、偶治乱一致、有用ノ人ハ指ヲ屈候程無之、別而本邦久平、奢侈ノ風宇内一般位ニテ至テ鮮候間、今日ニ至リ仁義忠信牧民ノ人ニ無之候テ、永治ノ政ハ不出來儀、別シテ外夷覬覦猖獗ノ中、安富尊榮ヲ全フスヘカラサル時世ニ候得共、

上御一人サイ御賢明被為入候得ハ、人撰所カ万機悉ク掌リ、億兆心服仕儀ニ付、百官手ヲ拱シ、命ヲ待而已ニテ足リ申候所、当今

主上ニハ兵馬御交錯中ノ御即位ト申、其節ハ未タ御幼冲御同様ニ候得ハ、追々ニハ御春秋モ被為加候テモ、師傳輔ノ官モナク、只御性ナリ位ト奉感激、昨巳年十月

主上御賢明ニ御陶成申上候、極捷徑御手輕ク安々ト御飯御茶ヲ召シ上リ候如キニシテ、聖經数百万言ノ模範ニ入ラセラレ、イツトナク御賢明ニ被為成候方法、大秘伝ヲ建言申上候得共、戦功ノ方々ニ付、御詰問モ無之、又御報ハ猶更ニテ、井中石ヲ擲シ如クニ付、是非天下ノ賢才御公擢、廟堂民政トヲ御委シ無之候テハ、外洋ニ対峙所ニ無之、卒ニハ彼ノ正朔ヲ受ケ、國債重積、歳幣ヲ輸スルニ至ルヘシト、不顧恐、人撰方何程ノ才力發明ノ人タリ共、決シテ化ケ遂ケ不申方ニテ、入札トハ余程違ヒ申候半ト奉存候、

一人撰程六ケシキモノハ和漢共ニ無之、古人已ニ聖学程好キハ無之所、奸人聖学ヲ以テ主ヲ欺キ、兵武ヲ好ミ候エハ兵武ヲ以入り、詩文ヲ好ミ候エハ詩文ニテ入候間、当今ノ如ク洋学御好ナレハ洋字ヲ以テ入ルト申ニ付、況ヤ奇技淫巧ヲ好ニ於テヲヤニ御座候ハ、奸吏猾人ノ常態ニ付、中々難見破、多ク誤撰謬拳ノ患アル所ニ候、聖人嗚呼人ヲ知ルニ在ト仰ラレ、孔子スラ言語

ヲ以テ人ヲ取ニ、之ヲ宰我ニ失スト、又容貌ヲ以テ人ヲ取ル、是ヲ子張ニ失スト仰ラレシ程ニ付、中々奸人ノ化ケ方ハ殊ノ外上手ニテ、逆モ尋常ニテハ中々化ケノ皮不露候エ共、賢明ノ人ヲ得ス候テハ、逆モ国天下ハ不治ラ候、中庸ニ、其人存ス、其政挙ク、其人亡レハ其政熄ト被仰候程ニ付、是非賢哲御求ノ儀、飢渴ノ飲食ヲ求ル如クニ御求メ無之候テハ、賢哲モ亦集リ不申候間、專ニ御尽力ヲ奉仰願候、

一 第一日本中エ御布告有之、左ノケ条々々々ニ見込有之輩ハ、華士卒族ノ外ニモ、農工商如何ナリ共、身分ノ高下ニ少シモ不拘候間、可成早々出京、某省某所江出頭何県管轄何国何郡何村誰ト明細ニ認、宿所モ屹度相分リ候様可相達候、

右出頭候ハ、左ノ九ケ条書ヲ相渡シ、出来次第差出シ候様申渡ス、

但付副人等一向不入、只管轄江申立、鑑札体ノ物持来ルヘント初ヨリ布告ス、

一 右見込書出来持参候ハ、考官受取、追テ可呼出旨申渡帰ス、

一 布告ノ節、人才御撰ニ当リ候ハ、判任・奏任・勅任迄、才徳次第可被仰付旨ヲハ詳密丁寧ニ布告スヘシ、

見込書科目 (付箋)
「此九ケ条ハ席上対策ノ題名ニ御用、初出ニハ只御國家御為筋見込書、十分ニ認出シ候様ノ方、可然奉存候」

一 第一聖学校立法、如何スレハ宜キ并人才陶成ノ法如何カ宜キノ事、

一 第二廟堂上并諸省規則ノ可非ト闕失否ヤノ事、

一 刑法并公事訴訟・禁邪摘奸ノ要法ト闕失有無ノ事、

一 第四牧民愛養ノ本末ノ事、

一 第五勸農力田地力竭尽ノ良法ノ事、

一 第六外国夷情交際方法、彼ニ致サレサル方ノ事、

一 第七川々水理水行・河心ノ順逆、兼テ隄防闕損得失

ノ事、

一 第八開拓・地味・物産・植物、富国ノ方ノ事、

一第九季世人情輕薄、父母ニ孝ナラス、夫婦恩少ナク、人倫不典、風俗甚不宜ニ付、風ヲ美ニシ俗ヲ厚フスルノ方ノ事、

先大凡如此位ニテ可ナランカ、此他其人ノ器ニ応シ、量ニ随ヒ、考官之ヲ可斟酌事、

右条件ノ内、一条ニテモ数ヶ条ニテモ、十分見込可申立、參着ノ節申渡スヘシ、

一右御布告相成候ハ、東京ハ勿論、其他遠近一能之者モ群參可仕候間、其面々ノ見込書十分相認差出候様被仰付事ニ候、尤其以前、右甲乙吟味ノ考官、少クモ四五人可被仰付置候、此ハ御人選如何ニモ肝要ニテ、国家治安ノ全道ニ達シ、廟堂并ニ郡県治体、外国夷情、訟獄情偽、海陸兵意迄モ略貫通仕候者ニ無之候テハ、其人ノ賢否正奸、国弊ノ憂否忠不勇怯、瞭察仕兼候間、先コノ人撰不容易難得コトニ候、此考官、其人ヲ不得シテハ、此全策水泡ノミナラス、謬拳御座候得ハ、大ニ廟政ヲ誤リ、入札ニモ劣リ候儀ニ付、尋常ノ人ハ、

考官撰択ノ任ニ難耐候間、是而已ハ廟堂真御公評ヲ尽サセラレ、考官ノ上ヲ出テ候程ニ無之候テハ、必不出來コトニ候間、前以御預撰被為有、考官ノ人撰相濟候上ハ、考官ノ長トカ筆頭トカ被仰付程ノ御評議ヲ以、其御一人ハ御登庸可被為有、其撰一人サヘ其任ニ堪候得ハ、跡考官数人ハ、其一人ノ撰ヲ重責イタシ候間、大ニ御省慮ト奉存候、

一扱其群參ノ輩差出候見込書ハ、勿論一々応接モ仕候上、考官熟覽ノ上ニ、其曲直ノ外ニ宜キ分江、甲乙丙丁ノ印ト評議付ヲ付ケ、夫ヲ一々御展覧ノ上、御採用可相成、可否ヲ考官江御直評ノ上、其善キ物江各書ニ小札ヲ以テ甲乙其外小記シヲ付、考官ニ御下ケ、考官直ニ一箱ニ入レ、其通り一々位付、小印付置、猶又日ヲ扱ヒ、別段ニ其面々ヲ人数混雜ナキ程ニ御呼出シ、其輩不存寄前文九ヶ条ナリ共、見込書ハ科目ナシニ、面々勝手次第、御国家御為筋申出サセ候モ可ナランニ付、右九ヶ条ニモ限り不申候ノ間、何成共其日ノ御題目名

義被相出、席上ニテ筆紙被相渡、対策被仰付、尤鑑察
体ノ官出席ニテ、面々席ヲ犯シ、何レ江カ同席スルカ、
其外非法ヲ警戒セシメ、書面对策出来次第、考官江差
出シ、勝手次第退去為仕候事、

但シ、対策出来ノ遅速ハ、時計何時何十分ヲ一々名

籍下ニ記置、後日其才ノ優短ヲ参考ニ供フ、

一 席上認書ト最初ノ見込書ト、格段意味得失相違候ハ、
人頼仕差出スモ難計ニ因テ、廟堂并諸省其外各所県々
江臨ミ、大害不少候間、考官猶又曲直ヲ応接、懇到詰
問シ、弥不束ニ候ハ、伺ノ上落第可被仰付候、乍去
言語文字不束ニテモ、廟堂郡県ニ付、憂國ノ志厚ク、
寡欲廉正体ニ候ハ、県治ニ可用ニ付、行実シラベ方
ニ被相廻候事、

行実調方

一行実調方ノ儀尤肝要ニテ、先見込書并席上対策共ニ見
ルベク、問然無之候トモ、当世別シテ文辞応答無間然
ノ優才奸雄、其外篤実郷愿ノ大化ケ者不少候間、是非

其行状ヲ御探索有之、言行相違仕候テハ、官ニ臨、政
ニ害アリテハ不相成候間、行実調方真密行届候ヘハ、
大小ノ化ケ物悉ク尻尾ヲカクシ兼候ニ付、調大凡左ニ、
一 県々ノ管轄所江被仰付、何某ノ義、左ノケ条ノ内、
是非得失探索、具ニ可申上旨被仰付候事、

一 父子ノ間、孝慈否ノ事、

一 夫婦ノ間、恩愛否ノ事、

一 伯叔兄弟友悌、可否ノ事、

一 朋友懇意ノ人物、正奸賢愚否ノ事、

一 婢僕召仕、惠恩苛寛否ノ事、

一 飲酒酗否、喜怒輕重否ノ事、

一 翫好并女色深淺、且金銀遺方正非否ノ事、

右ケ条書ヲ以御尋問探索被仰付、御答書御取ナサレ、

猶又同時鑑察使ト隱密使ト被仰付コトニ候、政者治國
ノ根本ニ付、御撰法ヲ以ストモ、又件々曲折表裏ヨリ
シテ御細探相成候ハ、正邪直奸、悉ク隱惡闔門内迄
發露仕候儀ニ付、最初ノ見込書ト対策ト御照合セ相成

候ハ、人奚クンゾ腹サンヤト明白ニ相知レ可申候、
兎角正人ハ少ク、奸人多キ内ニ、正人忠臣ニ化ケ居候
者甚沢山ニテ、先十人カ九人迄大化ケ小化ケニ候間、
考官力ヲ尽シ誠ヲ尽シ、蔽且密細ニ行実御探索、表向
キ鼎ヨリ鑑察ト又隱密使ト三重ニ相探リ候ハ、真ニ
前文聖語ノ人、奚クンゾ腹サンヤト奉存候、是考官ノ
大任、賢愚徳奸ノ判然仕処ニテ、奸邪化ケ者ノ擯斥ヲ
免レザル所ニ御座候、

但シ何人ニテモ、此通り内外表裏ヨリ御改メニテモ、
間然ナキ人ヲ先第一等ノ人物ト仕外無之、是ニテモ
至テ少ク多カラスト奉存、是以上ハ本領全備、廟
堂・刑獄・民牧・夷情得失・兵事ハ外夷ニ超越ニ候
処、是ハ天下一人共可申ニ付撰科ニハ不申上候得共、
若有之候ハ、御国家ノ幸甚ト奉存候、依而此間然
ナキノ人ヲ首トシテ、其次々々ト位ヲ下ケ、御許容
御任用無之テハ、天下幾千人御用ヒ不叶ノ所、可用
人不足ヤフ相成候間、古語ニ申ス通り、備ルハ只賢

者ニノミ御求ニテ、小過ヲ許スト申ニナケレハ不相
成候得共、其許スニモ難許ハ、苛酷多欲貪吝ノ人ハ、
廟省并民官ニ決シテ大害ニ付御断絶ナサルヘク候、
寡欲廉正ノ人ニ候ハ、酒僻又ハ短慮暴怒好色等ノ
儀モ、事ノ輕重深淺ニヨリ、其心術サヘ大奸ニ無之
候ハ、政ヲ害シ民害風俗ヤブリ不申ケ条ハ御許シ、
大小器ニ応シ御撰用可被為有候、前文小過ヲ許シ、
賢才ヲ挙クノ聖意ニモ叶可申候、其上ニモ金銀ヲ可
リ候吏人ハ、挙主連座ノ法ト申テ、推挙ノ人其人ヲ
請合、万一私欲押領其外大罪ヲ犯シ候ハ、本人同
ヤフ同罪ヲ甘ンジ可蒙旨、結狀ト申テ証文ヲ為上候
法ニ御座候、是唐ノ太宗、宋ノ太祖ト申兩明君ノ治
法ニ御座候、如此ニシテ、官員大小共被仰付候ハ、
引負贓罪決シテ無之ト奉存候、賢徳賢才御撰用ニ相
成、是サヘ十分御行届ナサレ候ハ、日本ノ広大無
窮トハ申候テモ、懷手ニシテ大治大平無疑ト奉存候、
一御撰挙御成就ノ上、面々官ニ趣キ候ハ、東京中ハ猶

更、県々江鑑察一人ト隠密使一人宛ト日本中江可相付

候、其内隠密使ハ姿ヲ変シ候間、鑑察ト同月給ニテモ

却テ難渋ト奉察候、猶実地御検査ノ上増減可相成候、

御人撰ノ上本県御探索、又鑑察使・隠密使迄ハ余リ入

念ニテ御入費不少ノ議論起リ申候半ノ処、日本中ノ治

体ニ関係仕儀ニ付、廟堂并要官民令等悉ク

聖主ノ御手代リニ付候テハ、広大ノ天下ヲ掌ノ上ニ視ル

如クニ無之、決シテ真ノ治安トハ難申候、

一租税ノ儀ハ、昨年大蔵省ニ御合併ノ所、毎々申上候通

リ、以ノ外ノ儀ニテ、大蔵ハ専ラ聚斂ヲ主トシ、民力

ハ愛養主トスル故、毒ト薬ト併用ニテハ、更ニ治体ノ

梟絶ニ付、早々民部ヲ御復シ、浅草御蔵迄ハ民部掛リ

ニテ、西京・大坂同ク三府共、御蔵場ニ於テ大蔵省吏

人江引渡シ候儀ニ無之、牧民ノ

聖主御職掌難被為立大事件ニ御座候、猶曲折口頭可申上

候間、何様ニモ御詰問可謹承仕候、稽首再拜、

未年七月

齋藤貞蔵藤原簡

再拜

某官某様
閣下

冊子原寸 縦二四・八釐 横一七・二釐 九枚

一六九 西洋諸国殊ニ支那国情偵察ニ関スル政府へ

ノ建言別啓

筆者章トアリ

別啓

徳川氏ノ政柄ヲ還スヤ、海外各国ト並立スルコト能ハ
ザルヲ以テ也、伏以 中興以来、屢宣布スル所ノ

皇威ヲ海外ニ輝シ、東海ニ卓立セントスル 詔勅拝読ス

ル毎ニ、難有 聖旨ト今日マテ刮目翹首シテ待ツコト、

已ニ四年ニ及ベリ、廟謨深遠、浅人ノ測リ知ルベキニ

非ストイヘトモ、今日マテ

皇威ノ海外ニ輝キシ所以ヲ見ス、外夷交際ノ事件、一ツ

ニ徳川氏ノ旧規ニ依ラザルハナン、天下ニテハ、動モ

スレバ外夷ノ侮蔑ヲ受ル、徳川氏ノ時ヨリモ甚シト、

臣窃ニ道路ニテ此説ヲ聞テ憤懣ニ堪ヘズ、愚案スルニ、

海外ノ形勢恰モ彼周末戦国七雄ノ相争フ時ノ如ク、大ハ小ヲ吞ミ、弱ノ肉ハ強ノ食トナル、然レトモ一人鄭子産ノ如キ者其間ニアレバ、弱國小邦トイヘトモ、並立シテ侮蔑ヲ受ケルニ至ラズ、然レトモ是レ並立ノ論也、苟モ真正ノ大英雄勃興スルアレバ、小ヲ以テ大ヲ并セ、弱ヲ振テ強トス、抑洋外各国ノ我 皇国ヲ環視シテ隙ヲ窺フ者、魯西亜ヲ甚シトス、是レ先儒ノ屢論セシ処也、然レトモ章又別ニ一ツノ杞憂アリ、方今支那・朝鮮ト我国トハ、所謂唇齒ノ国ト称ス、然ルニ朝鮮ハ衰弱シテ固陋ノ小邦、言フニ足ラズ、支那ハ幅員甚タ大ナレトモ、衰弱モ亦甚シ、其衰弱我国ニアツテハ却テ大幸ト謂ベシ、其故如何トナレバ、若シ万一、此ノ衰弱ノ際ニ当ツテ、英主勃興スルアレバ、必ス彼衰弱ヲ軫シテ盛強ト為シ、九州ヲ混一シテ後チ、我国ニ向テ鼎ヲ問ハントスル胡元忽必烈ノ如キ者ナカランヤ、抑天数ヲ以テ考ルニ、彼土必ズ二百年若クハ三百年ニシテ其命革ル、革命ノ時必ズ大豪傑勃興ス、今其

数ヲ以テ考レハ、即ニ二百年也、彼唐太宗・明太祖・忽必烈・愛親覺羅氏ノ如キモノ出ルノ秋也、若シ果シテ此ノ四主ノ如キ者出テハ、必ズ彼土ヲ席卷スル勢ニ乗ジテ、我邦ニ来寇スベシ、今ヤ船艦ノ制開ケ、航海ノ術精シキコト、又胡元ノ時ノ如キニ非ス、是レ章ノ甚タ憂ヘ且ツ懼ル所也、然則為之如何、曰ク、上策ハ自ら治ルニ如ク無シト、牧生言万古不易也、其次ハ間諜ヲ投シテ、其情実ヲ探索シ、預備ノ策講究スヘシ、且ツ其乗ズベキ虚アレバ、我ヨリ之レニ乗ズルニ如カズ、其間諜ハ先ツ書生数名ヲ彼土ヘ遣シ、遊學ト称シテ彼土ヲ歴遊シテ、其地理風俗ハ勿論、彼土ノ人物民情ヲ訪ヒ、英傑ノ士ハ強メテ延攬結納スベシ、彼猶未タ京城ニ入ルコトヲ許サズハ、學識アル僧侶ヲ遣スベシ、近来彼土ニ遊ヒシ僧侶ノ言ヲ聞クニ、他邦ノ人ハ北京辺ヘ入ルコトヲ許サズ、但僧侶ハ彼土ノ法衣ヲ着シ、彼土ノ浮屠氏ニ混シテ俱ニ遊ベハ、何ノ処マテモ遊ブコトヲ得ルト、昔シ胡元ノ我ヲ図ルヤ、僧寧

一山ヲ我ニ投シテ、其虚実ヲ窺ハシム、此策今日襲用
スベキ也、廟堂若シ章ノ言ニ意ヲ留メラルレハ、章寧
一山其人ノ如キモノヲ薦メントス、猶章カ不敏ヲ棄ズ
ハ、謹テ其命ヲ奉シ、彼土ニ赴カントス、彼ノ西洋各
國ノ情実ノ如キハ、尤探索詳悉シテ、之レヲ駕馭スル
ノ道ヲ講究スベシ、是実ニ当今ノ急務也、駕馭ノ策建
タザレハ、焉ソツ、

皇威ヲ海外ニ輝スコトヲ得ンヤ、苟蕘ノ言ヲ棄ズハ、章
別ニ論著シテ進呈スベシ、

辛未仲秋初五

冊子原寸 縦二七・八種 横一九・三種 三枚

1200 桂四郎ヨリ西郷隆盛へ？

廃藩置県ノ件

尚々、当県役人ハ悉く御引揚相成、当分ハ四人相残
リ居候得共、橋口殿ハ病氣、大迫ニハ少々訳有之、
暫時差扣、是ハ近日中ニハ出勤可相成候得共、大山

と兩人ニ而相勤居、乍毎留主番難儀ハ引請難有奉存
候、以上、

仍幸便一輪御呈上仕候、未秋暑難去御座候処、弥御安
清被成御奉職奉珍重候、於爰許愚生ニも乍漸致消光居
候間、御放意可被下候、然ハ此節伊地知殿出京之趣意
ハ、当人より巨細御聞取可被下候、先便申上置候通、
此節ハ殊之外御安堵之御模様と奉伺居候処、何か様其
後邪氣侵入候半、俄ニ御気色相変、左右医師、女中辺
江散々之事共致到来、我々共罷出候儀も御差止ニ相成
当惑之至ニ御座候、其御趣意と申ハ、当藩出頭之面々
も不少廃藩之議論相起候ハ、藩ニ対し其論ハ藩ニ関
係之訳を以、逃て可然、さすれハ廃藩ノ場ニハ決而不
至、又参事共ニも只うかとして少も憂る形ニも無之、
随分尽し様も可有之抔散々之御模様ニ而、所謂人面獸
心国ヲ売るものと思召可有之哉、伊地知は出府之儀も
悖て出る様ニ而ハ不相済訳と、先時機見合、都合も可
有之と差扣置候処、右通之仕合ニ而不得止上京ニ相決

し申候間、万端被仰談被下度奉願候、当分之様子ニ而ハ格別動揺之形とも不相見候得共、九月中知事公御進退ニ仍而ハ、決而動立可申ハ案中ニ被察申候得共、只今之処ハ兵隊辺ニ而兎も角維持いたし居候形ニ御座候、旁御推計可被下候、

一此度御変革ニ付而ハ、御所置ニ仍而人心之方向も相立事歎と被存候、鹿兒島を初外城ニ至ル迄、皆兵を以、今日人心之方向ヲ相定メ維持いたし居候事ニ而、兵賦より兵か余ると申て解隊共相成候ハ、とても致方ハ有之間敷、尤御当地ハ学校ニ而子兵輩ハ漸々競ひ立、是ニ而結び付居候事ニ而、此式ツヲ丸々被解て、是迄の県と被成候振合ニ兵被召成候ハ、丸々互解ニ相成、随而人氣も紛乱、且氣立も更ニ無之様罷成可申哉と存申候間、何卒能々御評議被下度奉願候、益兵隊辺之処ハ御繰立之勢ひニ無之候而ハ、兵隊之人氣ヲ相損し候而ハ、もふハ致様ハ無之賦ニ相考居申候、太政之役人ハ、必僻土之事ハ余所ニ相成と歎、当分之人情とやら、

伊地知殿江もしかと及談合居候間、能く／＼御聞取可被下候、其外何もいち／＼氏より情実ハ御聞取能々御頼申上候、

一只今より奉願置候、甚未練之者と思召も可有之哉ニ被存候得共、御案内之通之情実、能々御決取置可被下候而ハ、不相叶儀と奉存候間奉願置候、愚生儀ハ全体身弱ニ而、今日之事さへ甚難渋いたし居候得共、昨年既ニ国ヲ被取候危難ニ趣候付、一先尽力可致との御沙汰致承知、乍不及御引出ニ仍而罷出居候処、最早国も被取、依然としてハ不被居情合ニ罷成、尤御案内通、朝官辺之事ハとても不堪ハ基より、君公ニもちかひ置候末ニ御座候得は、此一事ハ申迄も無之候得共、能々御舍居可被下候、尤当職迄ハ押而相勤居候得共、大参事と歎申辺も御請出来兼、其下之卑官共ハ未年輩もはる／＼の事御座候得は、県なりとも君公ニ成共、随分相尽し度所存ニ御座候、尤君公より致承知候事件も有之、退而遁世相当之身と相

決し居候私ニ取候へハ、此儀ハ生涯不被忘一事ニ而、
 心中御察可被下候、尤此節之如く、宮中之次第尚更御
 意恨ニ思召候ハ、第一我々共ニ限リ候半欵と存候へハ、
 一入恐入罷在候間、能々情実御汲得被下候而、何卒君
 志安んし候様ニ奉願候、尚申上度儀ハ山々御座候得共、
 俄ニ出艦之模様承、於庁相認不能細事、先ハ時季御伺
 可申上如斯御座候、恐々敬白、

八月十七日

桂 四郎

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第七卷第一六〇号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・四釐 横二七釐

二二 久光公ノ弁新封建論

郡県説ヲ駁ス

弁新封建論

首条、天下ノ勢云々朝廷ニ取ル所ニ非スニ至ル、

是問ヲ設ケン言ナガラ、至当ノ論ト云ベシ、理ニ達セ

ズ、勢ニ明ナラズ、紛然更作、天下ヲ一新セントスル、
 鹵莽滅裂云々ノ言、自ラ其アシキヲシレドモ、当路ノ
 姦人ニ阿諛シテ吐出セシナリ、殊ニ王安石云々ノ説、
 緊要ノ言、方今要路ノ官人戒慎スベキコト弁ヲ待ズ、
 周公ノ制ヲ以、後世尾大ノ患ヲ拒クコト能ハズ云々、是
 政ノ罪ニシテ郡県ノ罪ニ非ズニ至ル、

(奏)

周家八百余年ノ基業、暴秦二世ノ滅亡、善惡明亮、誰

カ是ヲ知ラザラン、殊ニ政ノ罪云々、遁辭ノ甚シキ也、

政ノ罪ハ封建郡県差別アルベカラズ、上ニ仁政明ニ徳

威盛ナラバ、イツレニシテモ事拳ラザルハナカルベシ、

洋癖ノ迂説、可笑、

北条氏之賊云々、封建ノ勢未成ニ至ル、

此時代ハ方今諸藩ノ如キニアラズトイヘドモ、我藩モ

已ニ三世ヲ経タリ、豊後ノ大友、筑前ノ少弐、伊予ノ

河野等ノ豪族アリ、封建ノ形ニアラズト云ベカラズ、

北条時宗ハ鎌倉ニ端座シテ兵ヲ動かサズ、九州・四国

土着ノ武士ニ令シ、蒙古二十万ノ軍ヲ拒ク、是土着武

許コロリ病大流行ニ御座候、御国許如何御座候哉、
御たつね申上候、且東郷様へ之御状、早速御届申候
間、さやう御心得可被下候、

貴札相届忝拜誦仕候、愈以無御替御壯健被成御座大慶ニ
存候、随而私ニも無異罷在申候間、乍憚御休意可被下候、
さて一周之御懐旧御述懐之御儀共繰返し御談仕、誠ニ感
恭至極ニ存候、私ニも頻りに忍られ、甚き様之次第御座
候、尤木平氏等へも節々御取会之由御喜敷存候、其御地
義相変行、爰許之形勢中々のし不申事ニ御座候、如仰於
爰許も、只管愁^(歎)單つかれ申候、見聞も甚不具義御推察可
被下候、且雲上之御儀、是又何共歎息至極之次第ニ而甚
憤激不少候、如貴命、先々謹慎第一之時節、いか様御遠
慮可申上事御座候、追々長・肥之噂分も罷成申候儀、雅
会之御催しも弥御念可有之候、追々御左右承度御座候、
先ハ御礼答旁々為御窺、乱筆を以如斯御座候、猶又時候
折角御自養專一奉願候、恐々謹言、

養田主税

未八月廿九日
檜廬屋之
正名雅兄
人々御中

文書原寸 縦一六・二種 横六八・三種

〇二〇三 久光公分家ノ朝命

一〇四 岩倉具視卿より島津從二位へ

久光公之上京を促す

(包紙ウツ書)
「島津從二位殿 具視

緘 平安 一

秋冷之砌弥御安全欣然、併兼而御持病如何ニ哉、尚承り
度存候、然は去冬巨細之
聖旨申進候通ニ而、今更喋々不待論、

皇国前途之興廢安危へ、則薩長土之三力ヲ御依頼被遊候
中、於閣下は故薩摩守殿之御遺志御紹述、天下ニ先チ大
(島津奇形)

義唱エ、身ヲ以而難ニ当リ東西奔走、終ニ復古ノ典ヲ被
挙候御勲勞、誰カ其右ニ出ル事ヲ得ンヤ、故ニ今度頻リ
ニ御欣喜被為在候処之御誠意、随而三条・小生等カ請求
する哀情も、豈ニ閣下ニ私すると言んや、兼而当秋迄御
猶予期限之事ニ候ヘハ、果し而一言之重を御表信、且前
条不容易

天意ニ被為對、御出京之御報知、三秋之憶ニ候処、今ニ
御様子不相分、僕ニ於而は蒙命之任も有之、今日ニ相成
候而ハ実ニ茫然之仕合ニ候、自然此度ハ御出京之事トハ
存候得共、前件御汲量有之、暫時也共是非御拜趨有之度
千祈万禱仕候、追々御承知之通、

朝廷上之御模様大に御變革、殊ニ廃藩之令なとハ、五年
十年を期したる事ニ候処、時運之機循環する所以か、一
体之勢よりシテ意外之御運歩と相成候、私情を以而論す
れハ、何とか御挨拶可申様も可有之候得共、即今日新聞
化之世態ニ推及候上ハ、結局此ニ至ラスし而ハ不相濟事
ニ而、

皇國之為ニハ可賀之至ニ候、是畢竟封土返上等其基を御
開キ有之候御至忠よりして、実蹟今日ニ挙り候訳ニ而、
天下始而公平なるを知り、耳目も一新致候勢ニ候、僕等
ニ於而も益御精忠之程感佩仕候事ニ候、尚細敷ハ従家扶
可申入と存候、仍早々如此候也、

九月十三日

具視

島津從二位殿

追而、何分旧冬奉

勅出頭之末、小生ニハ実ニ苦心罷在候次第、何卒此
彼御遠察、呉々も速ニ御出京之処、懇願此事ニ候、
早々、以上、

文書原寸 縦一八糎 包紙原寸 縦二六・五糎

横一七八糎

横 三九糎

一五〇五 渡辺重石丸ノ真教説源付録

一冊

一九〇五ノ一

真教説源序

天有主宰、猶國有君主、國之君主不一、則法令支吾、制度無繆、天之主宰不一、則日月失度、寒暑愆序、是理之易見者也、知國之君主不可不一、則天之主宰不可不一、亦可推而知也、已有君主、不可無臣、臣有諸司百官之別、以各理其職、天之於物、亦復如是、大之日月星辰、小之門戶井竈、皆有其神、以分掌其事、是亦理之不可疑者也、理之不可疑如此、而不信、豈非惑之甚者耶、世之奉耶穌教者、徒知一主宰之在天、而不知有群神之在其下、是猶知有國君、而不知諸司百官之不可無也、今之主張神道者、盛稱諸司百官之功、而或置君主於度外、凡如此者、滔滔皆是、則我之擯耶穌、耶穌之排我、孰知烏之雌雄也、余有慨於此、曩著天御中主神考、以弁一君主之德、今又著此書、以明諸司百官之義、夫一神之德、覆幬無外、明明不可誣、如彼、群神之功、各各雖殊、悉統轄於一神、如此、則其功其德、豈可須臾忘乎、語曰、獲罪於天、無所禱、嗚呼世之志於正教者、苟存閑聖息邪之意乎此、則其勲勞之偉、奚翅不獲罪於天而已也哉、

明治五年壬申正月十五日 渡辺重石丸識

文書原寸 縦二五・五權 横三七・五權

一九〇五ノ二

〔表紙〕(朱)

〔草稿〕

真教說源付録

真教說源

付録

君民同治

近頃洋説に、世界万国の政体の得失を論して、種々の言挙あり、其か中にも、君民同治といふ事を、最上の政とせり、然るに、我か皇大御国の御政体はしも、君民同治の意に叶へる御政体なること、余たしかに發明し出せり、因て先ッ洋説を挙て、而後に其の所以を弁せむとす、

第一君主擅制 君主ノ權、限制する所無く、天下万民を

擅制して、生殺与奪の権、其欲する所に任ず、其命令する条理に背くと雖、国民之を如何ともする能はず、是現に君主天下を私有する者にして、亜非利加の諸邦及び内地の各処等、此制を用ひ、現に蛮夷及未開の国に行はる、第二君主專治、前者と大同小異ありと雖、慣貫の久き、自ら法律となりて、稍君主の権を限制す、然れども、天下万民を以て、君主政府の私有とするに至ては、其帰一なり、

第三君民同治、君主上に在て、万民を統轄すること前者と同じと雖、敢て天下を私有する事無く、必ず公明正大の憲法を確定し、国民をして、国事に参与するを得せしむ、西洋諸国皆此制度にして、文明開化の国に行はる、之に勝る政体無るへし、

第四貴顯專治、国中の貴族故家等、門地門閥を以て、累世政権を掌握す、如此国体にては、合衆政治に近しと雖、其実は、君主專治と異なること無し、

第五合衆政治、血統の君を立てず、国内貴族平民の區別

無く、有徳の君子を撰ひ、多くは年限を定めて、万機を統轄せしむ、之を大統領と号す、其他概ね君民同治の政体と同じく、憲法を確定して、政令之に則らざる無く、国民皆国事に参与するの権を有す、亜米利加合衆国の如き、即是なり、

予謂、右に挙たる西洋説は、正理に合へる論なり但し如此西洋に溺れたる如く思ふ人も有るへけれども決して左に非ず心を平にして、下条に論ぶを見るへし、然れども、満天下の洋学者、漢学者は勿論、皇学者までも、深く上代の古伝を確信して、天御中主大神の大御心を心とする者は、百人モ、百が百人には無れば、必ず第一条なる君主擅制などを以て、皇国の古道と思ひ、君民同治及合衆政治などをば、洋人の新發明と感服して、畏くも天皇命スメミコトを軽んじ奉る者あるに至らむか、さるは漢学者・洋学者等は固より、己か腹を外国に委ねたる者どもなれば、民ありて君ある事を知らざるは論アンツラふまでも無きを、皇学者と名告徒も、多くは先哲の成説に雷同して、別に一機軸を出すことを知らず、徒イダラに外国を唾罵するのみ大和魂と心得居る

者、十に七八は皆其ソレなり此事は、先師も深く、是を以て、一旦右の如き、西洋の精説を聞ては、忽然タテマテ心酔して、吾が皇国固有の大道を、固陋よ頑固よと嘲り笑ひ、平生カネて学ひ得し學術も、翻然としてこれを仇讎とし、賤しみ厭ふに至る者、世には尙少ハナクからず、否シカざる者は、理も非も弁知する程の眼無くして、所謂犬吠に、西洋を罵り吠る迄なれば、徒らに学者の固陋を、世に鳴渡らしめ、益々皇道湮晦の基を開く徒トモどもにて、実は吾道の罪人なりけり、抑我か皇大御国の道は、然る浅々なる高天原学者の皮膚を看過したる如き、粗漏の浅道にも非ず世の皇学者徒、大抵は古事記伝、古史伝のみを株守して、道の真面目を知らざる、者衆し、是全く故先生等の大志の何物たる事を知らざるか故なり

また、西洋学者の新発明と誇言イヒホコらひて、渠が君道の本意を論ぜし事の、理に当るるに庄倒せられて、吾か御国の光を失へる如き、濛昧の道にも非ず、即ち右に拳たる洋人の論ぜし五の政体どもは、悉く吾か広げき皇道の中に籠絡コソロクて、一箇だに洩るゝ事なし本居翁の歌に「祝迎孔子も、神にし有れば、其道も、広げき神の道の枝道」と詠れたる如く、詳説にまれ、但し我か上古の政体は君民言は、悉く吾か皇神の道の枝道と心得へし、但し我か上古の政体は君民

同治の法制とも云ふべきさまなる、何を以て云ふぞなれば、先事は、猶下に委く論ふを見へし

ツ天地開闢の最初に当て、天御中主大神の大御心として、高皇産霊大神、神皇産霊大神、二柱の神をして、天地を鎔造せしめ給へり、此三神は、即俗に所謂造化主なり

古事記序に、乾坤初メテ分ル、トキ、さて造化主の神勅を以て、參神作造化之首と有るを想ふべし

男女二柱大祖神オホミヤガミの、国土を經營し終給ひて、天地万物の首たる青人草を生給へり、是れを人種の淵源とす此事、真第二章なる、人種初生の事、アフトクサとある条と合せ考ふべし

斯て人、民を生給ひつゝも、君長無き時は、強は弱を殺し、富は貧を凌ぎ、長は幼を害ふ如き、大禍乱起りて、其生を安んずること能はざるを、憫み悲ミ給ふ、天神の大慈心より事発りて、遂に造化主天御中主大神の御正統と座す、皇美麻命を、天降りし政任し給ひて、大地球の総主オホミヤガミと定め給へり、是れを五大州中にて、君と云ふ者の原由とす是は古事記、書紀、天孫降臨の章義の本因の事、とある条、また先師の著れた、また真教説源、第三章なる君臣大る古史伝・玉禰・靈の真柱など合せ考ふべし

さて、諸の神々等の、造物主の大慈心を御心として、蒼生を愛憐し給ふことは、伊邪那岐大神の大詔勅オホミコトに、愛しき青人草の、苦瀬ワサセに落て

苦悩クルンまむ時に助てよ、と詔へる事、また天照大御神の、愛アヒしき蒼アヒトクサ生の、食て生活イクべき殺モトぞとも、又健速須佐之男大神の、愛アヒしき人アヒトクサ民の、奥津オクツ棄尸スナベに、臥アさむ具ソナヘとせよ、などとも詔ミコトノコトへりし事の迹に就ても、蒼生を愛憐し給ふ大御心の程は、窺ウカガひ奉られ、はた百姓と云ふ漢文字カネモジに、大御宝オホミタカラてふ古言の残れたりても、人民の大切なること、固より炳ヒシ焉し、是を以て、三種神器は尊しと云へとも、大御宝に比較すれば、却て軽しと云ふへし、若此申せば、甚だ畏カウき様なれとも、大御宝の重き故に、其を治ツむる御璽シたる三種神器の重きなり、この神器の重オモからざれば、天下大乱の基となりて、人民その災害を被るこれ三種神器の所以決して動なり、此れに因て、これを見れば、三種神器は、大御宝の故を以て重く、大御宝は、三種神器に因りて安し、と謂ふへし、されば、大御宝と三種神器とは、実は軽重すへからざる程の大切なる物なり此事も、玉璽に委しく論はれ、是は其本源を推尋すれば、全く天御中主大神の大御心より出させられたる大義にして、天照大御神の其を奉承し

て、天壤無窮の神勅もありし程の事ならむと、窺奉らるゝ事也けり善く思ふへし、熟く想ふへし、世の学者等、動もすれば、天壤無窮の神勅を指して、天祖の遺訓の如く、云ひはやりし以前に、決して御教訓の言には非ず、其は素より、天地剖判あざり給へりし事、論を待たず、其大御心を、皇座靈大神伊邪那岐・伊邪那美二柱大神の、受継せられたるを、又其御子、天照大御心を同じく受け継せられて、若る大御言を発し給へるなり、其は其ノ大御言に、宝祚之隆、当与天壤無窮者矣、とあるに心を留て考ふへし、果して、御訓戒の御勅ならば、争でか、天壤と無窮なるべんとは詔はむや、べんとあるからは、天壤無窮ならしむる大権は、天御中主大神の、冥々の中に、執り給へるなる事柄焉し、天孫降臨の時に当りて、天壤無窮の神勅無くば、皇統はかく無窮には伝はらしと、思ふ人も有りなむか、其は中々に粗漏なる眼なりかし、此事は神典を拝読するに、かく君臣の大義第一義の肝要なることなれば、おどろかし置なりの重き所以は、如何にと云ふに、譬へは、君は首の如く、臣は手足の如く、民は体の如き物なれば、首は首として、身体の頂上に戴きてあるへし、寿命イシチ長き人間なれば、時々は、首クビに瘡カサなどの悪疾も発すへし、其は謹て療治を加ふへし、兎も角も、首クビを斬て、接ツギ易る如き、拙ウツき業を為すべからず、首クビを接易る時は、必ず身体は斃るゝ物と知るへし、是理を推て、君臣名分の一定して、動すべからざる至理を、了解すへきなり、諸越モロコソビ人も、人身を小天地と云へるは、実にさる言にて、天地間なる大道、豈人身

の理に外ならむや、然るに、世には癡漢ありて、やゝもすれば、君位を動きさむと、欲するの論を發する者あるは、首を斬て、別に首を接むとする手段に均しと云ふへし、首斬れて体斃れ、君亡して民乱るゝは、理の当然なり、豈恐懼すべき事にあらずや、天御中主大神の大御心は、返すくも、民の為に君を動きさしと爲給ひつる事と伺奉らるれば、君民同治の大義は、先づ是に胚胎せりと云ふへし天神の民を重し給ふへしは、古事記に、天ツ神諸々ノ命以詔修理固成是多陀用幣疏之國、賜天沼矛而言依賜也、とある神勅の人民繁殖、天孫降臨までの事件に、係れる深旨あるに、注目して悟るへし、此大義は、古史伝に委しく論弁せられたりき、扱皇國は、随神言奉せぬ國なれば、君民同治といふ論は、無けれと、其実は、君民同治の意に近き御政体なること、譬へは、皇國の古に、地動説ちふ言奉は無かりしかども、天地初判の形状を、一物在於空中ととも、生於空中ともあるにて、自ら地動説なりしこと、明なるが如し、○或問、首切れて体斃るゝは、理の当然なり、君を動して、民乱るゝちふ事は、夫れとは異なるゝ非ずや、答、君臣の義は、天地に象れる者なり、古今に、天くだりて地となり、地昇りて天と成りし例ありや、近くは、堯舜湯武か禪讓放伐の迹にても、考見よ、莽操の禍は、君を動して、民乱るゝちふ事の明証にあらや、いでや、御代御代の国史に見えたる、君民同治の迹を、あらく云はむ、さるは、先づ皇孫邇々芸命の、天降まして以来、処々御遊行ありし様子に聞ゆるに付て、熟々按ふに、天津日嗣の尊き御身の上を以て、猶下民と

甚親しく爲給ひしは、固より天神の御趣意にそ座しましけむ、是は、君たらむ者は、如此あらでは、得あるまじき謂れなればなり、然るに、此れとは、按に相違して、諸の国神等は、更々至尊を狎侮し奉らざるのみならず、何れもく、天ツ神ノ御子、天津神ノ御子と、敬奉るを見れば、況して、其世に当りて、国民等の上の尊敬は、想像れたり、いかにもく、上下に通りて、其宜を得たる、至道と謂はざる事を得むや、斯て、火袁理命の御兄弟して、高田澆田を作ると云ふことの見えたるは、君臣相親しき事、論ずるまでも無き事にて、神倭磐余毘古命神を始奉り、御代くの天皇等は、事とある時は、何時も山川を跋渉して、親政の艱苦を厭ひ給はず、宛然として、近古戦国の大将の如し其は景行天皇・仲哀天皇・神功皇后などの、御ありさまを見て、古の大御代を、想、加、之、或時は、野外に行幸ましめて、遊獵し給ひ、或は軽々しく、賤女に問答し給へる事さへも有るなり、其は神武天皇より、遙に後れて、後ノ世の事ながら、大泊瀬幼武天皇略雄の、美和河の辺にして、洗衣

童女の姿容美麗なるを見て、誰女そと問ひ給ひて、其を
 婚し給ひし事、また、吉野川の辺にして、形姿美麗なる
 童女を見て、是も即て婚し給ひ、他日又其処に遊幸まし
 く、其童女に舞を舞はしめて、大御親は御琴を弾給
 ひし事、また春日に幸行せる時、丸邇の佐都紀臣が女、
 袁杼比売が道に逢奉りて、岡辺に逃隠れし故事、などを
 窺奉りて、古へ臣民と相親しく御座まし、形勢の、大概
 を想像奉るへし古の天皇等の民間の疾苦を知食して、美政の行はれ
 しは、此謂れなり、故無く逆行まし座して、妄りに尊
 貴を汚し給
 ふにあらす、然は有れども、当時の人は、皆推並て、天津
 日嗣の尊きことを知りて、是れを輕んじ奉る者一人だに
 有ること無く、到処として、天ツ神ノ御子、天ツ神ノ御
 子と、尊敬を加へ奉れるを見れば、惟神なる大道の、天
 下に行はれて、皇化の民間に洋溢せる効驗、是亦炳焉し
 古書を拜読する者は、時と勢とに眼を注ぐへし、古の大御代は、皇化海
 内に洋溢せしからに、或は天神御子、或は現人神と、畏れ敬ひ奉りしな
 り、是を以て、天皇も亦下情に通ずるを、大御心として、本文に奉たる
 如く、御遊行も在し事と、察し奉られたり、上代の御ありさまを見て、
 猥りに尊貴を汚し給ふこと、見成し、其を、美事と思ふは、思慮の足ら
 ざる也けり、民は君を尊み奉り、君は民を親し給ひてこそ、上下各其宜
 事を得たりとも云ふべけれ、此、掛卷は畏けれど、意富祁王・

袁祁王は、雄略天皇の難を避て、播磨ノ国民、志自牟が
 家に入まして、牛甘・馬甘に役はれ給ひしが、山部ノ連
 小楯か、一度其ノ詠事し給へるを聞て、其天胤に御座ま
 すことを知ては、二柱ノ皇子を、左右の膝の上に坐せま
 つりて、泣き悲みて、仮宮を作りて、馭使を奉り、遂
 に天日嗣治し食す御事とは為れり、是即顯宗天皇・仁賢
 天皇にて御座し坐せるが、今ノ世を以て、是れを見れば、
 如何にも輕たしきやうなれども、人皆是れに服して異論
 無きは、当時の人々、皆天胤の無比に尊きことを知り居
 るか故なり、斯れば、右に準して、古の天皇等の大御代
 には、凡て上下の際、甚親しくして、朝夕君と民と、晤
 語し給ひし事、察られたり、然はあれども、天威是れか
 ために損することも無く、將民間の疾苦をば、具に承知
 めして、天威ますく、尊く、民是れに親き奉りて、民情
 天聴に通達し、所謂君臣同治の化は、惟神言奉せずして、
 其中に行はれし事、いと炳焉かり、是皆神代の大道にし
 て、天御中主大神の君を建給へる御本意也けり、楮前に

論ぜし如く、君は首の如くして、首は切るべからず、君は動すべからすと云ふ理の上より見る時は、吾が政体は、君主擅制とも目すべく、或君主專治とも名くへし、又上一人より血胤を重んじて、中臣忌部、職を世々にする国体上より見る時は、亦貴顯專治とも謂ひつへし、然れども、神の大御言に、民を愛しき蒼生とも、大御宝とも詔ひて、民の為に大君を天降し給へる御本意より、眼を着て熟々窺奉れば、果して上代に民を束縛するの苛政なく、其迹の実に君民同治とも云ふべき様なることは、いとく明白きにあらずや、また此ノ義を推論して、其美意の極致を咀嚼玩味せば、上古の御政体は、即て共和政治の義を得ずとも謂ふべからず、如何にもく、吾か皇神の建置給へる道は、真理に合ひて、とほしろき、天下の大道ならじやは、然るに、儒仏の書、東渡以来、月を追ひ、日に従ひて、人心彼れか邪説に誑惑せられ、風俗是れか為に破壊せられて、遂に徳川氏以来の形勢となれるを、漢学者・洋学者等は、素よりさる物にて、皇学と名

告る輩さへに、其末弊を妄認して、君主擅制とか、君主專治とか、或は貴顯政治とか云ふ義をのみ、皇道の本体と心得、胆を落し、腰を抜かし、胄を脱、大自物膝折伏せて、尽く其学を棄て、彼に学ばむとする者さへ有るは、其淺見誠に憫むへし、甘草も咀嚼せざれば、甘き物に非ず、胡椒も齒切せざれば、辛き物に非ず、神典も着眼卑ざるべし、世の学者たち、大義を勿見誤りせよ。されば、今真に復古の大道を勃興し、君民同治の神制を継むと思はゞ、先づ第一に、皇大御國の学を以て、天下の惡習を一洗するを急務とすへし、復古とは、皇道を興し、天下の汚俗を一洗して、勇義朴直なる古風に復するの事を謂ふなり、叨りに、天皇の尊貴を下し給ふを、復古、古昔、皇孫、邇々芸命の、とのみ思ふは、俗学者の見にとぞ。天降ましてより、神武天皇・雄略天皇・顯宗・仁賢兩天皇等の大御代までは、天下の人民、朴直にして、匹夫匹婦も、天胤の無比に尊きことを、知らざる者無かりしは、如何にといふに、皇化洋溢して、云はゞ、滿天下に、皇学の行はれし如き、御代の形勢なればなり、此御代に、皇学いふにはあらねど、皇化の洋溢し御代なれば、然云ふなり、今ノ世となりては、人心儒仏に侵淫して、上代の神沢王沢共に、地を払て蕩尽せされば、皇学を興隆して、これを救済せ、此れに由て、これを觀れ

ば、皇学は、国体命脈の在る処にして、此学興れば、此
国興り、此学衰れば、此国衰ふる事、知者にして知るを
待たず、然れば、今万事日新の好機會に乗して、純粹な
る皇道を淬煉して、これを天下に施行し、以て天下旧染
の汚俗を盪滌せば、天下貴賤と無く、耳目一洗して、天
日嗣の尊きを瞻仰し奉ること、西洋各国の耶穌を神子と
して、敬礼を加ふるが如くならむ其効、今予が學び得し心術に
り以往、ハ山は裂、海はあせなむ、世なりとも、君に忒心、吾あらめや
も、と兼て誓ひし言の如く、満世界、耶穌を信し、洗礼を受とも、重石
丸は、依然として、天御中主大神を、行住坐臥に、信念し奉りて、決し
て天地八百万ノ神に無礼を加へ奉らし、又五大洲広しと雖、神子と坐す
りたは、只吾大君一柱に坐すちふ真理は、天御中主大神を信し奉らむ限
りたは、死を失て變ぜじ、何憐ノ、此心を推して、人に及し、満世界一
人として洩る者無く、尽く吾大、斯れば、天下の人心を匡正
して、朴直勇義を、古に挽回せむと思はゞ、神教を振興
して、民俗を鼓舞するに在ること、当今の急務と謂ふへ
し、此一事だに挙げらば、所謂神武遷都の聖代に復せむこ
と、鏡に懸て観るか如し、扱此の如くして、民俗一新の
実効見えたらむ上にては、在昔、諸ノ天皇等の、民間に
微行し給へる如く、今より以往、天皇命大身親ら、民間

の疾苦を訪訊し給ふとも、また賤民より、直々に天皇に、
己が窮苦の次第を建言し奉るとも、亦洋人等か説る如き、
君民同治の法制の細節目を立るとも、如何やうにても、
大本たる皇道の立たる事なれば、是れを潤沢せむに、聊
も妨害は無き事ぞかし、今世の學者等、大抵は皇國の御政体を立
石丸は、上代の神制を、君民同治の意はへなる御政体ぞと、言學するに、
然こそや、人の怪しみ思ふらめ、珍らしからぬ中に、
天には天御中主大神の神鑑ありて、明に御覽はしまし座せば、断然天御
中主大神に代り奉りて、生靈の塗炭を救ふ、古道の真面目を發揮して、
以て皇國を陳外にする、世の鈍學者等の迷夢を、警醒せむとするなり、
試に考見よ、人身上にて云はゞ、首は上にありて、四支百骸は、これに
付屬す、然れども、首は四支百骸を、指令する物、四支百骸は、首に奉
事するものにて、其実は、相待て用を為す者なり、人身の天御中主大神
より、出るからは、人道も、争でか天御中主大神に出ざらむや、然るに、
首の最上に在るを見て、四支百骸の疾病苛癢、相関係せざる物とするは、
世の鈍學者等の見なり、此の僻見破れされば、眞の皇化は、行はれ難し、
然は有れども、近世に至りては、間此僻見を破らむとして、却りて首を
さへに切りて、其を接易むと云ひ罵る者あり、是亦以ての外なる僻見な
り、天地の真理に於て、ざる道理の有るべきかは、頭を垂て熟々思ふべし、
扱古の天皇等の、洗衣童女などに、親しく語り給ひて、
天威是れか為に損せず、其尊きこと自若たる所以の故を、
猶近き事にて論してむ、島津兵庫義弘入道は、近古の英
雄なりしが、文祿・慶長の比、朝鮮征伐にて、彼國に罷
られし時、或日、加藤清正主の許より、書状到来せり、

爾時、義弘主は、士卒と諸共に偃臥して在りしか、末座に臥たる侍、一人起上りて、書状を受取り、次に臥たる人に渡しけるに、満座の侍、臥し乍順達して、義弘主に授ける、義弘主返書を認て返されたるが、侍ども又同じく、臥しながら順達して、末座の一人に渡しけるに、其人起て来て、加藤氏の使者に、返書を渡しぬ、さて加藤氏の使者は、其無礼無作法なる容体を見て、大に驚愕はて、爪弾して帰り来て、若箇の次第なりと、具に言上しければ、清正主は、聞くよりも早くも、横手を拍て、大に感心して云けらく、是全く島津家は、旧家なるか故に、君臣の礼を簡にして、おのづから君臣の分乱れず、事とある時は、臣の身を捨て、矢石を避けず、其君を守護するも、平生如此君臣の礼を簡にして、相親しきが故なり、島津氏の兵鋒の強きは、全く是故に因る事ぞ、予等も、島津の真似は、十分致度ことには思へども、微賤より起りたる身上なれば、謂れ無く、彼が行状に倣ふ時は、人の侮を受けて、臣下吾命を用ひざるに到らむ、是のみは、

島津氏に及ばずと語られしとぞ、嗚呼、此の島津家の一事を以ても、古の天皇命等の、民間に微行まし座して、天威の損ざりし所以を、準へ想像奉るへし、義弘主の君臣の礼を簡にせられし行状は、即て君臣同治の遺意に合へる物に非すや、されば、今の世となりては、兎も角も、皇学を振起して、天下の薄俗を激昂し、義氣海内に溢れたる上にて、君臣同治の古制は施すべくなむ加藤清正主の英雄すら、故無くして、島津義弘主の所為を学ぶ時は、其不可を知れり、今の俗学者等は、何の弁へも無く、徒に其簡略のみ美事と心得て、叨りに西施の鑿に倣はむと欲す、是清正主の取らざる処なり、○因云、皇道を恢復し、教化を宣布して、以て君臣同治の古道を、再興せむとするは、重石丸等の任なり、いたづらに、君臣同治の洋説のみを主張して、天下を易むと欲する者は、天御中主大神の罪人と云ふべし、学者此げぢめを、勿見誤りそ、猶立返りて、本編なる、真教説源の趣、を玩味して、君臣同治の本義を默契すべし、

明治四年辛未九月十三日夜稿 渡辺重石丸

〔同〕 八年乙亥四月三日再校

冊子原寸 縦二五種 横一七・五種 一六枚

一九〇六 久光公從二位宣下及太政官達

〔包紙ウラ書〕
御官位